

大津市歴史博物館調査報告書 12

大津百艘船万留帳 6

令和八年（二〇二六）三月

大津市歴史博物館

刊行にあたって

大津市は、明治時代末年の『大津市志』の発行以来、数十年に一度、時代の要請に応じて市史を編纂してきました。その度に多くの古文書・歴史資料が調査され、その歴史情報が蓄積されてきました。

現在、市史編纂事業を引き継ぐ大津市歴史博物館では、館蔵・個人蔵を問わず、貴重な文化財の調査を通じて歴史文化の情報を発信しています。その中で、以前より有志の市民の方々のご協力のもと、古文書・歴史資料の調査・解読を進めてきましたが、令和三年（二〇二一）度よりその成果報告書を順次発行してきました。

この報告書では、これまでに引き続き、江戸時代に琵琶湖水運の中心的役割を担った船持仲間「大津百艘船」によって記録されてきた「万留帳」のうち、文化九年（一八一二）から同一一年（一八一四）までの分をまとめました。これら留帳には、大津百艘船が対応した事案や物流の様子、大津代官や京都町奉行の要人との折衝、また寺社との贈答関係など、大津百艘船の活動が詳細に綴られています。

なお、最後になりましたが、本書の発行にあたり、解読・校正において大津古文書輪読会の皆様に多大なる御協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

令和八年三月

大津市歴史博物館

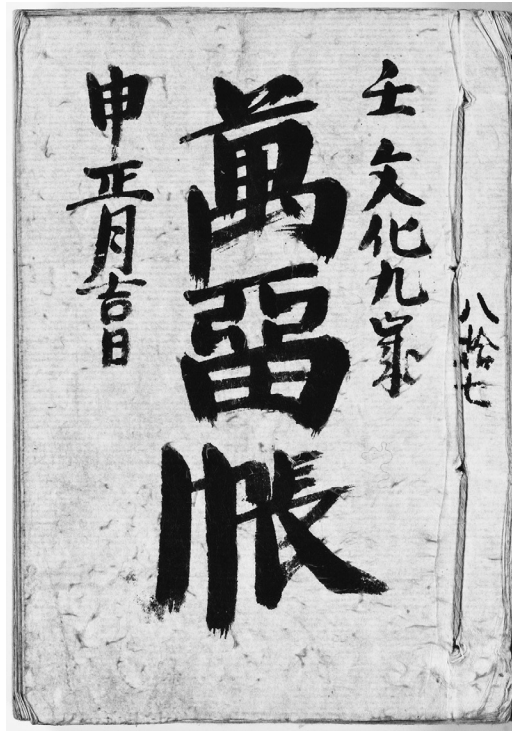
〔目次〕

刊行にあたって	1
目次・凡例	2
一、「万留帳」文化九年	5
二、「万留帳」文化一〇年	53
三、「万留帳」文化一一年	103

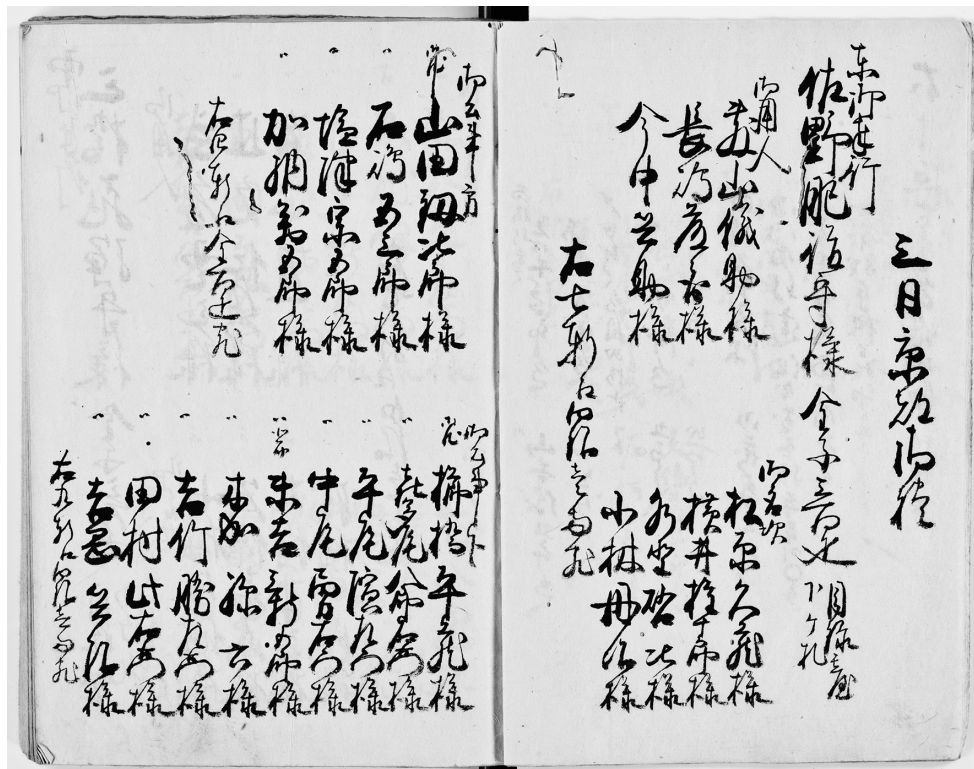
〔凡例〕

- 一、本史料集は、大津市歴史博物館が所蔵する重要文化財「大津百艘船関係資料」のうち「万留帳」の文化九年（一八一二）から同一一年（一八一四）の三冊分を翻刻したものである。
- 一、史料解読にあたっては、大津古文書輪読会の各氏の協力を得て、大津市歴史博物館の杉江進、高橋大樹、五十嵐正也、奥芝理沙が原本照合を含めた校正をおこなった。また本書の編集は高橋が担当した。
- 一、翻刻にあたっては、原本の体裁を尊重しながら、組版上の事情により、追込み形式とした。また、平出や台頭、欠字については省略した。
- 一、翻刻した文字について、変体仮名は現行の仮名に改めたが、江、而、与、者、茂などはそのままとした。また、*ㇿ*（より）以外の合字は仮名に改めた。さらに、旧字体・異体字については、固有名詞を除き、常用漢字に改めた。
- 一、虫損・汚損・欠損等による判読不能の文字については、その字数分を□で示し、字数不明の場合は「」として表記した。
- 一、翻刻にあたり、適宜、読点を施した。また、傍注について右側に（）で括弧して示した。その際、誤字と思われるものは正字を付し、原本どおりの場合は（ママ）、（衍）とした。さらに、墨消し（ミセケチ）の場合は、その文字に網掛けをほどこしてある。
- 一、史料には、賤称・蔑称などの差別用語とされる言葉が使用されている場合があるが、当時の社会情勢を正しく認識するためそのまま表示したものであり、差別を容認するものではない。読者においてはその点をよく理解され利用されたい。

〔謝辞〕本史料集の編集・発行にあたり次の関係者より協力を得た。
東幸代（滋賀県立大学人間文化学部教授）



「万留帳」文化9年（表紙）



「万留帳」文化11年

一、「万留帳」文化九年（二八一二）

（表紙）

（後筆之）
「八拾七」

壬 文化九歳

万留帳

申 正月吉日

（表紙見返し）

目録

- 一、坂本善五郎艀流失之事、
- 一、河村庄七抱屋敷裏石垣直し候事、
- 一、上組治兵衛船早番かり切ノ戻りニ旅人乗戻り捨身致候事、
- 一、一本松茶屋五郎右衛門居宅普請ノ材木小渡し、
- 一、坂本西教寺万日諸留書、尾花川印札ノ事、
- 一、伊庭村船年寄同村藤兵衛と申者へ小舟為遣度段申被来候事、
- 一、橋本町年寄源助嶋ノ関砂貫ニ来り候事、
- 一、木濱、赤ノ井人渡し舟一件、
- 一、今堅田村宇兵衛鳥獵ノ事、
- 一、三井寺大僧正伊勢参宮ニ付舟差出し候事、
- 一、栗太郡大江村金藏艀流失御廻状、
- 一、郡山藏裏石垣築出し書付取之候事、
- 一、小長谷和泉守様石山筋御順見ニ付御役所ノ先例ノ留書御尋之事、
- 一、矢橋勘三郎舟新堀先ニ而帆柱打こかし乗合旅人ニ当り怪我致し候事、
- 一、今津舟山王神事之神輿舟ノ櫓貸呉候様頼ニ見へ候事、

- 一、荷問屋仲間と当仲間と貴布祢講取結候事、
- 一、赤ノ井ノ船株願呉候様申来候事、
- 一、御茶壺御廻状、
- 一、八幡町中嶋屋新太郎、彦根他屋と風呂屋ノ関とノ間堀中ニ而水死之事、
- 一、片田町組ニ奉公致居候五兵衛、上組小舟持市兵衛方へ養子へ参候事、
- 一、松本浦長持持越一件、
- 一、河村屋喜助裏石垣繕ひ之事、
- 一、勘三郎舟、八郎兵衛船、三郎兵衛舟紛失荷物御届ケ書、
- 一、当申年ノ五ケ年之間御儉約ニ付、舟賃弍割減し候事、
- 一、船頭町会所普請之事、
- 一、石原様御息女御死去葬礼ノ事、
- 一、当役ノ下駄、傘拵候事、

（本文）

文化九壬申年正月二日、年頭御礼

石庄三郎様 金子弍百足 目録台ニのせ下ケ札付

御元々

柴山泰藏様

同

内堀繁太様

御町役

曾根源治郎様

同

篠田牧太郎様

御船方

三宅新右衛門様

右五軒へ金百疋つゝ

御目附并小頭兼帯

川嶋惣右衛門様

手塚傳十郎様

柿沼小平太様

小頭

多賀喜曾太様

舟方下

北出雲平殿

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

小野宗九郎殿

町代

堀猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

右九軒へ銀壹両つゝ

当駅肝煎

吉本弥四郎殿

山本倭五郎殿

御足輕

稲葉半七殿

小遣衆式人

右五軒へ鳥目廿疋つゝ

御門番吟助殿 五百文

御内義へ貳百文

白崎久太夫様 御門内新建

御蔵番三人 平蔵町年寄

御組屋敷不残 右手札計二而

当町内年寄

貝屋七兵衛方

右手札計二而

右之通、与次兵衛、太郎兵衛相勤ル、供太七

正月三日、膳所お礼

船奉行

永田郷右衛門殿

外良餅式卓(樽)

壹卓(樽)

硯ふた二のせ

壹匁つゝ

右八御在宿二付、直様玄関ノ間へ通り、帯劔二而年礼御祝詞相述候上、昨冬不相変御目録被下候、一札申述候処、永田氏被仰候二ハ、是へ御通し申度候へとも、折節取ちらし、何之風情も無之との御挨拶有之、勝手口方茶たはこ益出され、礼終り罷歸り候事、

舟方下

田原喜右衛門殿

同壹卓(樽)

阿閉権三郎殿方へハ勤ルニ不及候へ共、初前右懸り二付、御同人二限り御在役中手札二而相勤メ可申事、七兵衛、三郎兵衛相勤ル、とも新八

三日、京都御礼

東御奉行

小長谷和泉守様

金子三百疋

目録台

御用人

御取次

小林八左衛門様

山田嘉藤治様

赤間三郎右衛門様

吉川吉助様

岡田長兵衛様

飯塚五郎作様

岡田長兵衛様

迎田栄左衛門様

岡田長兵衛様

迎田栄左衛門様

右ノ七軒へ銀壹両つゝ

御公事方

御公事下

山田釵次郎様

櫛橋平藏様

石嶋五三郎様

中川定右衛門様

塩津惣五郎様

喜多尾八郎右衛門様

加納万五郎様

平尾演左衛門様

右四軒へ金百疋つゝ

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

右九軒へ銀壹両つゝ

西御奉行

三橋飛騨守様

金子三百疋

目録台
下ケふだ

御用人

御取次

武藤貫三様

小林与作様

辻本仁左衛門様

久保嘉十郎様

松本雄太夫様

吉原直様

右ノ六軒へ銀壹両つゝ

御公事方

御公事下

深谷平左衛門様

上田八藏様

不破伊左衛門様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

廣瀬佐野右衛門様

飯室助左衛門様

酒井宗助様

下田耕左衛門様

山田傳左衛門様

右五軒へ金百疋つゝ

浅賀和作様

杉原作十郎様

右七軒へ銀壹両つゝ

町代

田内与助殿

銀貳両

筆工

奥田九右衛門殿 同壹両

下町代

藤沢傳六殿 鳥目廿疋つゝ
藤村佐市殿

東西御門番 三百文つゝ

東西中番中へ 三百文宛

上八町代中へ 五百文

下町代中へ 五百文

小番へ 三百文

追分丸や四郎兵衛 百文

山科大津や
孫兵衛

百文

宿鍵や佐助へ 三百文

同 下女へ

貳百文

金三両三歩

五百文 二

銀貳両 壹包

三百文 六

銀壹両 三十

貳百文 三

百文 二

右之通、孫右衛門、六兵衛相勤ル、供清吉、荷持喜兵衛

正月四日、初寄り、帳場勘定仕立、

但し三日夕之臨時ニ付出役も有之、無人ニ而奥ニ委敷記し有ル、

翌五日ニ相成ル、例年之通中飯有之、
鱈ノやきもの
かき汁

六日、例年之通組ノ帳どじ、はまぐり吸もの、

七日、惣番積、雨天ニ付翌八日ニ相成ル、豆腐ノ吸もの、御役所方御配符 覚

一、小艦壹艘

滋賀郡坂本浦之内
芝村舟主善五郎

但し楫壹挺添有之、

右船芝村浜先ニ繫置候処、当月朔日右場所ニ不相見候付、段々相尋候得共不見当由ニ而、浦々吟味之儀願出候間、浦限り相糺、右舟有之候ハ、舟主へ及通達可相渡候、此配符浦名下令請印、早々順達留り所方可相返候、以上、

大津

正月八日 御役所印

松本浦方伊庭迄右浦々庄屋、舟年寄

右御配符同日松本村舟年寄清吉へ相渡ス、使廻り清吉

一、右同断、壹通 大津浦方長沢迄、右浦々庄屋、舟年寄

大津浦請印いたし、次浦坂本へ廻ス、則比叡辻新六へ相渡、右艦下笠浦辺へ流し行有之候ニ付もらい来り候趣、正月十三日ニ爰元へ艦主届ケ二来り候事、

大津

差紙 御役所

矢橋浦

尋儀有之間、明十九日早朝一同罷出可相届、若於不参者可為越度者也、

大津

正月十八日 御役所御印

矢橋浦

船年寄

勘三郎

弥左衛門
右御差紙十八日午ノ上刻到来ニ付、即刻廻り清吉ニ小船入番所迄為持遣し、矢橋浦へ早々相届ケ候様申遣ス、

正月十一日、例年帳固メ祝儀日ニ御座候処、昨九月より松本浦一件今以論中之事ニ候得ハ、猶も公辺之遠慮も有之、夫故当日延引いたし候、尤右式日ニハ定例、尾花川舟方惣代、上下小舟惣代、関舟治兵衛坂本新兵衛、中間へ礼ニ出候節持参ものも有之候事ニ付、右当日延引之趣前広ニ申遣し置候、然レ共、中間先規より之式日ニ御座候間、ひそかニ役人不残神酒を戴き相祝ひ候事、

正月十五日、芦浦御礼

一、観音寺様

昆布のし

扇子三本入壱箱

御逢有之、不相変御節子被下候事、但し扇箱くり足台ニ重ぐり

西川五郎兵衛様

片岡喜右衛門様

久松清右衛門様

右三軒へ扇子壱箱つゝ台ニのせ、常のし付、

右之通七兵衛、忠兵衛相勤ル、とも与八并右忰太七、見習旁連ル、

一、御目附為見習佐久間又兵衛様被蒙仰候ニ付、毎も之通り白銀壱両孫右衛門持参致候、

申正月廿日

覚

- 一、百廿四銅 壹つ
- 一、四十八銅 壹つ
- 一、三拾六銅 貳つ
- 一、廿四銅 三つ
- 一、十二銅 十九

右之通奉納仕候、以上、

申正月廿一日

貴布祢御社中

大津

百艘

正月廿一日、貴布祢御神酒未松本一件中二付、ひそか二役人不残相祝ひ候事、

但シ、十一日帳固メ式日礼受候、尾花川舟方、上下小舟、坂本新兵衛、関舟治兵衛ニも右之仕合ニ付延し置候へとも、段々月末ニ相成候故、今日礼受候、尤例格持参もの、左之通、

- 一、諸白式升入 壹樽 尾花川舟方惣代
- するめ 式把
- 一、酒式升入 壹樽 下組小舟中
- 一、まんちう 百 上組小舟中
- 一、酒式升入 壹樽 関舟治兵衛
- 一、諸白式升入 壹樽 坂本新兵衛

右之分勝手ニおゐて例之通祝ハセ申候事、

関ふね治兵衛、坂本新兵衛ハ、台所并座敷之給仕世話いたし候、

今日北ノ町組市兵衛、旧冬養子被致、則同人子息市三郎を御礼顔見世相濟、但し中間へ持参もの、大鯛壹枚、はまぐり、

今日堅田町組三郎兵衛、当時勝手勤メニ付、右会釈与して壹封差出され候事、但し金百疋、

昨春見習出勤之貞太郎、清治郎、段々出情ニ付、相談之上今日より本役ニ居らせ候事、

一、升や町丁子や九兵衛方より、例年之通臈まんちう三十被相送候事、

一、南鐮壹片 是ハ出火之節蔵所裏へ舟を廻し呉候との兼而頼ニ付、

如此、

右ハ中保町小笠原蔵ノ中間へ参り候分、三郎兵衛方ヲ持参被致候、

一、米屋町河村屋庄七抱屋鋪北側、塩屋町ヲ東江式軒め、右湖水端石垣損在之候処、全躰古券地面ノ壹、式間も引込在之候付、此度修覆いたし候ついで、同様持出し申やう相頼候へ共、新規之義ハ外ニ差支ニ相成候間、当時差支ニも不相成義ニ候へハ、少々之義ハ格別目立候義ハ無用ニ被致、只在来通之普請ニ可被致様申談遣候而、則別紙書付取之置候事、

正月廿日、与次兵衛、太郎兵衛、庄七立会見分いたし候、古券面六十式間余在之、津内浜側一、二ノ長間之屋敷也、

一、正月三日夜、上組次兵衛やとい加子新蔵、亀吉、白銀屋陸助殿早番かり切戻り船ニ、矢橋ヲ暮合旅人三人ノせ戻り、新濱浜沖二而壹人捨身致候て、夜四つ時過大津へ戻り、右之段上組并治兵衛ヲ為相知、仕来り通取計候処、近来御役所表振合かわり、死骸相知し候ハ、京都ヲ御検使在之趣御内意被仰付、其外御差函通ニ取計、正月廿四日一件事済いたし候、

但右一件中長談ニ付、別帳ニ記帛へ入在之候事、

一、町代遠藤仁右衛門殿叔母死去二付、香典白銀壹両、与次兵衛持参いたし候、

正月廿六日

一、二月二日、寺門領之内、錦織村字一本松茶屋五郎右衛門義、此度居宅建替致候二付、右財木觀音寺町香湖堂(カ)ニ而木拵致、尾花川松葉舟之もの共相頼、壹本松迄小渡仕、尚又五郎右衛門下地之古家坂本へ売払申候二付、右乗前之義何卒少々ニ而用捨二預り度由、本人并松葉舟之もの共俱々相頼候二付、尤右五郎右衛門義、海辺殊ニ放家二付、折々弱風波之砌舟便りニも可相成与、其意含格外之用捨いたし遣候事、但し小渡し凡三拾駄代四百五拾文、坂本行凡拾五駄代九匁、此所へ◎七百文請取申候事、

大津

差紙 御役所

滋賀郡
松本浦

右御差紙九日申ノ下刻御役所カ到来、即刻為持遣ス、二月九日申ノ下、使清吉、

当三月十日ヨリ西教寺十一万日二付、去ル安永西年帳面十万日之節取計方委敷相見へ不申候二付、依之、仲ケ間内尾花川忠兵衛方ニ在之候覚書共、左ニ写置、尚又当年義ハ追々委細ニ書留又可申事、安永六西三月六日ヨリ同廿日迄十五日之間、西教寺十万日廻向二付、参詣人唐崎江渡船為乗方覚(マ)右之

右渡船と申唱候義ハ、延享五年従御役所御尋之節、矢橋カ大津、

木濱カ堅田、今津カ竹生島渡し、

右之外湖水ニ渡し与申義無之段、書付差上在之候間、此旨相心得可申事、

一、朝五ツ時、艀舟不残片原町江為相廻、船役艀数ヲ相改、船頭壹艘ニ壹人宛艀ニ為乗置、ひねり鬮ヲ壹ツ宛銘々ニ配り為取、船数都合之時一ときニ鬮ヲ為開、於番所ニ壹ばん誰、式番誰と書記置而、異論無之様ニ順々ニ渡船相立候、尤渡シ場者片原町より北之五兵衛軒迄むかしの通り為乗候、すへ鬮ニ当候船者、とくまん川板橋ニて洩人之分ヲひらい乗せ、勝手次第帳生ケ(カ)二いたし候、

一、艀壹艘ニ乗人十八人宛之定、但し船頭者式人宛、老人之船人堅乗せざる事、貸切之勿銭者壹艘分ニ相立、十八人分取之、

一、船賃者唐崎江十式文、七本柳十五文定、

一、人揚り場ハ片原町ニ相定メ、坂本船方へも申遣し、夜ニ人候得者高灯燒所々ニ建置、怪我なき様ニ世話致候、

一、船番所者片原町弥三兵衛前ニ相建、百艘より参候掟書ヲ張置、但し小船之屋形也、まく、高灯燒(マ)、らうそく、炭等之類、百艘より参ル、

出船見改人数艀船順番帳ニ記、此帳面ヲ以テ勿銭勘定致、勿銭帳二付申候、尤ひらい乗、坂本ふね共、

一、船方当役船ハ、勝手ニ式艘宛為乗申候、

一、三人之札觀音寺町七枚も同前ニ鬮取申候、

一、此度万日二付、坂本江参候事不相成趣、津内艀持江百艘ヨリ廻状ニ請印取被申候、

但し觀音町(寺脱カ)まで、尤無扨方カ被相頼候得ハ、百艘番所カ其艀

二切手参候故、当番所ニて請取申候、

当町年寄庄兵衛殿ヨリ、酒肴番所役人中江為見舞と被送候、小歩キ六助小使之ため昼夜付被置候、百艘年寄次郎右衛門殿折々見廻り被申差図被致候、

一、万日中無滞船渡し致候故、船当役為心得と鮒五枚、百艘次郎右衛門殿江持参被致候、是者格別のこと、

一、百艘ヨリ酒三升、当町年寄、同船方役人江挨拶被致候、右之通無滞相済申候、

船番所

船方当役

半四郎

彦左衛門

世話人

長次郎

安永四年三井寺觀世音開帳二付、唐崎、坂本江艘渡候義二付、尾花川惣代より取置候一札之写、左之通、

但し本紙者尾花川忠兵衛方二仲ケ間惣代ニ取置之、

一札

一、当町之義者、百艘御仲間より前々ヨリ預御了簡、坂本江参詣旅人艘渡し仕候、然ル上者、怪我、あやまち無之様随分大切ニ可仕候、尤日和悪敷節者仕間敷候、勿論旅人対しかさつケ間敷義、喧嘩口論無之様相慎可申候、若心得違もの有之候ハ、何時成共御差留メ可被成候、已上、

尾花川町

舟方年寄仁兵衛印

同 太兵衛印

安永四年未四月

百艘仲ケ間御衆中

惣代忠兵衛殿

町惣代 長次郎印

寛政七卯三月三日ヨリ四月廿二日迄五十日之間、三井寺順礼觀世音御開帳之節、唐崎、坂本江艘渡し勿銭帳之写、左之通、

但し勿銭帳本紙者尾花川忠兵衛方ニ在之、

一、此度順礼觀世音御開帳有之二付、参詣人唐崎へ渡之事、百艘番所へ頼二弥兵衛遣し候処、如前々札ヲ以申分出来不致様ニ申合渡し可致様年寄中申付有之故、いよく其通申究メ渡し致候事、其節前々之通津内艘持中江渡舟不相成之趣、廻状ヲ以申被触候事、

当年年寄

南 治郎兵衛

中 多兵衛

寛政九丁巳三月廿六日ヨリ四月十日迄十五日間、坂本来迎寺三万日回向二付、参詣人渡し船勿銭帳、定書并二其節事共荒増し二留置、但し勿銭帳本紙者尾花川忠兵衛方ニ在之事、

一、乗合者人二付唐崎江十式文、

一、同七本柳江十五文、

一、勿銭者人二付^三式文宛 尤当年ハ参詣人不在二付式文つゝ取之候、右帳面之通、

一、坂本船者前々之通三文つゝ之事、

一、艘者艘二乗人十八人之究メ、

一、艘者艘二加子式人つゝ、但し格別之老人、又ハ子供者堅無用之事、

一、かり切勿銭、

一、乗せ方ハ片側町江艦不残相廻し、鬪取ヲ致し其日之一、二を定候、

但し三十九枚之下札、觀音寺町七枚之下札相改メ鬪致し候事、

此札ハ忠兵衛、長兵衛、次郎左衛門名前也、

一、船方当役式艘つゝ鬪なし二前々之通勝手二のせ可申候、

右前々之規、如此相究メ候、

一、船番所片側町平兵衛之前二小舟屋形ヲ以しつらい、舟方役兩人宛相詰候、

一、津内所持之艦ニて坂本江勝手ニ參候義不相成趣、艦持中江前々之通百艘ヨリ触状廻り申候、

一、町方無抛方之頼之分ハ百艘より切手參、番所ニて相改通し申候、

一、万日中百艘肝煎中日々一兩人宛見廻り二見へ申候二付、折々酒出し申候、

一、舟方三十九軒渡シ印札之義、先年之火事之節内拾三枚紛失致シ、不足有之処、此度万日二付百艘江相願候処、十三枚出来、御年寄与次兵衛殿、肝煎孫右衛門殿御持參被下、三十九枚之都合致し候故、銘々江相渡し、此後大切二可致之趣申示シ置候、右為挨拶と鮒五枚番所江つかひ申候、

一、万日相濟候処、先年西教寺万日之節ハ、百艘より舟方年寄江酒三升參り候へ共、此度其義なく候二付、町より酒式升舟方年寄江つかひ申候、

一、先年西教寺万日之節者、町分より酒肴等被氣付、將又小歩等昼夜被付置候へ共、此度ハ其心付も無之故、渡し場入用、酒代等町懸り二致し候様、夫方衆方被申候二付、舟方年寄江遣し候酒代、肝煎衆江出し候酒代共、町払二致シ候事、

但し印札之礼二鮒五枚之代ハ、舟方方遣し申候、

右万日之儀ハ、為差參詣人も無之候得共、相定り候義故、為後二相

記之置候也、

尾花川町

年寄弥吉

舟方年寄 長兵衛

同 又兵衛

右之外順番帳、別錢帳二冊、尤來迎寺万日共、忠兵衛方二在之、委細不写、

服部陣家

上田弥吉様御家来

高谷九郎右衛門

正月
南鐮志片
右ハ木濱村江渡船被致候挨拶、是迄西村多右衛門殿代り致、

一、当三月西教寺十一万日二付、尾花川渡船方は迄前書二記在之候通仲間方印札三拾九枚相渡し在之処、近年火災二付十四、五枚焼失致候、此度都合二いたし呉候様、二月十七日尾花川惣代兩人頼二被參候、右印札之義ハ、船方三十九軒二限り相渡し置、右印札無之仁は渡し不致候ため取締旁相渡し在之処、年経レ已前之事共致悪却心得違之仁も在之候而、鹿抹二致被置紛失いたし候而ハ不相濟義二候へ共、近年火事二取失候段ハ無抛事二候間、近々取揃相渡し可申候、随分大切二致被置、此後無故失ひ候義ハ遣し不申候間、くれぐれ取付旁申聞せ、尚又已前之万日之節取計方、万端其外条目之趣為申聞候処惣代被申候ハ、私共も已前之義ハ覚へ不申、町内二もたんぐ替り候而、何か不案内候者共多く、心得違も御座候間、被仰聞候通り一同江為申聞、取締り可仕間、何分印札之義ハくれぐれ相頼候様被申歸候、

此続奥二在之、

一、二月十九日、伊庭村船年寄甚左衛門被見江、此度藤兵衛と申者小丸船壹艘持立大津通ヒ、其外北浦ヲ重々渡海仕度旨、已前庄兵衛、善三郎式艘御ゆるし被置候例も存候へハ、先達而門九郎同様御聞濟被下度御頼申上呉候様、右藤兵衛段々相頼申候間、不苦義も御座候ハ、今一艘御差赦被下度被申聞候、則藤左衛門、太郎兵衛、源左衛門、長兵衛も立会居候而申聞候者、当時門九郎義近來御頼二付、浦方弁理又ハ三ヶ浦取締旁猶予いたし候義二候へ共、右門九郎何か不弁之男二而、自身引請居候浦方之訳もろく二不相弁、故二外制度も不行届之事も候へハ、是迎も長々ゆるし置可申義も難計、然る上二又外二吉艘到來候而ハ、重々八幡浦迎も差支之義も在之候由、兼而申居候事候へハ、容易二取用ひかたく間、此段御承知可被成候而申聞候処、甚左衛門被答候者、随分御尤二奉存候、已前庄兵衛、善三郎二艘御座候義も在之候付、旁御頼申上候へ共、仰之通差而三ヶ浦之御為二相成候義無之、自分勝手而已之事候間、此旨得と可申聞せ候へ共、相頼候ものを取次いたし不遣も如何候付、今日御頼二罷出候、若又此上之義御座候ハ、御頼申上段被申聞被歸候、

門九郎義不束之者二御座候へ共、御用捨被成置被下度御頼上候、万一不法義も御座候ハ、船方へ被仰下度急度申し付候様、藤左殿へ右甚左衛門被申居候、

一、三月十八日、是迄船方懸御役三宅新右衛門様町役被蒙仰候、例之通金百足上ヶ申候、

一、船方跡役岡田大八様へ被仰渡候、 太郎兵衛、与次兵衛連名、
同金百足上ヶ申候、 同断

一、三月十六日、橋本町年寄船屋源助、与次兵衛宅江被來被申聞候者、此節町並そんし候二付、御高札場前々西町境門限迄置砂いたし度、嶋関砂所望致度段被申聞二付、与次兵衛、善兵衛旧冬川浚ノ節も一切捨砂無之、勿論高水二而川中も水入二相成、右之様子二付御断申入度申達候処、御尤二奉存候、左候ハ、外二而工面いたし可申様被申之被歸候、然る処翌晚九軒町新蔵來り、此度水上町普請場少々在之、縁類之者二付、無抛相頼申候ハ、嶋之関堀中二嶋二相成候所少々御座候間、此分砂少々計貫申度申之二付、前日橋本町之訳為申聞、併堀中之砂ハ為取申度候へハ、橋本町へ懸合、其上双方取候様可致段為申聞、則其日会所へ源助呼二遣候、堀中二少々計在之候間、不苦候ハ、右之分計新蔵と申合せ被取寄候様申聞せ、しかし実二深切を以無抛遣し候事二御座候へハ、右二紛し定地面之砂決而被取申聞敷急度及引合候処、御懇忝奉存候、其通り町分へ申咄し可申候、則今日も船方二不寄居候紛働御座候由申被申歸候、無程源助被來、誠二御懇情之段千万忝奉存候、町分一同宜御礼申上候様申居候、少二而も不苦候間、申受候様仕度旨被申聞承知いたし遣候、

右二付新蔵方ハ十八日十九日、廿日兩日二取、少々之義二而宜候付、則廿一日新蔵礼二來り申候、酒二升切手、小鮑三つ持参いたし、橋本町ハ迎も大造成砂故、右様二而ハたり不申、少々廿日二移候而運ひ候へ共、跡ハ中寺浦外邊肩二而運ひ候由見受候、廿一日橋本町年寄源助被來、嶋関堀中之砂昨日壹艘分、船二而運ひ候へ共、跡ハ水中二而取兼候二付、最早此限二而御断申上候様、礼二來り被申候、

一、二月廿六日、赤井太右衛門被申來候者、木濱を渡し舟之義二付、旧年方被御願申上、段々御糺御座候処、開發、大曲、矢嶋者向後人渡

し舟不仕旨、昨年御請印被致候へ共、赤ノ井之義ハ是迄坂本西教寺

万日之節迎も、木濱右右躰渡し舟不為致段申懸ケ候義も不仕、又此

度外同様受印致候而ハ、大津、堅田、八幡三ヶ浦之覚召も難計、依

之此節迄段々御日延致置候処、最早せつパニ相成、何分右致間敷

段、受印いたし候様被仰渡、勿論木濱ノ者共ハ、赤ノい浦江廻船

請不申候へハ、可然段申聞候付、無抛此上百艘方江申談候上、御返

答仕度旨御断申上、今日之処引取申候、如何仕可然哉之段被申聞候付、

廻船之義ハ荷物人共同様之義ニ候へハ、赤井浦方人のせ候義決而相

止ミ候而ハ、廻船之響ニも相成、旁差支之義も在之候間、木濱呼ニ

遣し、様子承見可申哉之段申聞候処、太右衛門被申候者、何卒木濱

御呼被成御聞被下度段被申之、則呼ニ遣処、木濱村太郎兵衛被来致

面談、此度之義庶而被申立候而ハ三ヶ浦之差支も可有之ニ付、只木

濱之差支ニ不相成段熟談被致候而ハ如何候哉、後者宿ニ而被致相談

いつれニも返事可被来申様申遣候処、御深切忝奉存候、仰通事を好

候義ハ無之候間、於宿元相談いたし、御返事可仕様被申帰候、無程

太兵衛被来覚召候段忝奉存候、しかし最早御書付御取メ一条之義ニ

候間、此度之義ハ御構ひ被下間敷旨断ニ被来候、

一、翌廿七日、右ニ付船方御懸り三宅様、柴山様へ、与次兵衛御伺ニ罷

出候、

一、同日、与次兵衛 御役所江罷出三宅様へ申上候者、木濱渡方之義赤ノ

お太右衛門より委細申咄候付、品ニ右三ヶ浦響ニも相成候而ハ如何

ニ奉存候間、下々ニ而熟談為致度奉存候間、乍恐私共へ御下ケ被下

候様申上候処、暫扣候様被仰渡、奥ニ御相談在之、左候ハ、願之通

聞濟、其段兩浦へ申渡可申間、左様相心得候様、尤段々及取メニも

候事故、わかやぎ不申候様ニ相心得取計可申段被仰渡引退候、

一、二月廿八日、從御役所左之書付参り候故、今堅田釣漁師年寄江添状

いたし遣ス、

「木濱渡し一件之義ニ付、御役所へ罷出候序に三宅様方与二兵衛 江

渡し被成候、」

今堅田村

宇兵衛

右之もの鳥獵差免、鳥札相渡置候所、去未年分運上不相納、鳥札

書替も不申出候間、当時鳥獵相止メ候歟、又者死失等いたし候ハ、

早速返上可致義ニ付、右早々申出候様可相通事、

申二月

右二月廿九日飛脚船藤七へ渡し候処、三月一日受取書持参いたし、

釣漁師ノ今堅田ニ而ハ無之、出来嶋ノ方ニ居候藤七申之候、

一、廿八日、八つ時御役所方呼ニ来り、与次兵衛、太郎兵衛罷出候処、

三宅様被仰聞候者、弥赤之い、木濱呼出し、先刻願之通申渡候間、

可得其意旨被仰渡候、尤此度之義ハ渡し一通りニ而、三ヶ浦但大

田、者別段之事ニ而、只無浦之赤之い容易ニ旅人をのせ往辺いたし

八幡、候義を糺候事ニ候へハ、此段相心得候様被仰渡候、

右赤之い浦之義ハ、大津、堅田、八幡右三ヶ浦廻船之浦ニ候処、此

度無何心諸浦旅人之往辺差止り候而ハ、後世心得違いたし、諸事木

濱之自由ニ相成候而ハ不相濟候故、此度之取嚙被仰付候様、達而

御願申上候而、御聞濟被下候段、難在事と今日赤之い江被仰渡候

者、当村居住ノ者、又ハ得意客、或ハ近廻り之参詣候人之分ハ不苦

候、しかし参詣人ニ而も宿懸ケニ出候へハ、旅人ニ紛シ難見分候へハ、

村住居之者五人、三人之得意客、無拋相頼無錢二而相渡し遣候分ハ格別事ニ被仰渡候、旅人ニ類し候者ハ御差留メ被仰聞候、

一、赤い太右衛門孫左衛門来り、段々御苦勞奉存候、何分是迄仕来り通、無故御聞濟被下度、段々御願申上候へ共、今日被仰渡候趣二而ハ迎も難相叶、此上は百艘之取計を以如何様被仰聞候共、異義仕間敷間、何分内濟ニ相成候様相頼被申候、

一、同廿七日、木濱太兵衛、源五郎被来、浦趣意相立候様取計くれ候様頼ミ被申候二付、然る上ハ如何之義ニ而下濟被致候哉、無遠慮被申聞以其意赤之いへ懸合可申段申聞候処、明朝返事いたし可申間、夫迄相待呉候様被申、宿へ被歸候、

一、廿八日朝、存入候書付木濱を持參被致候二付預り置、迎も可治書付ニ無之候付、与二兵衛、太郎兵衛御役所へ罷出、右書付并百艘方ニ而案紙拵而通三宅様へ御覽入候処、木濱を差出候書付ハ難取用候間、百艘ニ而下書之認方ニ而相濟可申義ならば可然段被仰渡候、右両通下書奥ニ有之、

尤享保年中開發一件之節、木濱を差出候書付、今日木濱へ返し遣可申間、引上ケ為心得披見いたし候様被仰渡候、

一、廿八日八つ時、木濱太兵衛外二老人、右享保年中但五年也、右書持參いたし被見せ候二付、此方願下ケ之案紙見せ候処、随分尤之義ニ御座候、しかし宿ニ病人御座候間、暫猶予いたし呉候様被申聞被歸候、案紙もかし候処、直様もどし二見へ候而、頓而御返事可申段断被申越候、

一、廿九日朝、木濱太兵衛、勘兵衛被參、何分此間中差出置候書付通ニ取計呉候様被申之候二付、与二兵衛、孫右衛門、七兵衛立会、右書付二而ハ治り不申様存候間、御好之通如何様相直し見可申間、存入

可被申聞旨被聞候処、兩人之了簡ニハおよひかたく、左候ハ、暫相待くれ候様被申之引取被申候、

一、同日夕方呼二遣候処、太兵衛老人来り、何角外出訴事も在之、人も揃ひ不申、明朝迄相待くれ候様、明朝ハいつれとも急度御返事可申入候段被申之候付、此上強而兎角申義ハ無之候間、百艘の手先キ被積事候ハ、無遠慮可被申聞候と申聞候処、中く左様義候而も無御座候、いつれ明朝御答可申入旨被申歸候、

一、赤のい孫左衛門見舞ニ被来候、(廿九)廿九日朝、太右衛門も被来候、赤之い浦之義ハ三ヶ浦廻船場御座候へハ、三ヶ浦之余り荷を貫ひ船積仕候、赤之い之者共御座候へハ、以其意を被仰聞被下候ハ、埒明キ可申哉之段、右孫左衛門被申聞候付、随分其通り之事候へ共、三ヶ浦を遣し候ハ内分之事ニ而、無浦こやし取舟ニ荷物人のせ候義ハ取来不相成候之間、此段兼而よく承知被致、残り衆中へも申聞被置候様申聞置候事、

一、晦日朝、木濱宿坂本町浅井屋源兵衛方へ尋ニ遣候処、いつく江被參候哉、留主之由被申聞候、

一、同八つ時過、又尋ニ遣候へ共、未歸由被申越候付、与次兵衛、太郎兵衛御役所へ罷出、木濱之者共疑心在之、只熟談難調、其上今日もいつく江出候哉、宿ニも存不申候二付、御役所へ恐多存候付、御断申上候、此上ハ如何共被仰渡候様、勿論赤之いハ右之仕合二付、未不及引合申段申上候処、三宅様被仰聞候ハ、只今呼二遣し、いつれとも相片付ケ候様可申渡段被仰聞候、其様子ニ湖水ニ而渡し舟之義ハ、矢橋渡海、木津、今津を竹生嶋渡し、木濱を片田渡し、右之外ハ無之段、延享五年ニ其仲間を書付差出し有之候旨被仰聞候二付、其義ハ仲間ニも扣書御座候段申上置候事、

一、右前々赤之并太右衛門、孫左衛門、宿橋本丁美の屋卯八方へ呼二

遣し、木濱を彼是と申立不熟之趣二相見へ、勿論今朝も宿二居不申候付、此段御役所へ御断申上候様申聞置候、勿論弥此上不熟二而於御役所被仰渡候共、赤之い之義ハ所住居候者、又ハ得意客之分ハ御赦免在之、書付二も諸浦と申義ハ御書入無之旨御願申上候置候間、兼而此段可被得相心様申聞候、兩人共段々御せわ之段千万忝、尚此上可然相頼候様申聞被帰候、

一、右御役所へ罷出候跡へ、木濱源五郎、勘兵衛兩人被来候へとも、逢不申二付被帰候、

一、同夜分、太兵衛京都を帰り候由二而会所へ被来、無抛地頭方二付早朝を出京いたし、中飯頃二ハ旁帰り可申積り、遅ク相成候段断被申、明朝書付認持参可申間、其上談しくれ候様被申之候、

一、翌三月朔日朝、矢張前段同意之書付二付、段々釈合利害為申聞候へ共、何分聞入不申候二付、御役所へ与次兵衛、太郎兵衛罷出、右書付御目二懸ケ候処、三宅様被仰聞候ハ、昨日も兩人之者共へも得と申聞置候、扱く不吞込候者二付、呼二遣し申付候様被仰渡候二付、しからは今一応申聞せ、其上弥不承知二候ハ、乍恐御役所へ罷出候様、私共方も申聞候間、此段御聞濟被下度申上置帰候、

一、同日九つ時過呼二遣候処、太兵衛、勘兵衛兩人来り二付、段々釈合為申聞候へ共聞入不申候、しからは御役所へ罷出可被承様申聞せ被帰候、

一、二月十九日、山上村市左衛門、尾花川忠兵衛方江被来、明朝三井寺大僧正伊勢御参宮被成候付、矢橋迄小船壹艘差出被呉候様御頼之義二御座候間、可然御せわ被下候様被申聞候、依之、熊之川江野小船壹艘相廻し、廿日未明御乗船被成候、

一、三井寺法泉院大僧正様 侍三人
下男三人

外二御弟子御兩人

已上九人

小船二年寄船之屋形組、豊五疊入、

大和風呂二土瓶壹組、茶碗三つ入、

小船下組 繁次郎

加子 長七

傳四郎

仁兵衛

右御機嫌克御下向被遊、二月廿九日為御土産鳥目五百文、瀧饅頭三拾入青籠被下置候事、当役銘々配ル、

一、前三月一日、木濱太兵衛、夫を御役所へ罷出候処、利害被仰候由二而、太兵衛源五郎兩人来り、先達而被仰渡候趣と只今承参候趣意相違いたし候間、何分此上御裁許定候積り二一同申居候へハ、段々御せわ之義ハ忝存候へ共、是切二而取嚙相止メ呉候様申之候付、如何様共御勝手次第之事情へ共、從御役所違之義被仰渡候義ハ一切無之、各方承違二有之間、同日御役所へ御苦勞申上、其上仰渡され方違候杯と恐多、左様之義二而ハ有間敷也、得と勘弁被致候様、くれく利害為申聞候へ共、何分承知不致断申切被帰候、

一、右二付与次兵衛、太郎兵衛御役所へ参り候処、七つ時過二而最早御引取被成候、三宅様御宅へ御尋申上候へ共、未御歸り不被成候、

一、三月二日朝、柴山様へ何分不熟之趣御断二上り候へ共、御用多御逢無之、依之、右之段今日御役所へ御断二上候旨、男衆を被仰上被呉候様申置候、

一、無程從御役所呼二來り、三宅様へ与次兵衛、太郎兵衛申上候者、昨日夕景木濱兩人私共詰所へ來り候而、何分取暖之義相止メ呉候様申之候付、尚又段々利害為申聞候へ共、承知不仕候間、乍恐此段御断申上候、三宅様被仰候者、何とも困り無聞入もの共二而候へハ、尚此上此方二而可承段被仰付候、

右二付、享保五年万日之節御触書之留メ帳、宝曆十四年申年石山開帳之節御触書之内二、山王神事之節并二唐崎參詣之旅人舟二乗せ候ハ、丈夫成丸船差出致増加子、怪我無之様心ヲ付可申候様御書入在之、尤浦名前之内二赤之井も在之候二付、為御心得右留帳式冊外御懸紙いたし、御目二懸ケ候処、奥へハ入被成、柴山様、内堀様杯へも御見せ被成、御咄合等も在之候趣二而暫待居候内、頓而御歸し被成候、

此度木濱之もの共余法外者共二付、こづらにくさ二御覽入候、強而赤之井之腰押之事二而も無之候事、
七つ時赤之井太右衛門來り、明後日迄日延いたし、今日御歸村致候段申被來候、

覺

一、田地養船、但○叶如斯燒印
鱧板二有之

栗太郡大江村
船主金藏

右之船大江村浜先二繫置候処、去未十月十日右場所二無之二付、再応所々相尋候得共、今以不見当由二而、浦々吟味之儀願出候間、浦限り相糺、右船有之候ハ、船主江及通達可相渡、此配符浦名下令請印、早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

申三月二日 御役所印

松本始メ木濱迄、右浦々

一、右同断、御文言御配符壹通
即刻松本浦舟年寄方へ相渡、使廻り太七
庄屋
舟年寄
大津始メ今堅田迄、右浦々
庄屋
舟年寄

同日請印いたし、次浦坂本浦へ相廻ス、

上巳御礼

一、石庄三郎様

鳥目百疋
青さし
木札付

御元メ

柴山泰藏様

〃

内堀繁太様

町役

篠田牧太郎様

〃

三宅新右衛門様

船方

岡田大八様

右五軒鳥目五十疋宛

御門内御手代衆、組屋鋪不残、新建

船方下北出雲平殿

右手札二而相勤心、

右之通与次兵衛、七兵衛、供多七

一、平方振舞三月五日二相定候様、昨年相談在之候処、当年ハ松本出入二付相慎延引之事、

平方松本一件六月十六日相片付候二付、同廿六日於靈仙二相勤、

委細奥二書記、

前二留書有之候木濱方赤ノ井浦を相手取、渡舟之儀御願申上候二付、赤ノ井浦者三ヶ浦廻船場所二付、中間方何角と申咄し候義も有之、右二付左之書面を遣又、

以手紙得御意候、弥御堅固二御勤役被成珍重奉存候、然者近々坂本万日廻向始り申候二付、渡船方之義御談事申度候間、急々御両人之内御上津可被下、委細面上可申述候、先ハ早々、以上、

三月四日 百艘年寄

堅田浦舟年寄

庄兵衛様

三右衛門様

右書状可遣候処、片田三右衛門被参、木濱、堅田渡し場二付、赤ノい之一件申咄、帰村之上相談いたし急被参候様申遣し候、

一、三月四日、赤ノみ太右衛門被来、帰村ノ上段々相尋候処、坂本万日九万日之廻船附込帳出候付、持参いたし御役所二而御覧入候処、木濱赤ノい被召出、尚此上双方熟談いたし、両浦差支不申様可仕段被仰渡候而引取候様申之咄候、

但元文六年之面之古キ帳也、

一、西教寺十一万日廻向有之候二付、艀持へ出し候廻状写、左二記、

口演

一、坂本西教寺万日廻向有之候二付、参詣之節銘々所持之艀舟を以渡海被致候義相成不申、其旨心得違無之様御承知可被成候、此廻状二請印被成早々順達可被成候、已上、

申三月

百艘印

- 六兵衛 平蔵町
- 治兵衛 中保町
- 佐左衛門 別所町
- 甚兵衛 北保町
- 卯兵衛 同
- 市兵衛 北保町
- 庄兵衛 觀音寺町
- 三五郎 同
- 庄兵衛 土居町
- 六兵衛 下堅田町
- 治兵衛 橋本町
- 七兵衛 下北国町
- 吉平 別所町
- 五兵衛 別所町
- 仁右衛門 大門町
- 善右衛門 觀音寺町
- 喜八 同
- 忠兵衛 土居町
- 卯右衛門 土居町
- 伊兵衛 土居町
- 長兵衛 川口町
- 弥蔵 川口町
- 仁兵衛 神出町
- 久兵衛 別所町
- 五兵衛 大門町
- 彦右衛門 觀音寺町
- 源七 同
- 長三郎 土居町
- 太兵衛 土居町
- 与惣兵衛 土居町
- 六兵衛 川口町
- 市左衛門 川口町
- 角兵衛 川口町
- 与八 別所村
- 久蔵 別所村
- 六兵衛 同
- 長三郎 北保町
- 五兵衛 觀音寺町
- 彦兵衛 觀音寺町
- 利兵衛 同
- 弥右衛門 北保町
- 五郎兵衛 北保町
- 庄七 中保町
- 甚兵衛 別所村

西教寺十一万日廻向有之候二付、貸舟屋中へ出し候廻状写、左二記又、

口演

一、坂本西教寺万日廻向有之候二付、参詣之人艀舟借請二被参候ハ、其段百艘会所江御達被成候上、御貸可被成候、右心得違無之様御承知可被成候、此廻状二請印被成、御越可被成候、以上、

申三月

百艘印

- 仁右衛門、仁左衛門、甚吉、六兵衛、源助、清介、源七、五郎
- 八、善兵衛、源六

一、三月六日、朝天氣乱候付、尾花川方屋形取二被来候而、廻り新八

手伝二遣し為組候処、已前之留メニ弥三右衛門前と在之在之候へ共、余り北へる二付、網引場二組被置候、

一、右二付入用品、高張提灯壹帳、蠟燭貳拾計、炭壹俵、損料高直二付会所有合遣し、かりふるし薄べり裏付三枚、畳ヤニ而かり遣候、すだれ貳枚、幕遣し不申積り、

右は前日二遣し可申事、

右二付、六日昼方為見分与次兵衛、太郎兵衛参り、あれこれ見廻り候処、とくまん川は尾花川境二而のせ場も不直、又板橋二付候江者、三井寺領内二而土手る北二在之候石橋也、已前埋り在之上二土かぶり之之故、板橋之様二見へ候へ共、近年堀上ケ有之石橋也、是ハ余り北へより候へ共、又三井寺領二而のせ候義も可然義二付、何分其時之模様被致、可然段船方之衆中へ申聞置候、

一、尾花川町会所へ立寄呉候様町年寄角兵衛、五郎兵衛殿、船方年寄善兵衛、儀兵衛付添被来候而、則忠兵衛も被来候、

右於会所二三十九枚之印札相渡し、観音寺町江遣候七枚は右忠兵衛方預り在之候付、是も一所二船方へ相渡し、則頃日観音寺町源七と申仁、忠兵衛方へ右印札かし呉候様頼二被参候由二付、右尾花川船方観音寺町へ申分申候様、しかれば尾船方之矩規も立候様申聞候而悦被申候、

右印札之義は、延享五年留メ帳ニ委在之、又寛政九年已三月廿六日、四月十日迄来迎寺三万日廻向在之節、右印札已前火事ニ焼失いたし、十三枚不足ニ相成、補ひ呉候様被頼、其節与次兵衛、源右衛門、尾花川へ罷越、已来失ひ不申様申聞置候、又候此度十五枚焼失いたし候段、無拋義二候へ共、全躰已前之訳得と相弁不被申方も在之二付、右之訳相談寄合之節銘々咄し被致、向後紛失無之様大切ニ被致置候様申渡し候、随分御尤之御事と承知仕候、平日ハ不用之事御座候へハ、

万日相濟候ハ、取集メ町内箱へ入置可申段被申之候付、町内ハ歩方、船方別り有之候へハ、忠兵衛方へ成とも預ケ可被申哉、何分取締り之事二候へハ、いつれ共可然被取計候様被聞置候、尤観音寺町之分ハ已前忠兵衛方二預り被置候二付、相濟次第忠兵衛方へ戻し可被申段申聞候、

一、坂本船方へ申合せ旁挨拶ニ参可申様被申候二付、其趣承置候、

一、勿せん^錢は尾花川、観音寺町、上下小船、坂本新兵衛、其外不残、人老二三文宛、右外艀持中へ廻状廻し置候へ共、無拋方頼之義ハ仲間る書付遣候間、尾花川二而被相改候様申置候、

一、尾花川取締書付、其外順番勿錢帳之類は、任旧例二忠兵衛方二而取計被呉候様頼被置事、

右之通取締何角申渡候跡蓋被出候付、依旧例二二献給歸り申候、

与次兵衛、太郎兵衛、忠兵衛、町年寄角五郎兵衛、船方年寄^{善兵衛}儀兵衛

前町方廻状は折二ふれ滞候義も在之二付、廻り多七為持遣し、即日二三月四日調印相濟申候、

貸船屋廻状は橋本町源介呼二遣、近来心得違之義も在之、互二氣之毒二候へハ、無間違早々順達被致候様申聞せ相渡し候、御尤二承知いたし候旨被申聞、受取被歸候而、三月七日朝調印相揃、則源助持参被致候、

右貸船屋廻状東る相廻し、橋本町源助方打留メニ相成候様相頼ミ被置候、

尾花川二建候番所二張候提書、左之通、

覚

一、御公儀様御法度之趣堅相守、火之元念入可申事、

一、風波あらしき節ハ、致出船間敷事、

一、舟壹艘ニ加子式人つゝ乗、尤可為禁酒、

但し老人、子供ハ加子ニ参り申間敷事、

一、参詣之衆中ニ対し、かさつケ間敷義無之致神妙、喧嘩、口論、又於湖中ニ舟賃等定之外ねたりケ間敷乞受申間敷事、

一、艀壹艘ニ乗人十八人之事、

一、格別古船不相用、船具に念入、於湖中怪我あやまち等無之様、加子之者より情々心を付可申事、

一、乗合船賃志人 唐崎へ十式文、
七本柳へ十五文

一、かり切船賃応時刻ニ相對次第之事、

右者就坂本西教寺十一万日廻向、参詣之衆中乗せ送り候ハ、何事も古来之通相守、一同申合聊不法之義無之様相慎可申もの也、

文化九年

申三月

百艘

一、前赤ノ井一件、三月四日日延御願被申上、四日ニ孫左衛門代金豊藏三郎并太右衛門、右兩人被登候処、木濱（前錢）ノ御（ぶ）又差出候書付別ニ写在之、右書付ニ拾文ノ上まへせん木濱江相渡し、無扨分のせ送り候様と書入在之候付、何分熟談難相調旨段々御願被申趣之処、孫左衛門義不及御届ケニも勝手ニ歸村致、代人差出し候段難相濟、最初ノ名前之者共罷出候様被仰渡、十日迄御日延被願置候而、十日ニ銘々罷登り候段承之候、

一、八日ニ堅田庄兵衛、与兵衛被登、右之趣ニ而ハ廻船ニ拘候ニ付、横目安差上可申哉段被申聞候、此方（右）申聞候者、是迄取喫いたし候節もわかやき不申様被仰渡、三ヶ浦ハ別ノ事ニ被仰渡候、当時積願差

上ケ候而ハ、又彼是隙入恐多事ニ候へハ、先見合可申哉之段為申聞、尚又此節御糺中、堅田、大つ立会、赤ノい江面会いたし候義ハ恐多候へハ、堅田之心得ニ而見舞被申、此間中之咄被承、可然哉之段咄しいたし、堅田計赤ノい之衆中江重被申候処、右書付ニ而ハ中々調印いたしかたく、何分御断申上候由、赤ノいノ者共申居候由、堅田庄兵衛此方共へ咄し被致候、九日ニ歸村被致候、

右ニ付前々方仕来りも有之也、尚更三ヶ浦之御拘り不申旨、於御役所ニも被仰聞候義故、万日初り候ハ、堅田方船拵人舟ニ帳付可申由被申歸候、

一、十日朝、柴山様へ与次兵衛上り、木濱、赤ノい一件彼是隙入申候、私共取喫双浦共面談も不致候処、此上赤ノいノ者心得違仕候而ハ如何敷、赤ノい浦ハ三ヶ浦廻船場ニ付、何事も三ヶ浦次第と相心得勿論無株之浦ニ付、旁取締もよく候処、此度ケ程之義三ヶ浦を押而御願も不申上候へハ、赤ノいニ振向置候義、赤ノいノ者共不足ニ存後日心得違等仕候而ハ後難被致甚敷ケ敷義ニ付、しかし木濱ハ迎も取合申間敷候へ共、赤ノいへ私共方利害申聞、此節差出候書付少々取直し、和熟為致候へク、私共も規矩立可申存候間、御内意承度申上候処、柴山様被仰候者、最早たんに押詰万日も明日（右）始候事ニ付、今日中ニも調候義ハ格別ニ候へ共、迎も左様之義も難計、勿論赤ノい之者共銘々勝手ニ歸村致候義不埒ニ付、今日ハ元名前之者共召出候積ニ付、其品（右）百艘呼出し可申義ハ格別、まづ差扣候様被仰聞候、右ニ付、三ヶ浦ニハ差構ひ無之趣、兼而御役所ニ而も被仰渡候へハ、明日万日始候付、堅田ふね赤ノいへ帳付、人乗せ候義ハ不苦哉段相伺候処、此節論中之場所ニ付先つ差扣へ候様被仰聞、弥遣し可申義ニ候ハ、御役所へ相届、調へ受候様被仰聞候、依之左之手紙（右）しからは其趣堅田へ可申遣段申上置候而、左之手紙遣し候、

以手紙申入候、弥御安康可被成御座奉賀候、誠二昨日ハ御上津二付、御立寄被下得貴意大慶仕候、明日方人舟二赤ノ江御遣し被成候義ハ、御止メ可被成候、此節論中之事故、差扣ヘ可申様御内々承り申候間、此段態々以飛脚申達候、以上、

三月十日

百艘

堅田舟年寄

庄兵衛様

三右衛門様

右書状急々相届キ候様木地忠へ頼二遣入、

一、三月十日八つ時、從御役所呼二来り、折節大六講二而年寄役之者共与七郎方江罷越居候二付、与次兵衛老人罷出候処、柴山様、三宅様、北出氏於御白砂二、赤ノ井太右衛門、長右衛門、豊蔵外二人被召出、是迄段々御糺在之候処、最早万日会式も明日方始り、此上双方論合居候而ハ為二も不相成、是迄百艘方取喰いたし候へ共不相調、此上裁許受候而者如何躰被仰渡候義も難計、迎も此度之会式二間二合不申候へハ、得と勘弁いたし、百艘方二も心得方も可有之義二付、只今呼出し候へハ、弥熟談いたし候義二候ハ、急々熟談可致段被仰渡候、赤ノ井太右衛門、善兵衛熟談之義ハ相好候義御座候得共、木濱る書付表二拾文之勿銭差出候義等、承知も仕かたき段申上候処、柴山様被仰候者、夫ハ木濱之心得違二而、外二而勿せん受取候杯と申義者、御役所二而も御聞濟無之事二候へハ、夫一条之事二候ハ、百艘二も談し、急々示談可仕様被仰渡候、

一、前々此節木濱、赤ノ井共銘々勝手二歸村いたし代人差出、豊蔵杯者跡方来り、詞を過し候条差扣可申段、替るく出候付、相濟候事もあと戻りいたし、御役所へ対し不相濟義、是等も一件内済いたし候

へハ、御宥免も可有哉、不然二おゐては急度御糺し可被成段被仰渡候処、赤ノ井者共申上候者、北出様へ御届ケ申上、歸村いたし候段申之候付、色々御聞糺有之候、

一、右跡二而木濱太兵衛、源五郎被召出、前日断勝手二歸村致、代人を立候段御叱り在之、何分今日中内済可致段、最早七つ半時、御門もしまり候へ共、他参不致、双方共於御門二熟談可致、御銘々方二も夜二入候而も引取不申段嚴敷被仰渡、夫方向イ吟助方江引取、双方書付押合為致大方熟談相調申候、

一、右二付与次兵衛、木濱ノ者共江申聞候者、両浦之義ハ下済熟談致候へ共、万一此上心得違被致、自然大津、堅田之船二も人乗せさせ不申杯と被存候而ハ不相濟候付、念之ため引合置可申段申聞せ候処大津、堅田、八幡三ヶ浦之船ハ前々赤ノ井浦江帳付被申、格別之義二候へハ差構不申段、太兵衛、源五郎被答候、則赤ノ井之衆中も又木濱勘兵衛も同座二右之段被承聞居候、

右之趣二付、双方済証文上ケ可申段二成、赤ノ井之者共何分下済不相好趣二付、此段又候御役所へ申上候処、夜分五つ時過又赤ノ井者共被召出、柴山様、三宅様方段々御利解被仰聞、漸承知之趣二而双方連印済状下書二印形いたし差上置、本紙ハ明朝差上ケ可申段御断申上置、夜四つ時過引取申候、

一、右三ヶ浦二差構ひ無之段ハ、則御役所へも申上置候、

一、右之通翌十一日百艘方二而済証文相認遣し、双方印形相濟、則中間二も右印付書付取置候事、

一、御役所へ与次兵衛、太郎兵衛、翌十一日九つ時過、御役所へ罷出済状差上候処、於御前二御聞濟在之候段、殿様直々被仰渡候、御立会柴山様、三宅様、北出氏、

一、両浦勝手二是迄歸村いたし候義共、段々御糺在之、此度之義ハ御宥

免被成候へ共、重而相心得候様被仰渡候、

一、右一件事濟挨拶礼として、酒五升木濱太兵衛持参いたされ候、

一、赤ノいろハル今さたなし、三月廿一日太右衛門礼ニ被来、酒五升持参被致候、

一、右両浦連印之書付ハ帛二入在之、

但御役所へ壱通上り、木濱、赤ノ井壱通宛、都合四通之内也、

一、堅田庄兵衛、平兵衛被登来、事濟候様子申咄候由、

一、九日二人船廻船帳、裏三ヶ浦宿帳屋太右衛門

右帳面堅田ノ拵赤ノいへ遣し申候、

一、右帳面之義、是迄帳屋太右衛門方ニ而拵被申候へ共、此度右取合に

も在之義ニ付、三ヶ浦ノ拵^(マ)遣し申候、しかし太右衛門江右之段為

申聞、自然木濱ノ心得違致、此上彼是申問敷ものニ而も無之、今日

此帳面用ひ候敷可然段申遣候、太右衛門承知いたし被帰候、

一、三ヶ浦ハ格別之事ニ而、廻船付込之義御差留メ被成候義ニも無之候

へ共、何分木濱、赤ノ井下濟為致可申ため、柴山様御宅ニ而被仰聞

候事ニ而、表立御差留メ之義ニ而ハ無之事、

従前々ノ通り、

一、向井行積ニ参、赤ノ井江帳付、人乗せ若宮ニ而揚候名前

一、九日 天気 三郎兵衛持 八郎右衛門、不乗 人拾五人、 ※

一、十日 快晴 同人持 三郎助、不日和ニ付乘人なし、

一、十一日 東風 天気 七兵衛持 十兵衛、下物迄ニ付不帳付、

一、十二日 曇天 権七、 人三拾人、

一、十三日、雨天 三郎兵衛持 忠八、八郎右衛門、同十五人、

一、十四日 // 日向積なし、

一、十五日 昼方ひより 天気 忠兵衛持 忠八、人五拾人、

少しぐれ

一、十六日 快晴

与次兵衛持 仁右衛門、 // 十六人

一、十七日 // 太郎兵衛、 // 廿七人、

一、十八日 // 向積なし、

一、十九日 // 八郎兵衛、雨天ニ付出船なし、帳不付、

一、廿日 曇天 申時より雨 太郎兵衛持 安兵衛、同断、

一、廿一日 前夜方 大雨 大

満日大施我鬼在之、

(※の位置に書付)

「舟賃壱人三十六文宛、相對いたしのせ候、但少々右之内宿酒手ニ遣

し候、尤艀ふねニ而ハ壱人三十二文宛、定り三十二文ニ而のせ候者

も在之候、」

右之外堅田小船帳付のせ候義ハ、堅田浦ニ書留メ在之、勿論帳屋太

右衛門方ニ廻船帳在之候へハ、委細書記可書候^{在之}船每人別之義ハ少々

違ひも可有之事、

一、尾花川片原町ニ建候船番所之義、是迄いつ方江も御届ケも不致候へ

共、三月十六日町廻り御目付佐久間又兵衛様尾花川町会所へ御立寄

被成、町年寄角屋五郎兵衛へ御尋被成候ニ付、則忠兵衛罷出、是迄

振合御咄申上候処、仮建之義ニ候へ共、幕も張在之候へハ、自分了

簡ニも難相濟段被仰聞、御引取被成候、

一、翌十七日、船方御懸り岡田大八様ヲ呼ニ来り、与次兵衛罷出候、右

番所之訳御聞被成ニ付、前々方万日度毎、或ハ三井寺観音御開帳之

節杯も、私共手先キ尾花川船方之者共ニ坂本迄乗せ送り為致候義ニ

付、見改ニ罷越候而足溜りニ仕、終日私共方詰切候与申ニ而も無之

候事ニ而、表立御差留メ之義ニ而ハ無之事、

従前々ノ通り、

一、向井行積ニ参、赤ノ井江帳付、人乗せ若宮ニ而揚候名前

一、九日 天気 三郎兵衛持 八郎右衛門、不乗 人拾五人、 ※

一、十日 快晴 同人持 三郎助、不日和ニ付乘人なし、

一、十一日 東風 天気 七兵衛持 十兵衛、下物迄ニ付不帳付、

一、十二日 曇天 権七、 人三拾人、

一、十三日、雨天 三郎兵衛持 忠八、八郎右衛門、同十五人、

一、十四日 // 日向積なし、

一、十五日 昼方ひより 天気 忠兵衛持 忠八、人五拾人、

少しぐれ

候へ共、何事も私共取締致候而、則掟書等も張置、幕之義ハ四方吹貫キ之古屋形二付、風覆二仕候迄二而、已今も入用之義在之候へハ取二遣し候而、強而張候義も無御座段申上候、勿論近年來迎寺三万日廻向之節も、右同様取繕、三井寺開帳之節ハ格別人数も無御座候義故建不申、尤暫之□間夕之事故、是迄いつ方様も御届ケ不申上候様子二仕置候段申上候処、奥二而御咄合在之、暫いたし被仰聞候者、是迄届ケ不申義ならは強而咎メ候二而者無之候へ共、全躰人込候事、自然喧嘩口論等二而も有之候節ハ、御届致被置候事、百艘方二も宜道利二候へハ、右之趣書取御届可致段被仰渡、尚又幕之義ハ御役所之差留メ之義二ハ無之候へ共、心得を以被相止可然哉旨被仰聞承知仕、翌日御届ケ申上候事、御目付佐久間又兵衛様方へも以口上、右御尋二付、今日御届ケ申上候、外御目付様方へハ参り不申候間、可然御願申上候様申上置引取候、

船方御役所江御届ケ書之写

乍恐口上書

一、從來十一日坂本西教寺万日廻向御座候二付、尾花川船方之者共坂本迄参詣人乗せ送仕候処、則乗せ方万端百艘方之取締仕、私共尾花川辺江見廻り候義故、右乗船場所二仮小屋壹ケ所取繕仕置候仕来り二御座候、此度も是迄之通仮小屋壹ケ所取繕仕候、尤万日廻向相濟候へハ、早束取^(速)取申候、尤尾花川町二も兼而承知仕、於場所之義二茂何之差支も無御座候間、乍恐以書付御届ケ奉申上候、此段御聞濟被成下候ハ、御慈悲難在可奉存候、以上、

文化九年

申三月九日

大津

百艘年寄

与次兵衛印

御役所

右日付之処差函二付、九日と認差上申候依也、

乍恐口上書

一、此節坂本西教寺万日廻向二付、参詣人御座候処、尾花川辺之坂本迄乗せ送仕候義二付、百艘方之仮小屋壹ケ所取繕置申度旨、以前御届ケ可奉申上之処、右御届延引仕奉恐入候、此段御聞濟被成候ハ、難在可奉存候、以上、

文化九年

申三月十七日

大津

百艘年寄

与次兵衛印

御役所

一、尾花川勿銭帳は、任先例、中間内忠兵衛方二預ケ在之、

掟書壹枚

一、船番所仮小屋建場所片原町平兵衛前、尤網引場也、

無滞相濟候二付、廿二日朝、尾花川之為持越候二付、則御届ケ書左之通、

乍恐口上書

一、此度西教寺万日廻向御座候二付、尾花川辺之坂本迄人乗せ遣、為取締右町内二小屋壹ケ所仮建仕候段御届ケ奉申上候処、万日廻向相濟候へハ、右小屋今日引取申候、乍恐此段御届ケ奉申上候、已上、

文化九年

申三月廿二日

大津

百艘年寄

七兵衛印

御役所

右為挨拶諸白式升宛 柴山様 何か御取_ル

岡田様 船方当時

御目付
酒式升 左久間又兵衛様

御断二而戻ル、外二両家へハ此度ハ遣し不申候、

尾花川町方年寄 角五郎兵衛

船方年寄 善兵衛、儀兵衛

右格別出情せわいたされ、尤任先例酒三升遣し申候、

一、坂本新兵衛ニは律義成者ニ付、為乗候度毎改ニハ不遣候間、参詣人のせ参り候ハ、壹人三文宛劔銭毎夜持参可致段申渡し置候事、

右ハ格別之事も無之、当座上前帳ニ入在之候事、

一、上下小船之義ハ、是迄川口堀、又ハ今堀杯へ廻しのせ候義も在之候へ共、此節小船入渡し鬧敷時分ニ付、此度ハ壹艘も廻し不來候、自然廻し候へハ、船毎相改壹人三文宛之劔せん取之可申事ニ候、

一、三月廿一日、尾花川惣代善兵衛、義兵衛被來、此度ハ何角御せわ_(ママ)二なし被下、以御影のせ送り往辺仕、相応之助成も在之、全御仲間之御影故と千万忝、尚又三十九枚之印札補被下、忝厚御礼申上候様一同申之候段、叮嚀之口上を以被申述、則為挨拶と鮒五枚持参いたされ候、廿二日夜一同遣ひ候、

一、錢四貫五百拾五文、万日中劔せん高、外二式百式文、いろく劔せん、右劔銭帳ニ添へ、忠兵衛方_方為持被越候、則帳面ニ受取書いたし、已前之帳面と一所入、取片付被置呉候様申遣し候、

三月廿一日

一、文化五辰十月、堅田町郡山蔵裏石垣築出ニ付、書付取置候処、翌年

右石垣取払可被申寄延引ニ付、当三月繼添印形取置之候事、但本紙繼添共写遣し在、

右為挨拶、鯉式本、大はず十_(尾)ヲ
鮒三枚

御蔵元橋本町木屋嘉兵衛殿_方被差越候、

三月十一日、於中間料理申付ル、

一、三月廿四日、勢田橋本村よりいつも之通ウゲヒ三十尾到來致候ニ付、即刻当役中へ配らせ候事、

一、四月朔日、例年之通日吉御神事御配符四箱、増加子御差留添触とも

御渡し被成、則左ニ記ス、

一、御船割賦 壹通 大津百艘船持

御文言例之通、尤寅年留帳ニ有之、

来ル十八日、日吉御神事神輿船割賦之事、

堅田浦

丸船貳艘 水主九人 宛 船年寄
外楫取壹人

但シ百八拾石積_方式百石積迄、二ノ宮方早船

今津浦

丸船貳艘 水主拾壹人 十左衛門
外楫取壹人

丸船壹艘 右同断 八郎左衛門

丸船壹艘 右同断 船年寄

丸船壹艘 右同断 船年寄

海津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 宛 次左衛門

外楫取忝人

丸船老艘 右同断 長次郎

丸船老艘 右同断 善八

丸船老艘 右同断 甚兵衛

塩津浦

丸船老艘 水主拾忝人 宛 弥助

丸船老艘 右同断 清兵衛

丸船老艘 右同断 角兵衛

丸船老艘 右同断 弥右衛門

右之船例年之通致吟味、来ル十八日以前大津江着船可致候、尤服忌
差合之もの相改可申候、此配符令請印、早々順達、留り所可相返
もの也、

申四月朔日 石庄三郎御印

堅田浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々船年寄

朔日午刻、堅田三右衛門へ渡、

大津御役所

添廻状老通 岡田大八様へ

御文言例年之通未年之留帳ニ有之、

御廻状老通 坂本始 右浦々

北小松迄 庄屋、船年寄

同 老通 矢橋始 右浦々

八幡舟木迄 庄屋、船年寄

御船割賦老通 山田浦

矢橋浦

但し御馬船七艘

同日申刻、北山田徳次郎へ遣入、

一、四月五日、沖之嶋を例年之通鱒三本到来、此節何角度々寄合等有申
二付、丸漬之鮓二いたさせ候、

一、四月八日、從御役所呼二来り、与次兵衛罷出候処、内堀様被仰聞候者
未強与相知レ候義ニも無之候へ共、来十九日京都東御奉行小長谷和
泉守様、石山筋御順見二付、当御役宅江も御立寄之由、右二付久敷
御奉行石山御順見ハ無之処、安永九年土屋伊予守様御越被成、其後
之留書不見当候付、急々相知レ候ハ、其後御奉行御越被成候義ハ
無之哉相尋申上候様被仰渡候、尤せた橋、山門御順見ハ度々在之候
へ共、只今石山筋之義ハ御尋二付、則留帳吟味之上、左ノ書付持参
いたし差上候、

乍恐覚書

一、安永九年五月六日

土屋伊予守様勢田川筋御順見二付

小船三艘 船老通

松本浜江相廻し置候へ共、御乗船は無御座候、

一、天明五年巳十月十八日

御所司代様御用人石山江御参詣二付、

屋形大船老通

御供小船老通

台所小船壹艘

右ハ古望仁兵衛方江御着被遊、坂本町美濃屋庄兵衛裏方御乗船御座候事、

一、同六年午二月廿六日

御公事方木村九郎兵衛様、勢田川筋江御越被成候二付、

屋形大船壹艘

供ふね小船壹艘

右ハ松本浜方御乗船被成候、

一、寛政六年寅四月十二日

堀田相模守様

菅沼下野守様

中井主水様

石山筋御願見、於生蓮坊二網御上覽被遊候、

小船三艘 内式艘屋形

松本浜江相廻し置候へ共、御乗船は無御座候、

右ハ安永九年已来留書二御座候分、奉申上候、

申四月八日

百艘

右即日持参いたし候処、内堀様は御引被成、中嶋直五郎様へ上ケ置申候、

一、四月十一日、例年高宮布為献上惣年寄、御代出府被致候、是迄中間を登り下り共見立ニ参候例無之候へ共、此節松本出入取噺ニ小野宗九郎殿打懸り被居候而、当年小の氏被下候番付、尤未取噺中旁二付、当年ハ石場迄与次兵衛、七兵衛見送りニ参候、当年ハいつもハ出立候刻限早ク候、尤天氣よし、右之振合付被登候節も、迎ひニ参り可申事、

一、四月十五日、矢橋勘三郎船乗合四十三人計のせ来り候処、西北風つよく、新堀先二而帆はしら打こかし、右乗合之内耆人月代二当り、余程すりむけ、氣を取失ひ、段々介抱いたし、其内本性ニ相成、石場浜江漕付、竹屋と申茶屋二而、外科林文治殿早束呼^速ニ遣し、驅付療治等いたされ、追々快方ニ相成、其中矢橋江も人遣し、本人ハ京都油小路六角辺ニ而染物悉皆商売致候人ニ而、京都へも飛脚差遣し、無程矢橋船主勘三郎、年寄弥左衛門、源兵衛、其外追々被来、松本方も船方御役方江内届被致、矢橋方も御届も被出候処、最早夕景ニおよひ候事故、格別之義も無之候ハ、快氣之由ニ而、京都へ引取度旨今日御届、明朝松本諸共罷出候様被仰渡、尔る処、夜分ニ至り京都の縁類衆中被来、何分今晚御立歸り申度趣被相頼、百艘方も太郎兵衛、与次兵衛、七兵衛、六兵衛、見舞ニ参り合候事故被及相談ニ候へ共、兎角松本浦年寄中と熟談いたされ、其趣ニ被取計可然哉之段申咄し、依之、松本浦二も則文治殿露命之処、請合候事候へハ、今晚被引取可然哉之段示談被致、式貫五百文ニ而かこ志挺、但三人懸り二而、夜四つ時過引取被申候事、

此方共へ播磨屋座敷ニ而、矢橋を揃被出、無程引取候事、

一、右之段々翌十六日御役所江、矢橋弥左衛門、源兵衛御届被申上、御聞濟被成候由、引取懸ケニ則当会所へ礼ニ被参候、

一、右之義ニ付、矢橋へ十六日九つ時過、七兵衛酒五升、鯛三把為見舞と持参いたし候、未年寄婦村不被致留主中二付、則舟番所へ申置候、十九日、矢橋の善兵衛礼ニ被来候、但上下小船方ニハ十四日夕十六日晚酒七升、するめ三把持参被致候由、

一、四月十六日、今津七兵衛当会所へ被参、当年神輿船ろ不足之処、在

浦江取二遣候而八間二合かたく候間、何卒当仲間をせわいたし
くれ候様、無抛被相頼候二付、外之義とも違ひ、山王御神事御太切
之御役舟之義二付、当中間二在之候内十四番但十五番ハな十九番迄之ろ
し五丁貸遣候、尤平生と違ひ此節いつ方二も入用之折柄二候へハ、格
別之心得二而かし遣候、酒屋佐右衛門殿方与次兵衛宅へ被参、前以
被相頼二付悦ひ被申候、

当年八聖真子と三宮、今津へ当候事、

一、荷問屋加賀屋五郎兵衛方二貴布祢大明神之神号懸地在之候処、前々
方問屋衆中二所持被致、折々打寄神酒頂戴致義も在之候趣、兼而承
伝へ被居二付、此度荷問屋之内重之衆中九軒と、百艘中間当役之者
と打混し、貴布祢講取結申度趣、白銀屋、川口弥蔵、米喜等当中間
方へ申咄し被相頼候、已前仲間二惣祭り杯も在之候例も在之二付、
中間方二而及相談候処、当時隠順之時節二而、互二規矩を不乱打寄
候義ハ自ラ問屋方二も相慎、隠積万端結句取締二も可相成義二候へ
ハ、入講いたし可宜段一同相談相究、四月廿一日北国町伊賀屋作十
郎借座敷二而初会相勤り申候、爾ル上ハ已後逆も随分叮嚀二講席へ
罷出、互二相慎心安だ□を以、聊猥ケ間敷義無之様相慎可申事、
右当席二おみて双方相談、已来相極り候儀ハ、例年二月廿一日、四
月廿一日、八月廿一日二講会可被相勤筈、懸銭壹人分錢三百文宛
尤銘々差出し可申事、代参之義ハ当中間八平方も在之候義故、毎
年九月伊勢講之席二而銘々圖取いたし、来正月廿一日迄二社参いた
し候義二付、問屋仲間方二ハ右九月講会之節問屋方計圖取被致、社
参ハ正月二当中間と申合せ、正月二同道可致筈二相究り申候、
右之外八年々□右打寄候講会之節、互二渡世之義等申合せ、其外聊
ヲゴリケ間敷義、又ハ講席江妓婦等呼寄候義ハ急度不相成旨能々申

合せ置候へハ、右之心得を以幾久相続可致事也、両仲間共代勤ハ不
相成候、

当四月廿一日出席之銘々

一 白銀屋陸助殿

二 川口弥蔵殿

三 酒屋佐右衛門殿

四 米屋喜平次殿

□六 和邇屋藤左衛門殿

五 加賀屋五郎兵衛殿

七 木地屋忠兵衛殿

八 伊勢屋源左衛門殿

九 大坂屋陸郎兵衛殿子息

当仲間方

与次兵衛、太郎兵衛、七兵衛、三郎兵衛、六兵衛、勘三郎、

忠兵衛、庄兵衛、八郎兵衛、貞太郎

右之外孫右衛門ハ此節病中二而不参、清次郎ハ町内組二而、当日

無抛町用二付斷

講元は加賀屋五郎兵衛殿被相勤候事也、

一、四月廿一日、從三井寺例年之通筭拾本来り候付、当役中江壹本つゝ
配り申候、

一、四月十六日、赤ノ井七兵衛と申者、孫左衛門右兩人被来被申聞候ハ、
当春木濱一件之義二付、段々御せわ二被成下忝奉存候、右二付木濱
之者共あちこち江流布いたし候者、赤ノ井浦は船株無株場所二候へ
ハ、諸事木濱江引取可申趣廻り候而、赤ノ井浦甚差支二相成、尤
是迄蔵米之分は代ノ義も在之間敷候へ共、式、三俵つゝノ小米商人
方自ラ送り出し不申様可相成哉二存候付、近頃芦浦觀音寺様へ参
上いたし、書物等御さかし被下候所、此書付に御座候由、勿論已前
ハ船株も在之由承り候へハ、いつの比方絶切候義哉、百艘中間書物
等御糺し被下、何分七艘之船株引発し申度段被申候二付、中間方
答聞候者、存も不寄義を承り候、船株之義ハ容易二御免在之候義二

而も無之、此節は山王御神事前二而御用向繁在之候へハ、右書付等得と熟覽いたし置可申候へ共、必心得違致、大事を仕出し被申間敷様申聞候所、而近日罷登り可申、太右衛門義も今日登り可申処、俄二親類内々隙入出来不参仕候旨被申之、則持参被致候書付扣、左之通、

- 一、三拾石 仁右衛門 利兵衛
- 一、三拾五石 多右衛門 庄助
- 一、三拾五石 諸右衛門
- 一、三拾五石 藤左衛門

一、三拾石 新兵衛

右之通り申上候所、弥々は迄之通御改之上御帳付舟持二存候、其後赤ノ井村中ノ村之惣船ヲ可致由、右舟持七艘仲間江被申懸、則觀音寺様江罷出対決仕候処、我々共申候分相立、是迄之通舟之義は七艘仲間心まゝ支配仕候様ニ被仰付、惣舟ニハ成り不申候、右之由緒御座候二付、外浦浦々者船之御用筋有之候得ハ、村之庄屋、役人罷出被申候へ共、当浦之儀ハ七艘仲間罷出、御役所御用筋相勤来り候、然る所、寛永三年寅十月、台徳院様御上洛之節觀音寺様ヲ被仰付、矢橋、志那浦江役船七艘ニ而御用相勤申候、又其後寛永十一年戌六月、大猷院様御上洛之時も、同觀音寺様ヲ被仰付、役舟七艘ニ而御用相勤申候、

延宝九年

野洲郡赤ノ井七艘浦

右ハ赤ノ井太右衛門方ニ在之、則木濱一件落着之節柴山様へ御見二入候処、可願義ハ跡ヲ可申上、先ツ一件相片付候様被仰聞候、ろくく御覽も不被成候事、

寛文八申年江州諸浦御役船遣申帳之写

觀音寺御代官所村々当寅納候内、二条、大津御蔵請米、其浦々江今日方浜下可致候間、相下次第多少ニよらず早東^速大津江可被指上候、他浦方友折^速之舟参居候而滞儀有之候ハ、早々此方江可被申来候、

尤不相応之舟積致、浪など入危儀無之様ニ念入可被申候、觀音寺在京二付我等方如此候、以上、

寅十一月廿七日

久松清右衛門
久松清兵衛

山賀村、杉江村、赤野井村、木濱村、幸津川村、吉河村、野田村、江頭村

右浦々問屋中舟持中

慶安四年江州諸浦丸船改帳之写

赤ノ井舟

一、三拾五石

忠右衛門
長三郎
利兵衛

一、三拾石

孫左衛門
長助

一、三拾石

仁右衛門
かり船盤田七郎右衛門舟
多右衛門
庄助

一、三拾石

猪右衛門
大津七左衛門舟
藤左衛門

一、三拾五石

一、三拾石

〆七艘

右寛文八申年帳面、寅十一月廿七日御廻状之写、慶安四年諸浦丸船改帳之扣写、

右三通は此度觀音寺様ニ而うつし貰ひ来り候段、孫左衛門、七兵衛被申聞候二付、則写取候、

一、四月廿四日、太右衛門、孫左衛門、七兵衛被来、右書付二符合致候書付も在之候哉、何卒株御願申上度段被申之候付、此方方申聞候者、右持参被致候書付写置熟覽いたし候処、前段延宝九年之書付只自己之留書ニ而、月日も無之御当所も無之、勿論初発二何之訳と申

書出しも見へ不申、村方と取合候様子ハ相聞へ候へ共、文言之内二村方二不抱七艘之者計二而御用向相勤候様在之候へ共、既当時船帳納杯も舟年寄計二而も無之、村役人之印形二而相収メ来り在之候へハ、右書付と振合も違ひ候事故、御上へ差出し候書付とも不被存候間、得と相考可被申事、又寅十一月廿七日之御書付ハ八ヶ浦御廻状二而船株抱候義二而ハ無之、只今二而も其浦々御城米出候へハ、右様之御廻状ハ相廻り可申事二而、赤ノ井壱ヶ浦二限り候儀二而ハ無之、慶安四年諸浦丸舟之改帳は是迄も株と申二而も無之、丸船御改一通り義二而、当時二而も株無二丸船二而御改受候、同前之事二候へハ、右様之義を申立株願等之義ハ存も不寄義、矢嶋ハ琉玖^{（註）}人御参通御用ハ以今午無株相勤被居、其外株有之候而も当時船持立候義ハ急度不相成浦方も有之候へハ、よくく相考可被申候、赤ノ井村ハ前々ハ無株二而、差而当時差支候義も無之候間、無益之事二隙ヲ入、大事を仕出し被申さる様、くれく利害申聞候付、成程御尤之御事御座候、銘々者ハ承知仕候へ共、残り之者共へも得と申聞候様被申之歸村被致候、

右ハ余り法外之義二而、船株願杯と申義ハ跡片も無之事二候へ共、寛延船株改候節も、赤ノ井ハ無株之書付も請取無之、当時いづれも聞訳無キ衆中故、まづやわからかに利解申聞候へ共、此上得と相考、山ノいも二而足をつき不申様可致事肝要也、

一、四月廿六日、京都東御奉行小長谷和泉守様、関清水、四宮、御蔵所、勢田川筋、石山、尤獅々飛迄御こし被成候、

右御見分として御越被成候処、船之御用は無御座、岳御こし被成二付、御役所ハ別段御沙汰は無御座候へ共、任先例船用意致、石場浜へ相廻し置候事、尤此段岡田大八様へ御届ケ申上候、則太郎兵衛参ル、

金蔵堀掃除等有之候へ共、いつ方方も沙汰無之、定而其時々被致候事二被存候、

御出迎、八町片原町、石場浜、上り下り共

年寄七兵衛、勘三郎罷越ス、供やとい平次郎

石場浜江相廻し置候船之覚

小船三艘、内吉艘内屋形^{（註）}疊入、尤用意之義二付、かこ式丁つゝ入置、

式艘は薄縁五枚つゝ入、

用意艀吉艘、薄へり式枚入、関船次兵衛へ申付ル、

右小船三艘は石場船入堀内へ入、往還通り御目二懸り候場所二繫置、外二年寄船吉艘、屋形其外仕たく物入、堀外につなき置候、人物委細ハ御乗舟帳二在之、

与次兵衛、太郎兵衛、六兵衛、袴羽織二而相詰、従未明石場浜相廻し候処、船番所二七右衛門詰被居候二付、今日ハ御やうましく候ハんと計六兵衛挨拶いたし候、七右衛門御答候者、御苦勞之御義何二而も御用御座候ハ、可被仰聞旨被申候事、但立宿船屋彦助方江も帰り、休足いたし候、茶代式百文遣ス、

朝四つ時前殿様初、

御用人

小林八郎左衛門様

赤間三郎右衛門様

御与力

木村小左衛門様

御同心

佐伯喜藤太様

御案内同心

栗山蔵之允様

右、石場播磨屋長兵衛方へ御立入御中食在之候、与次兵衛、太郎兵衛早束罷越、右御役人方江手札差出し、船御用御座候ハ、可被仰付候、則是二差扣罷在候旨申上候処、念二入候段被仰下、御出立迄長兵衛宅二兩人共相詰罷在候、いづれも御乗船ハ無之候へ共、御帰候節迄其俣二差置、八時半時御役所へ御入被成候二付、皆々引取申候、尤浜通御歸り被成候、御蔵へ御入御見分御座候而、夫方御役所へ御立寄被成、七時半時御出立被成候、同八丁片原町迄御見送り、七兵衛勘三郎罷越ス、上組治兵衛、下組甚兵衛、松本浜へ来り居候而、せわいたし候、

四月十九日、大坂御目附代人足方、若狭屋八兵衛殿方黒津村片岡氏へ届ケ状被差越、廿七、八日頃御順見可有之段添状被差越、尚又廿一日ハ延引之段被申越候二付、則返状遣ス、

御紙面忝拜見仕候、薄暑御座候処、弥御揃御安康ニ可被成御座、珍重奉存候、然ハ当廿七、八日頃、石山筋御順見可越御座候処、天氣不揃二付、右日限来月早々迄御延引候段為御知被下、御懇情之義千万忝奉存候、尚又日限相究候ハ、為御知被下度奉頼上候、先ハ右御礼貴答迄如此御座候、尚万々向面御礼可申述候、以上、

四月廿五日

大津百艘

若狭屋八兵衛様

四月十九日

一、酒式升

山田浦方

右八山王御神事廻状、浦順通先へ遣し候挨拶、近年来り候、

五月三日

大坂御目附

扇屋関出迎

青山牛太夫様

七兵衛、勘三郎、とも清吉

30

堀内蔵之介様

右者勢田川筋し、飛、共御瀬御順見与して御越被遊候二付、例之通御供船三艘差出し、尤外二用意舟壹艘相廻し置候事、但し例年京都方当所江御出かけ二当御役所江御立寄り有之候処、当年ハ御役所前二而直御乗船被成、せた方陸地御歸り、八時半時御役所江御立寄有之、七時半時御立被成候、御陸地之所ハ御出迎御見立なし、尤先年も御歸り二御立寄り被成候義有之由、

端午御礼

石原庄三郎様

青銅壹貫文、木札付

元々

柴山泰蔵様

内堀繁太様

町方

篠田牧太郎様

〃

三宅新右衛門様

船方

岡田大八様

右五軒鳥目五百文宛

船方下役

北出雲平殿 名札計

右之外御門内御手代衆、組屋鋪新建、軒別不残名札計二而、右之通与次兵衛、六兵衛相勤候事、供新介、

例年之通山王社参、五月六日、堅田町船、加子二丁 内巻人多吉、外二坂本新兵衛

諸重めし にしめ、竹のこ、氷こんにやく、ふき、梅干

酒五升 是ハなくても

肴重 焼鯛、盆付せうろ

組肴 あわび、からたけ、あつやき、小梅干、うなき

蜆汁

したし物 香物 きうり、大こん

右之外ハ見合之事、

五月十日、午刻二

大津

差紙 御役所

野洲郡

木濱浦

杉江浦

右之通差紙^老通御役所より参候二付、慥成物二相渡し、舟頭名前相

記し置可申事、

右御差紙同日未下刻二木濱清兵衛舟二相渡し申候事、

一、御茶壺御下向二付、御役所^老廻状式通、五月十七日午ノ刻御渡し

被成候二付、仕立飛脚ニて先方へ相届ケ候事、尤賃銭幸津川三百四

十八文、小田四百文、^老七百四十八文、

大つ

廻状 御役所 江州野洲郡

小田始

大つ

廻状 御役所 江州野洲郡

幸津川始

五月十八日午下刻

大津

一、書付 御役所

高嶋郡 舟木浦

右御書付、蔵橋丁升屋弥兵衛方へ参合被居候飛脚有之候二付、其者へ頼遣し候事、尤添状左之文言、

口上書

大つ御役所^老御書付^老通御渡し被成候二付、幸便飛脚二差遣し申候間、慥御受取可被成候、已上、

大つ

五月十九日

百艘

舟木浦

舟年寄衆中

飛脚名前江州太田村千右衛門、但し賃せん廿四文、

覚

一、百廿四銅 壹つ

一、四十八銅 壹つ

一、三十六銅 貳つ

一、廿四銅 三つ

一、十二銅 十九

^老右之通奉納仕候、已上、

申五月廿一日

大津

百艘印

貴布祢御社中

一、五月廿一日、例年之通貴布祢神酒頂戴可致処、未松本一件相済候付、

袴持参いたし相慎、役人不残出勤致候、尤料理はいつ茂の通り申付

候事、

一、五月廿二日、赤ノ井浦佐兵衛、八兵衛、多次郎右三人被来、与二郎太郎兵衛、七兵衛面談いたし候所、何分ニも赤ノ井浦二船株七つ御免有之候様御頼くれ候様、たんく相頼被申候付、様々利害為申聞當時船株新規御願申上候義難致、たとへ御願申上候而も容易ニ御聞上ケ候義とも不被存、其上浦々差支候義も在之旨申聞せ候へ共、只無法ニ勝手俣成義とも被申立、何分堅田浦へも相頼置候間、及相談ニくれ候様達而申聞、又近日登り来候様申置歸村被致候、

一、右八只芦浦觀音寺様方ニ而御見せ被成候野洲郡御廻状ニ、赤ノ井の浦名在之ニ打かたむき居候事ニ付、此上無法ノ義とも申出候而ハ面^④到ニも有之、若又右ニ付外ニ御書物等も無之哉心得之ため承置度五月廿四日与次兵衛、太郎兵衛内々ニ而、芦浦西川五郎兵衛殿方へ罷越、右之始末申承候処、五郎兵衛殿被仰聞候者、当春木濱公事之義ニ付、赤ノ井ノ者共来り、何ニ而も書物等有之候ハ、相さがしくれ候様相頼、依之無何心書物類相記候へハ、右廻状之扣在之、則赤ノ井之浦名も有之候事故、見せ遣候へハ、則うつし歸り候而、其後百艘ノ利害ニ而一件事済いたし候由申来候迄ニ而、相濟候事と存居候、仰被聞候通り新規株願等は定而むつかしき義存候、只今仰聞候通り相心得、重而来り候ハ、右書付ハ問屋中、船持中之事ニ而株ノ無有と抱候義ニ而ハ無之段為申聞可申候段被仰聞、勿論御廻状之扣帳并二船員数改帳等御見せ被成候、

一、此方ノ申上候者、前方御先代五郎兵衛様江私共同役次郎右衛門、三郎兵衛申上候者、当御家之義者古き御事ニ而候へハ、湖辺浦方書付等可有御座、右ニ付只容易ニ相頼候迎、古代之書物等御見せ被遣候而ハ、多ク物工之者とも彼是申出候様相成、左候へハ一方宜候へハ一方歎キ候道理ニ付、何事も無難成義ニ相好候間、此段御勘考被下

候様申上候処、随分尤之事ニ候、成程事治り候義もヲコリ候道理ニ候へハ、已後各方へ乍内々相達、其上取計、又巨細成義ハ取敢不申候様相心得居候段被仰下、難在奉存罷在候、右等之訳ニ候へハ、くれ御勘考被下度申上候事、

一、右等之義是迄余り外浦方申来候義も無之候へ共、近来堅田浦方雄こと一件之義ニ付、相尋ニ来候様被仰聞候、
赤ノ井書物并御廻状之写ハ前ニ在之、
右ニ付、六月三日挨拶書状下ス、

一、五月廿五日昼八時過、彦根他屋仲衆八幡町中嶋屋^{新太郎}兵衛と申者
あらいものいたし居候而、風と堀中江罷出し^速ずみ候付、^{但風呂や之}
間也、^{間と彦根他}近辺之者とも大勢せわいたし引上ケ、早束右町江引取せわ被
致候へ共、翌廿六日朝相果候ニ付、八幡町橋本町方御役所へ御
届ケ被申上、則為御検使と御目付左久間又兵衛様、高橋等太郎様
町代遠藤仁右衛門殿御越被成、左之書付来り候付、
覚

百艘年寄式人
右八只今八幡町御検使場所へ罷出可申候事、

申五月廿六日 町代

八幡町ニ而在之候油売買会所紅屋庄兵衛方ニ付、与次兵衛、七兵衛
罷出候所、左久間様被仰聞候者、昨日当町内之者入水いたし相果候趣
右両町分ノ訴出候付、右場所ハ百艘之持場所ニ而も無之哉、又は外
二あやしき義も不見受申哉之段御尋ニ付答上候者、右堀之義ハ百艘
持場と申義ニ而も無之、尤向洲ニ是迄此度之様成入水致候例は覚へ
不申候へ共、風呂屋関ニハ是迄右躰之義も在之、勿論相果候義は覚

へ不申、又打寄者杯八度々御座候而、たとへ私共会所前二而も石垣際へ(寄)候へハ、町分方御訴被申上、私共一切構ひ無御座候、しかし船二拘り候義二候へハ、或ハ船方はまり候者、又ハ入舟之者怪我いたし候と申様成義ハ、其品二方船方之義故、無抛御訴可申上義も有之候へ共、いつれ之堀々浦々二而も、右之通り勿論此度之義ハ居町も有之、陸方はまり候事二而、取訳差構無御座趣申上候処、爾らハ其趣二相心得取計可申、一通り承り不申候而ハ相分りかたく候付呼出候、しかし此度ハ会所眼前之事候へハ、右入水二付何もあやしき義等見受不申候旨、口書可致間、暫差扣へ候様被仰渡、

一、同夜五つ時頃、口書之右之趣ハ八幡町、橋本町方御訴被申上候通、昨日七つ時頃入水致居候趣見受、彼はせわいたし遣候迄二而、外二あやしき義に見受不申段口書相濟、明日ハ御役所へ罷出候二不及段被仰渡候而、翌日事済いたし候事、

右ハ全躰彦根他屋石垣方同所門番之者と水あび吉人はまり沈ミ候付、当会所前二田舎出船之艦も有之二付、早束差遣(速)しさかし候へ共不相知内、加賀屋五郎兵衛下人松之介と申者水入いたし、引上ケ他屋へ引取、伴衆部や二而介抱致候へ共相果候義二付、尤領分違之事故、甚面倒候所、橋本町地先字八幡屋之段江引上ケ、八幡町江引取候分二いたし御届ケ被申上候付、翌廿六日八幡町品屋弥三殿、高嶋屋宗助被来、此段相合御尋候節、御答申上呉候様被相頼候へ共、容易二承知いたしかたく、しからハ町分障り二不相成様御答可仕段申置候へ共、御檢使之節上ケ場所之義ハ百艘方へ御尋無御座候事、

重而右様之義又ハ打寄物等、右八幡屋段二有之候とも、当仲間へ引受候義ハ無之事、

銀式刃 御檢使佐久間又兵衛様 筆工武六先取百文遣ス、
// 老刃 同高橋等太郎様

// 老刃五分 町代遠藤仁右衛門殿
右之通礼相勤申候、尤此度之義右二及間敷哉二候へ共、右訳合申上、又ハ外二巨細之義等も在之間、格別二取計ひ例二不成候、

一、廿八日、品屋、高宗挨拶二被来候、又親類者兩人吉樽持参いたし候へ共、不受申歸し遣候

前留書在之候一件二付

一筆啓上仕候、追々暑候時節二御座候処、益被遊御壯建(健)二御座、珍重之義奉存候、誠二此間は参上仕種々得貴顔大慶存、猶更御咄し申上候義二付、無御腹藏被仰下、於私共二茂安心仕、千々々忝次第奉存候、弥御多用之節種々御叮嚀御饗応、不相替御懇情之御義、罷歸り一同風□□難在仕合奉存候、早束御礼可奉申上候処、何角延引及無数二候段、御高免可被下候、右御礼迄以書中如此御座候、恐惶謹言、

六月三日

百艘 与次兵衛 太郎兵衛

西五郎兵衛様参人々御中
猶々御冷室様へも宜御伝達被成下度乍恐奉存候、外良餅吉卓鹿抹之品御座候へ共、任幸便奉御呈候、以上、

六月十日、右返書礼状来ル、浦辺之義舎居候様書込在之、此書状のけ置、

一、前方堅田町組二奉公致居候五兵衛と申者、此度上組小船持市兵衛方江養子二参り候二付、右組方治兵衛来り、仲間二差支も無之哉旨

相尋候付、六月二日寄合之節及談し二候処、昨春御本山大法事之節

ハ可成二相勤候而、さみしく相成候段ニ至暇願之義ハ不本意之致方
二候へ共、畢竟船方ヲ離候者之事故、又外ニ差而悪事も無之事ニ
付、品よく暇遣し候、尔る処此度手先之船方へ立戻り候義者、少し
障ニ可相成候へ共、此後相慎無難ニ相統致候義二候ハ、了簡いた
し遣し可然段相究り、六月三日上組次兵衛呼二遣し、此段得と申聞せ、
勝手ニ取計候様申遣候、

一、上堅田町白井屋次郎右衛門裏地西外、冬分湯桶入候仮小屋建候付、
此節根石壹並へ居申度旨二付、則書付差入被置候事、六月四日

一、例五月廿七日、伊勢講旧冬も当会所ニ而穩便ニ相勤候所、尚此節之
義ニも候へハ、勿論温氣之時節ニ候間、平方一統打寄御神酒計頂戴
いたし候事、

鮒あら味物、てつぼう

八寸 生貝、玉子、かまぼこ、はし□□、日光梅

鉢肴、鯛二なすひ

右いせ講講元を払申候、

六月十五日、例年之通湖上船増減御改配符、御役所を御渡し
被成候文言、左二記ス、

例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日を十日迄ニ可致持参候、
一、右帳面之内浦方ニ寄貸船混乱いたし候間、借り主并貸舟屋共入念相
改、船毎貸借致符合候様可書出候、
右之趣得其意、此配符致請印無遅滞早々順達、留り所を可相返候、以上、

大津

〔割印影写〕
申六月十五日 御役所御印

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、同體方、
西ノ切、釣漁師、今堅田、小野、和通南濱、同北濱、五ヶ浦、
南比ら、北比ら、南小松、北小松、打下、大溝、同體方、永
田、下小川、今在家、藤江、横江、船木南濱、同横江濱、舟木北濱、
南古賀、新庄、太田、藁園、深溝、針へ、森村、馬原、木津、
今津、新保、領家、北仰、貫川、桂村、深清水、大沼、中
庄、北新保、知内、西濱、海津、大浦、菅浦、月出両組、岩熊、
塩津、石川、片山、東尾上、延勝寺、海老江、安養寺、早崎、
下八木、八木濱、大濱、南濱、川道、

右浦々 庄屋
舟年寄

右御配符十六日朝坂本川崎ノ又兵衛へ相渡ス、使廻り清吉、

一、同御配符吉通 松本三ヶ所始メ伊庭止メ、

右六月十五日未ノ刻松本浦舟方へ相渡ス、使廻り新介

右二付貸屋中へ出シ候廻状文言、左二記ス、

口濱

一、貸船増減相改帳面二記、来ル七月朔日を十日迄ニ上納可被致候、尤
帳面之内浦方ニより貸船混乱致候間、借主并貸舟屋ニも入念相改、
舟毎二貸借符合致候様ニ可被書出候、此廻状早々順達、留り所を御
返し可被成候、以上、

申六月十五日

百艘印

仁右衛門、仁左衛門、甚吉、六兵衛、源助 廻状二名前順ニ相記し、
此源介者打留メニ可致事
清介、源七、五郎八、吉兵衛、源六

一、赤井浦船方之衆中、同浦新規船株願候義ニ付、代りく度々被登候

二付、六月十七日三ヶ浦を呼二遣し、不相成段及引合、委細ハ三ヶ浦対談帳ニ記在之候事、

一、去未九月、松本浦船方長持積送り候付及御訟訴、当三月を松本宝淨院、惣年寄小野宗九郎殿取曖被致、此節熟談相調、依之、六月十六日御役所江双方連印を以済証文差上、右一条発端を委細留書別帳ニ在之候事、

六月十三日、大津暑御窺(氣脱カ)

石原庄三郎様 京古素面三拾把 白木式重くり台
下ケ札付テ

御元々

柴山泰蔵様

//

内堀繁太様

町方

篠田牧太郎様

三宅新右衛門様

舟方

岡田大八様

右同素面廿把宛

御目付小頭兼帯

左久間又兵衛様

御目付

柿沼小平太様

御目付小頭兼帯

手塚傳十郎様

小かしら

川嶋惣右衛門様

右ハ拾五把宛

右之外、御門内御手代衆、組やしき新建不残、北出氏、手札ニ而相勤候事、

与次兵衛、太郎兵衛、供多七

六月十五日、京都暑中御窺

東御奉行

小長谷和泉守様

金式百疋 二重くり居台
下ケ札

御用人

小林八左衛門様

吉川吉助様

赤間三郎右衛門様

飯塚五郎作様

岡田長兵衛様

迎田宋左衛門様

小林留五郎様

右七軒江手札計

御公事方

山田釵治郎様

榎橋平蔵様

石嶋五三郎様

中川定右衛門様

塩津惣五郎様

喜多尾八郎右衛門様

加納万五郎様

平尾演左衛門様

右四軒江銀壹両宛

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

西御奉行

三橋飛騨守様

金貳百足

二重くり居台
下ケ札

右九軒江手札計

御用人

武藤貫三様

御取次
小林与作様

辻本仁左衛門様

久保嘉十郎様

松本雄大夫様

吉原直様

大竹半平様

右七軒江手札計

御公事方

深谷平左衛門様

御公事下
上田八蔵様

不破伊左衛門様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

廣瀬左野右衛門様

飯室助左衛門様

酒井宗助様

下田耕左衛門様

山田傳左衛門様

右五軒江銀壹両宛

浅賀和作様

杉原作十郎様

右七軒江手札計、

丁代

田内彦助殿江銀壹両^{三匁}

若狭屋八兵衛殿江切素めん四拾七わ、代貳百文

但し例年差鯖式刺遣し候所、当夏ハ未無之候故、京都ニ

而塩肴ニ而も見計ひ調遣し候積り候処、肴類高直ニ付索

麵遣又、神泉苑町ハ元来万事高直之所故、此後ハ当地ニ

而何成共買入持参可致事、

×金壹両銀壹両^{九三匁}

右之通十五日朝、七兵衛、勘三郎相勤ル、供雇喜兵衛壹人

一、六月廿九日、当町内河村屋喜介裏湖水際石垣ヲリ段、近年風波つよ
く及破損、此節積替申度、是迄北向ニ根石八尺計出し在之候処、此
度西ノ方へ付替候へハそんし不申旨ニ付、其段被相頼、勿論船着積
場ノ勝手能相成、しかし八尺ノ根石ヲ積上ケ候而ハ目ニ立候義も可
在之候へハ、六尺計ニ引込、西向ノヨリ段巾せまく被致可然段懸合、
其趣承知ニ而、別紙書付取之置候事、

一、三月五日、平方振舞延引之処、六月十六日松本一件相片付候ニより、
一同相招及披露可申処、此節浜方殊外さミしく、尚更臨時入用等も
有之義ニ付、右振舞之席ニ而平方一同申咄可然義ニ相究、依之六月
廿六日於靈仙ニ例年之通振舞被致、仲間方右松本一件落着為祝金
貳百足、諸白三升差遣候、双方打潤長久之基を示談いたし候事、

但近来北国町伊賀屋作十郎宅ニ而三月五日ニ相究在之候へ共、此
節湿気之事ニ付、尤定月も延在候義ニ付、此度ハ今風八百屋嘉兵
衛へ被申付、板元相勤候事、

与次兵衛、太郎兵衛、七兵衛、六兵衛、勘三郎、忠兵衛、武七、
八郎兵衛、定太郎、外ニ源右衛門、三郎兵衛ハ病氣付不参被致候、
平方

十兵衛代源左衛門、佐右衛門と七兵衛、次郎左衛門、市兵衛、
長三郎、市松代伊兵衛、吉左衛門ハ病氣付不参いたされ候、

一、北之町組長三郎義、旧冬心得違ニ而船頭共慰いたし居候場所へ立
入、從御役所御察当在之、御糺之上此度之義ハ無難ニ当春事済いた
し忝候処、仲間方ニハ兼而船頭共取締等精々申渡候義も、右躰之義

在之候而ハ、已来差支候義も在之二付、仲間及相談、其後仲間つきやい致間敷申合在之処、此度佐右衛門、孫左衛門兩人を段々断被申出、此節松本一件も事済いたし、銘々心祝ひ候折柄二付、右兩人挨拶二任せ、已前之通相済申候事、

右二付平方振舞之席江出勤被致候、尚又七月二日仲間月並寄合之席江諸白式升、赤糸少シ、蒲鉾壹枚、むし貝小五持参被致二付、則相披露致、長三郎二盃いたし、作右衛門も出席被致、座二付被申候、孫左衛門ハ此節上京二付不参被致候、何事も作右衛門引請二而首尾能相済申候事、

一、去年来松本一件之儀二付、北野天満宮心願在之処、当六月十六日内濟二付、尤此節六月廿七日御遷宮、七月一日を七日迄万燈半減御勤之由、宿坊常久を被申越、為御礼参金百疋献納いたし、則大津町組六兵衛社参七月七日被致候、

七夕御礼

石庄三郎様 青銅百疋 木札下ケ

元々

柴山泰蔵様

//

内堀繁太様

町方

篠田牧太郎様

//

三宅新右衛門様

船方

岡田大八様

右鳥目五十疋宛

右之外御門内御手代衆、組屋鋪新建御手代衆、不残手札計二而

船方下 北出雲平殿、手札計

与次兵衛、太郎兵衛勤ル、供新介

乍恐口上書

五月四日積、杉江浦行問屋三郎兵衛上り、

高百四俵之内
へさ印瀬戸老儀

当津問屋大坂屋六郎兵衛積、
荷主筑前二鹿浦戎屋定七、

船主勘三郎

右之船金蔵堀二繫置日和待いたし、八日出船、五月十一日、積杉江浦行問屋三郎兵衛上り、

高五拾俵之内
一泉印瀬戸物式儀

当津問屋大坂屋六郎兵衛積、
荷主筑前二鹿浦泉屋平右衛門、

船主八郎兵衛

右之船金蔵堀二繫置日和待いたし、十四日出船、五月十六日積、能登川行問屋彦大夫上り、

正蜜拾五斤入小樽壹

当津問屋和邇屋藤左衛門積、
京二条通室町升屋八兵衛出、

船主三郎兵衛

右之船金蔵堀二繫置日和待いたし、廿一日出船、五月廿三日積、八幡行樽屋九兵衛上り、

高拾六俵之内
「九瀬戸老儀」
当津問屋大坂屋六郎兵衛積、
伏見大塚屋庄兵衛出、

船主孫右衛門

右同日積、同所行、舟屋庄兵衛上り、

高三十六俵之内
道瀬戸式儀

当津問屋木地屋忠兵衛積、
大坂京町堀壱丁目天満屋弥右衛門出、

船主右同人

右之船川口堀二繫置日和待いたし、廿四日出船、

右之通着船仕、水揚之節前書之通紛失仕候二付、当所問屋より先々之荷主江掛合段々吟味仕候得共、相知不申義二御座候、全日和待いたし罷在候節、何もの歟水主共油断ヲ考、右品々盗取候義と奉存候二付、此段御訴奉申上候、尤段々穿繫罷在候二付、御届延引二相成、此段も御断奉申上候、已上、

荷問屋

申七月八日

大坂屋六郎兵衛印

〃

木地屋忠兵衛印

〃

和邇屋藤左衛門印

船主孫右衛門印

同 八郎兵衛印

同 三郎兵衛印

同 勘三郎印

付添

百艘年寄

太郎兵衛印

大津

御役所

右書付当番所江惣年寄矢嶋氏取次被差上呉候処、御当番御組八戸民五郎様被仰聞候ハ、右荷之内筑前等之義ハ遠方之事ニ候得共、京大坂杯之義ハ近辺之事ニて、勿論積入日限も夫々違有之候処、今日迄

届延引仕候段御察当被仰聞候二付、太郎兵衛御答申上候ハ、船積荷物之義ハ数多義ニて、此度之義ハ怪敷義も相見江不申、毎度問違等有之義故、色々先々吟味仕候故、御届延引二相成候段、御断申上候所、以来ハ右躰之義ハ早速御届可申上様被仰聞、此度之義ハ御聞濟被下、尚又午掛り等も有之候ハ、早速申上候様被仰渡候、向後ハ右之通相心得、早速御届可申上候様可仕事、右願書之趣外ニ尙通認メ奥書いたし、船方御役人岡田大八様江通差上候、則奥書之趣左ニ記ス、

右之通町方御役所江今日御訴奉申上候二付、此段御届奉申上候、已上、

申七月八日

年寄太郎兵衛印

大津

御役所

外二品書尙通、御目附手塚傳十郎様江差上置、尤外両家目付江八口上二而届置候事、

右船之かこ御覚之ため記し置、勘三郎船岩吉、八郎兵衛船弥兵衛

やつ、三郎兵衛船吉次、孫右衛門船小三

右かこ之名前ハ為念ニ記し置候へ共、御役所江かこ之分出不申候、親方計にて相濟候事、

一、銀式匁 矢嶋氏 一、銀壹両 堀氏 一、鳥目三百文筆上

右ハ紛失荷挨拶、此度ハ日々入込日限も届延引二相成、夫故堀氏江内分相頼候故如此取計、仲間方直々認メ出候へハ挨拶無之、尤右各江礼物仲間拵、矢嶋氏ハ取次被致如此取計、

七月廿五日未下刻、御役所方呼二参り、左之書付御渡し被成、相届候様被仰付候、

書付 大津御役所

八幡貸船屋

利左衛門

支配人作次郎

右書付表封、同日八幡舟木九兵衛船二遣ス、作次郎方へ添状いたし遣ス、

右貸舟屋作十郎、七月晦日上津致、盆礼何角挨拶旁扇子二本持参いたし候、

七月廿三日、隠居年寄尾花川忠兵衛親右平殿死去被致、為香典金百足遣し候事、

同廿六日、年寄孫兵衛殿死去被致、為香典与金子百足遣候事、

八朔御礼

石原庄三郎様

金貳百足、

目録台二のせ、下り札付ル、

元々

柴山泰蔵様

内堀繁太様

町方

篠田牧太郎様

三宅新右衛門様

船方

岡田大八様

金百足宛

小頭

川嶋惣右衛門様

小頭兼帯

目付

手塚傳十郎様

目付

柿沼小平太様

目付

左久間又兵衛様

小野宗九郎殿

矢嶋藤五郎殿

堀猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

北出雲平殿

右九軒銀壺両宛

御足輕稻葉半七殿

御小遣ひ 藤七殿

政介殿

宿場肝煎

吉本弥四郎殿

山本俵五郎殿

五人鳥目廿足

御門番吟助殿鳥目五十足 // 内義鳥目廿足

白崎久太夫様、御蔵番三人 手札計

御門内御手代衆、組や敷不残 平蔵町年寄

新建 // 坂本町年寄

貝屋七兵衛

右各手札計

右之通与次兵衛、太郎兵衛、供新介

京都八朔御礼

東御奉行

小長谷和泉守様

金子三百足 二重くり目
録台、下ケ札

御用人

小林八左衛門様

御取次
吉川吉助様

赤間三郎右衛門様

飯塚五郎作様

岡田長兵衛様

迎田宋左衛門様

右七軒江銀壹兩宛

御公事方

山田釵治郎様

御池

御公事下
櫛橋平藏様

石嶋五三郎様

御池
中川定右衛門様

塩津惣五郎様

喜多尾八郎右衛門様

加納萬五郎様

平尾演左衛門様

右四軒江金百足

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

右九軒江銀壹兩宛

西御奉行

三橋飛騨守様

(金子三百足脱カ)
二重くり目録台下ケ札

御用人

武藤貫三様

御取次
小林与作様

辻本仁左衛門様

久保嘉十郎様

松本雄大夫様

吉原直様

右七軒江銀壹兩宛

御公事方

深谷平左衛門様

三

不破伊左衛門様

古

本多新左衛門様

古

飯室助左衛門様

古

下田耕左衛門様

古

右五軒江金百足宛

町代

田内与助殿

銀貳兩

筆工

奥田九右衛門殿

同壹兩

下町代

藤澤傳六殿 鳥目廿足宛

藤村左市殿

上町代中江

五百文

下町代中江

五百文

小番江

三百文

東西御門番

三百文宛

東西中番江

三百文宛

宿鍵屋左助江

三百文

同 下女江

貳百文

大竹半平様

御公事下

上田八藏様

古

柏原治部右衛門様

古

廣瀬左野右衛門様

古

酒井宗助様

古

山田傳左衛門様

三

浅賀和作様

古

杉原作十郎様

三

右七軒江銀壹兩宛

追分丸屋四郎兵衛江 百文
山科大津屋孫兵衛江 百文

金三両三歩

五百文 二

銀貳両壹

三百文 六

同壹両三十壹

貳百文 三

百文 二

右之通六兵衛、勘三郎相勤ル、供多七、荷物雇喜兵衛

一、堅田中村町船入堀修覆二付、角力興行いたし候旨、升屋善兵衛、船持半兵衛兩人相頼二来り候付、不外成事故左之由取計遣ス、以手紙得御意候、弥御安康可被成御座奉賀候、先比は船入修覆之ため角力興行被成、此方共見物二可参段被仰越候へ共、其節何角差支在之、乍残念参り不申候、随而乍軽少御肴料南鐙壹片進上致、いつもれも方江宜御伝達被下候、先は草々、以上、

八月二日

大津百艘

堅田中村町

角力御せわ方中

此分書状金子とも堅田分七へ渡ス、八月三日申ノ刻ニ遣ス、

一、八月廿二日、赤井長右衛門、七兵衛、孫左衛門来り、兼而御尊申置候船株之義、赤之井浦二前々七株在之候ニ相違無之候間、此段取次いたし御願申上呉候様申聞二付、元来赤之井浦二船株在之候謂一切無之、容易ニ御願申上候而も御聞上も在之間敷、勿論外浦方差支ニ相成義も在之間、御願之義被相止可致段、様々利害為申聞候へ共、何分聞入不申、此上は村役人へも申達、其上是非御願申上候旨申之、歸村被致候、

右二付堅田浦へも八兵衛、左兵衛、孫左衛門、右同様申参候由、則堅田浦方書状来り候、

右二付打捨置候義も致かたく、廿八日船方岡田大八様江与次兵衛参上致、赤之井浦ノ者共、当春西教寺万日二付木濱浦取合ノ事発リ、此節私共江新規ニ船株御願申上呉候様度々申来り、難題申懸ケ、いろく利害申聞せ候へとも聞入不申、此度は押而御願可申上段申之候、依之、左様之義ハ聞入等在之間敷存居候へとも、此段御内意之上急度右浦方之義ハ前々無浦ニ相違無御座、此度証拠ニ仕候書付之義ハ、野洲郡八ヶ浦ニ御廻状ニ而、其節御城米出候浦々江相廻り候義ニ而、右浦順名前之内ニ赤之井在之候由、申立ニ可相成義ニ而も無御座候、勿論別紙慶安年中船改帳ニも、船名前式人或ハ三人も組合持立候義ニ而、船株之義御座候ハ、たとへ船數ハ減増致し候ニも、株名前ハ七人相立可申筈、何分様々烏乱成義申立困申候、尚又新規ニ船株御免在之候而ハ、諸浦一鉢之差支ニ相成候間、以御勘弁静謐ニ治り候様奉願上候段申上候由、岡田様被仰聞候者、此間赤之井太右衛門と申者来り、右書付持参いたし、尚又願書も持参いたし候義、右之段願上度旨申之ニ付、証拠可成書物とも被存ず、尚更自浦所持之書物ニ而も無之、芦浦觀音寺と在之候段申上り、畢竟他のものを我ものニ致候道理何ともさたかならず、しかし相願可申義を押而止メ之と申ニ而ハ無之間、此段相考可申、尤願書之内ニ此度万日廻向ニ付、木濱浦と及取合、大津船方取喰無株取計致候段書入在候へとも、是ニ而ハ忽願書取上ケかたく、只船株一条之願ニいたし可差出段申聞せ候由、しからは宿元ニも扣居候もの御座候間申談、其上村方へ引取、追而御願可申上段申之歸村いたし候、右之段々御咄被仰聞候ニ付、何分宜右御回状之写、慶安年中之船改帳之写持参致御覽ニ入候由、其方之訳承り候へハ、尤之義候間相心

得居候段被仰聞候、引取候処、無程從御役所御使來り右書付式通中ノ口迄持參致候様被仰越候付、則与次兵衛持參致書付之扣式枚岡田様へ差上置候、尤右御回状又船改帳之写御前ニ在之二付略ス、尤右写ハ四月之所ニ在之候事、

一、八月廿七日、荷問屋仲間貴布祢講、百石町伊賀屋ニ而相初り申候、廿一日之処差支之義在之、廿七日ニ相成候、

一、嶋関近来玉屋十兵衛江かし置候処、当七月ニ取戻し候書付、八月廿八日ニ下地書付ニ接為致候事、已來玉十、石嘉兩人ノ手分錢五貫文被差出候事、

一、九月朔日、從御役所呼ニ來り、与次兵衛罷出候処、内堀繁太様当春五ヶ年之間江戸表御儉約ニ付、御城米船積いたし候浦々江申達、是迄渡し方之内式割減可申段被仰渡候、委義ハ三ヶ浦対談帳ニ在之候、奥ニ在之候、

先触

石原庄三郎手代

内堀繁太

三宅新右衛門

覚

一、乗物 此人足四人 壹挺

一、具足櫃 此人足壹人 壹荷

一、人足 六人

内

両掛 三荷

合羽籠 壹荷

竹馬 壹荷

步竿 壹組

〆人足拾壹人

右者御代官明七日曉七時大津御役所出立、矢橋迄乘船ニ而野洲郡北櫻村為檢見御用被罷越、日歸ニ候条、得其意書面之人足往返共御定之賃錢請取之、無差支可被差出候、此先触早々継送り、北櫻村を可被相返候、以上、

(割印影写)

申九月六日

石原庄三郎手代

三宅新右衛門印

内堀繁太印

百艘、矢橋、草津、守山、野洲郡北櫻村 右宿々村

問屋

庄屋中

年寄

追而歸之節者、両掛壹荷、步竿壹組相減候条、得其意合人足九人分賃錢可被請取候、以上、

右御先触壹箱、九月六日午刻御渡し被成候ニ付、即刻小舟入へ持せ遣ス、使新八

重陽之御札

石原庄三郎様 青銅百足、木札下ケ

御元〆

柴山泰藏様

〃

内堀繁太様

町かた

篠田牧太郎様

〃

三宅新右衛門様

船かた

岡田大八様

右鳥目五十足宛

右之外御門内新建、御手代衆組屋鋪不残、手ふた計、

船かた下

北出雲平殿、手札計、

右御礼、七兵衛、勘三郎相勤ル、供清吉

九月十五日、從御役所御渡し被成候御配符式通、左之通、

追而本文運上銀大津橋本町古望仁兵衛方ニ而懸改候間、得其意納

人印形持參可致候、以上、

湖上船運上銀、來月朔日ハ五日迄持參上納可致候、遲滞致間敷候、

此配符令請印、早々順達、留り所ハ可相返候、以上、

大津

〔割印影写〕申九月十五日 御役所印 大津ハ川道迄

右浦々庄屋、船年寄

同日午ノ刻坂本四ツ夜虎吉へ渡ス、

松本ハ伊庭迄

右浦々庄屋、船年寄

同日、松本浦舟年寄方へ持せ遣ス、使新介

一、右同断 壹通

口演

一、船御運上銀來月朔日ハ五日迄ニ無遅滞上納可被致候、此廻状早々順

達、留り所ハ百艘会所江御返し可被成候、以上、

申九月十五日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、

五郎八、善兵衛、源六

一、九月十二日、三井寺ヨリ暑氣見舞素麵四拾把^{〔到〕}至來候事、

右ハ当年政所賄方新役ニ而不案内ニ付、延引仕候段断申參候事、

一、九月廿四日、例年之通石山ハ松茸甘本來り候付、役人中江配当致ス、

覚

一、百廿四銅 壹ツ

一、四十八銅 壹ツ

一、三十六銅 貳ツ

一、廿四銅 三ツ

一、十二銅 十九

×右之通奉納仕候、已上、

大津

申九月廿一日

百艘印

貴布祢御社中

九月廿三日、御先触ニ通御渡被成候、

石原庄三郎手代

先触

内堀繁太

中島剛之助

大津始

覺

一、御用長持

壹棹

此人足四人

一、具足櫃

壹荷

此人足壹人

一、乗物

壹挺

此人足四人

一、人足九人

内

兩掛 六荷

合羽籠 壹荷

竹馬 壹荷

步竿 貳組

×人足拾八人

右者当作毛為檢見御代官、明後廿五日曉七時天津御役所出立、左之通被罷越候条、得其意書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遲滯差出、渡舟、川越等之場所ハ前宿より及通達、無差支様可被取計候、且村々送迎人足之義者、例年之通申合、無間違可差出候、尤泊村之義檢見手繰二寄治定難致候得共、先為心得相達候、人数者上下拾六人之積可被相心得候、此先触早々順達、留り村々可相返候、以上、

(御印影写)

申九月廿三日

石原庄三郎手代

中島剛之助印

本庄彦六〃

三宅新右衛門無印

内堀繁太印

天津、矢橋、草津、守山、廿五日泊り武佐、愛知川、高宮、鳥居本、

米原、長濱、浅井郡、廿六日泊り曾根村、木尾村新田、古橋村、廿七日、廿八日泊り上野村、池奥村、龍岸寺村、力丸村、北野村、谷口村、龍安寺村、黒部村

右宿々庄屋中
村々年寄

追而垂駕籠四挺、此人足八人用意置可給候、以上、

先触

石原庄三郎手代

三宅新右衛門

本庄彦六

中島剛之助

江州野洲郡北櫻村

庄屋
年寄

右箱入式通御渡被成候二付、即刻矢はせ遣入、

但し壹箱二式通入有之、

一、九月、從御役所呼二来り、与次兵衛罷出候处、内堀様被仰候者、已前増舟賃願之義二付、八ヶ浦罷出候事故、此度も右浦方呼出可申渡義二候へとも、失却之程も気毒二候へハ、百艘申遣候而承知之上代印二而も可然哉之段被仰渡二付、則左之通廻状遣候、尤右御城米舟賃之義ハ、全躰下直之事二而、此上式割下ケ二而候ハ浦方一同甚難義之事二付、御断申上候へとも、江戸表申来り迎も、難御願相叶申間敷二付、御受可申段被仰聞、不得無是非左之通之事二御座候、東浦之分へ
從御役所此度左之通被仰渡候間、御承知之上浦名下二請印被成、不限昼夜二順達被成、留り所ハ百艘会所へ早々御戻シ可被成候、

当申年より来ル子年迄五ヶ年之間、御儉約被仰出、右御年限中諸向渡方式割減相成候間、都而是迄差定有之候御年貢、諸賃米、金銀も可相減旨、今般被仰渡候二付、湖上船積賃米も是迄之渡方式割減を以御年限中御渡二相成候間、此段浦々江申達、廻舟二罷出候浦方并當時御城米船積いたし候浦々る、承知之請印可差出事、

申九月

矢橋、山田、志那、吉川、のた、八幡、常樂寺

御城米出候浦方、右之外洩候浦方有之候ハ、其近浦方前書之趣可被申達候、已上、申九月五日

百艘印

西北之分へ

前同様文言二而、同壹通、

堅田、守山、南比ら、北比ら、北小松、大溝、永田、横江濱、舟木、針へ、今津、海津、大浦、塩津、南濱

廻状

百艘

浦々舟年寄中

右廻状式通とも如写之、

浦名前御役所方御書被下、其上八ヶ浦又多羅尾御支配も承候分書入相廻候、此外二も洩候浦方有之候由、跡二而承候へ共、多羅尾御手先之事故、其儘二いたし置候、未多ら尾様方御沙汰無之由、右回状戻り来り、此段申上候而、尤掛方ノ義二付百艘計代印致候も如何ニ存候処、内堀様も三ヶ浦代印致可然哉之旨被仰聞候故、則御受書三ヶ浦方差上候事、

尤九月三日堅田庄兵衛、仁右衛門、八幡喜一郎、太郎兵衛、長左衛門、右寄合いたし、弥御受申上段治定いたし、廻状差出し候事、

乍恐奉差上御受書

一、仰渡され候通相認

右之通浦々江通達任、一同承知奉畏候、依之惣代御受印形奉差上候、

以上、

文化九年

申九月

百艘年寄

与次兵衛印

太郎兵衛印

堅田浦舟年寄

庄兵衛印

八幡浦舟年寄

喜十郎印

大津

御役所

右九月廿七日、船方御懸り岡田大八様江差上ル、堅田、八幡共写書遣候、廻状式通御受書之写、印形付御箱へ入置、

右浦名前之外、江頭は三ヶ浦計積候事故、十五日帳別之節問屋三軒へ申聞せ候、赤ノ井之義此節論中二付、村方之者共心得違いたし候而もあしく候間、九月廿五日太右衛門被来候節申聞せ候事、

先触 北野村始

石原庄三郎手代

内堀繁太

三宅新右衛門

覚

一、御用長持 壹棹 此人足 四人

一、具足櫃 壹荷 此人足 壹人

一、乗物 壹挺 此人足 四人

一、人足 八人

内両掛五荷、合羽籠壹荷、竹馬壹荷、步竿式組

人足拾七人

右者当作毛検見御用二付、御代官明廿九日曉七つ時江州北野村出立、大津御役宅江被罷歸候条、書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遲滞差出、渡船、川越等之場所從前宿及通達、無差支様可被取計候、此先触早々継送り、矢橋浦を大津百艘江相達、夫々同所御役所江可被差出候、以上、

一 申九月廿八日

石原庄三郎手代

三宅新右衛門印

内堀繁太印

北野村、長濱、米原、鳥居本、高宮、

廿九日泊り上下十四人之積

愛知川り手当可被致候、武佐、守山、草津、矢橋、百艘

矢橋浦を乗船之積り二候得共、風波有之候ハ、草津宿を陸地被罷歸候間、矢橋浦を草津宿迄、例之通言人差出承り可被申上候、

右宿々問屋、年寄中

追而垂駕籠四挺、此人足八人用意いたし置可給候、以上、

右ハ廿九日夜、矢橋浦より深更ニおよび到来二付、翌晦日早朝御役所江持参いたし、御門吟助殿へ相渡し帰り候、

但し右躰之儀ハたとひ深夜たりとも、即刻御役所へ持参いたし可申事、

乍恐口上書

一、百艘仲間年寄役之内孫右衛門義、当七月死去仕候処、此節無人数二付、于今跡役難相究、余り延引仕候間、此段御断奉申上候、尚跡役之者早々相究、其節御届ケ可奉申上候、乍恐此段御聞濟被成候ハ、難在可奉存候、已上、

文化九年

百艘年寄

与次兵衛印

申九月晦日

太郎兵衛印

大津

御役所

右ハ跡役相究候迄御届二不及候へとも、此節赤ノ井一件印形上ケ候義二付、御懸り岡田様へ内窺いたし候処、右之通取計候様被仰渡候、

石原庄三郎手代

先触 中嶋剛之助

牧田始

覚

一、垂駕籠 壹挺 此人足三人

一、分持 壹荷 此人足壹人

又三人

外二宿駕籠壹挺、於宿々用意いたし置可給候、

右者我等義明二日曉正八時、濃州多藝郡押越村出立、大津御役宅へ罷越候条、書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遲滞被差出、且渡舟、川越、止宿等之義、無差支様取計可給候、此先触早々順達、大津至百艘を御役宅へ差出可被申候、以上、

石原庄三郎手代

(割印影写)

印 申十月朔日

中島剛之助印

牧田、関ヶ原、今須、柏原、醒ヶ井、馬場、鳥居本、高宮、
二日宿 愛知川、武佐、守山、草津、矢橋、百艘

右宿々

問屋
年寄中

右者十月三日朝五つ時矢橋を到来、
(即) 速刻御役所へ持参刻、清水様へ

相渡入、

一、書付 御役所

野洲郡木濱

貸舟屋

太兵衛

右十月九日未下刻御渡被成候二付、

当月中頃、野田村庄屋定八出津致被申候義ハ、同村問屋源藏当夏病死致、跡子息相統被致候処、次第二勝手方不如意ニ相成、則上之郷比留田村ハ前々客先キニ有之、地下米凡五千俵程も被送來り候処、当時源藏義少々不行届義共有之趣ニ付、当秋後外問屋方へ右地下米被送候様ニ相成、甚以難涉仕罷有候、依之、親類定八比留田村へ段々被掛合候処、向後定八証人ニ相立被申候ハ、是迄通り相送り可申様ニ応対相究候、則當時之処送り状受取書共問屋源藏代定八与相認可申筈ニ相成御座候、右ニ付問屋金三郎、市左衛門両家ハ彼是故障ケ間敷申立候得共、此義者定八ハ於村方ニ引合可申、然レ共船積方之処ハ是迄通り源藏名前ニ而積揚ケ可仕候へ共、三ヶ浦廻船場并前々ハ帳屋与も相勤罷有候得者、自然此後万一故障与も有之間敷義ニも難計候得者、其節者大津浦へ頼出御苦勞ニも預り度存念ニ候へ者、兼而御合置被下度、此儀御年寄中へ内々御頼申入置候様、庄屋定八、六兵衛方へ参り被申候二付、及披露ニ記し置候事、

十月十七日

一、船頭町会所之義、前々ハ仲間寄合等致候節は誰不憚用遣來り候処、近来及大破修覆為手当町中ハ持寄講取結被置、仲間ニも敷札式枚加

入致、其外大鉢仲間中交り在之候処、当満会ニ相成、但三拾匁懸五十人也、依之手前堅田屋勘三郎重々せわ被致、会所普請も成就致候、但九月迄ニ右因縁ニ付、此度仲間相談之上、手伝料として金五兩差出し申候、尤普請入用高ハ式貫匁余も入候趣ニ候へ共、時節柄之事故、右之通取計、乍併仲間方之心得ニ者、右金代銀三百匁余り候へハ、町中ハ被せわ致、慥成方へ預ケ置、以利足年々とゆ廻り、聊修覆料ニ被致候ハ、為方ニも可相成事と存、此旨精々町内船方之衆中江及示談置候事也、

右会所之義ハ、前々は船頭町と申程之事ニ而、船方之もの多分在之、依之、家具等も乍鹿物仲間役人数ニ当廿四人前取揃拵被置候、時節とハ乍申追々船持致減少、当時漸四、五軒ならて無之候、此末心得違不致、仲間方大切ニ取計ひ、何卒已前ニたち戻り申度一同心願ニ候、仍而あらくとめ置候、

当時船頭町住宅船持之名前

勘三郎、三郎兵衛、次兵衛、同居庄兵衛、孫右衛門、市兵衛、七兵衛、

右之通ニ候事、

右料金は、年寄勘三郎殿方江六兵衛持参いたし候事、

十月晦日

傘、下駄之事従往古なくて雖為濟來時節之振合ニ応し、聊不厭費大用弁理を補ふ而已、

一、当役中出勤之節臨時雨降出し、四廻り之者共無人数にて宿元江取集メニ参り候間も無之、是悲とも近辺ニ而かり里用ひ、尔るに乍かり置早々ニも不戻さる事もまゝ有之由、かし方迷惑、されともろくく、挨拶之礼も怠り、余り外法之事共度々ニ付、こたひ一同及談し両品あらたにたくハ侍る、

凡例

一、りんし雨之節、銘々かさ、下た持帰り候ハ、直さま元江戻し置可被申、若其まゝに差置、後日雨降候時、我ものなくとも、余人の傘、下駄決而かし申さず、無抛近辺ニ而かり候ハ、其仁る屹度かり賃謝義可致事、

一、こたひ初而之事二付、仲間料二拵、銘々江渡し置候上は、後二而損し仕替張替等は、自分料いたし可被申、若そんなから其まゝに有之時は、仲間二而料を引張替可申事、

但張替之内ハ自分之傘、下駄二而も差越置可申事、

一、四廻り中も同断之事、

一、わつか宿元迄ノしのに用ひ候迄ニ候得ハ、不拘見分自分の姓名を書記在之候間、仲間用之外他所江持参無用ニ候、

一、雨降候時いとま在之候ハ、是迄之通急りなく四廻り中精々心懸ケ、宿元江取集に罷越可申、決而等閑にいたす間敷候、

一、死去又ハ退役いたし候とも、両品とも仲間二のこし置可申事、

右之通相心得、尚更四廻り等は平生心を附、そんなし紛失無之哉、折々見改取揃へ可申候、俄雨に西地東地殊ニ夜分など取集ニ参り候事をぞんし候而者、聊鹿略にいたすへき事ニあらず、

月日

此書付かさ棚の下ニ張置在之間、見へかたく成候ハ、相改、折々張替可申事肝要也、

一、十二月五日、京東御奉行小長谷和泉守様御下向二付、

追分江御出迎

石場 御見送

右追分御出迎之兩人、七兵衛、庄兵衛、供新助共

七兵衛 庄兵衛
供新助、六兵衛
石場 御見送
供清吉、清次郎

夫方直様京都寒氣御窺ニ被登候事、

一、十二月五日、從御役所呼二来り、与次兵衛罷出候、内堀様被仰聞候者、左之書付三ヶ浦之分、御城米等閑二いたし、御收納米重々積送、村方差支候段願出候へとも、片口計聞候事二付、又別段呼出し候も如何ニ候へハ、右書付之通百艘方書取、廻状を以申達候様、其上弥聞入不申義候ハ、呼出し可申渡旨被仰渡候、尤全躰御城米之義ハ、運賃米下直之上、此度式割下ケ被仰候、旁二而心得違いたし候義哉と被存候へハ、仰之通御書付ニ添書致、早束申達候様可仕段申上候、則廻状之写

大溝

永田

舟木 南濱

右浦々私領廻米之分重々積受、御料所御年貢米積受方等閑いたし候趣相聞如何之事ニ候、御蔵納差支候間、浜出有之御米之分者、早々積受差米致候様可取計事、

右之通從御役所被仰渡候間、御城米早速積請、着米致候様御執計可被成候、右二付被為召出被仰渡候義ニ御座候へ共、御憐愍を以此方共方廻状ニ而申達し候様被仰渡候間、心得違無之様御承知可被成候、村下二請印被成早々順達、留り所百艘会所へ御戻し可被成候、以上、

申十二月五日

百艘印

大溝

永田

舟木 南濱

右浦々舟年寄御衆中

右廻状白木ノ状箱二入遣ス、大溝屋九郎兵衛、船頭、太右衛門、同夕酉刻渡、

右廻状十二月十日夕調印相濟戻し来候付、同十二日赤井一件御役所

へ罷出候節、内堀様へ与二兵衛口上を以御届申上置候、

右印形付廻状、先達而舟賃式割下ケ之御廻状と一所二入置候也、

当所寒氣窺之事

石原庄三郎様

例年之通
真鴨一掛

白木台、下ケ札付ル、

元々
柴山泰蔵様

同

内堀繁太様

町方

篠田牧太郎様

同

三宅新右衛門様

船方

岡田大八様

右五軒南鐮一片宛

小頭

川嶋惣右衛門様

小頭兼帯

目付

手塚傳十郎様

//

柿沼小平太様

//

(佐久)
左く間又兵衛様

右四軒白銀壱兩宛

舟方下

北出雲平殿 名札計

右之外御門内御手代衆、組やしき新建、不残手札二而、

十二月六日 当月四日寒へ入、

右之通与次兵衛、六兵衛相勤、供清吉

十二月五日、京都寒氣御窺

東御奉行様 江戸表御下向被遊御留主中故、寒氣御窺二而罷出不申

候事、

御公事方

山田釵治郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

加納万五郎様

右四軒へ南鐮壹片つゝ、

御公事下

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾演右衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

吉岡兵次様

此九軒手札計

西御奉行

三橋飛驒守様

鴨壹掛二重操台
下ケ札付

御用人

御取次

武藤貫三様

小林与作様

辻本仁左衛門様

久保嘉十郎様

松本雄太夫様

吉原直様

大竹半平様

×此七軒手札計

御公事方

深谷平左衛門様 不破伊左衛門様

本多新左衛門様 飯室助左衛門様

下田耕左衛門様 ×此五軒へ南鐮壹片つゝ

御公事下

上田八蔵様 柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様 酒井宗介様

山田傳左衛門様 浅賀和作様

杉原作十郎様 ×此七軒手札計

町代

田内与助殿 銀三刃 若狭屋八兵衛殿もち鳥吉羽

右之通七兵衛、庄兵衛相勤ル、供新介

覚

一、御納豆五拾(把)抱

右者從御前様例年之通被下置、難有頂戴仕候、以上、

大津

申十二月十一日

百艘印

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子百疋

右者從当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶、從御前様被下置、慥

頂戴仕候、以上、

申十二月十一日

観音寺様御内

松岡市左衛門様

大津

百艘印

一、十二月十日、如例年講相勤申候、

吸物 かき、大こんおろし、ミそ

平皿 鳥、ねぎ

八寸 雀玉子おス(酢)、かまほこ、さこし小串、九年母、

きほんほら

小饗 大根香物 二組

大こん、棒たら

吸物まじかノあら、てつほう、ミしまのり、酢ミそ

板元貝屋半六

右之通之振合ニ候へ共、時節柄ニ付相考、来年ノハ惣々錢式貫文位
ニ而渡切ニいたし、まじかノてつほうは止メニいたし候而も可然哉、
尤可寄時宜ニ、

一、十二月十七日、せた橋本ヲあし鴨小五羽到来、代五百文ニ而貝屋半

二郎江壳申候、

一、大津町組孫右衛門養子被致孫次郎顔見せ、

十二月十九日、諸白二升、大生鯛壹尾、赤貝五つ、持参付、即座ひ
ろめ候事、

但何角外諸事ニ付、役人一同出勤いたし候序也、

一、船頭町会所当秋普請出来、依之十月晦日從当仲間及挨拶ニ置候処、
当十二月廿一日仲間当役人中於右会所ニ招請在之候条、左之通、

献立

座付 三つ組盃

吸物 引蓋附テ 鯉荒味噌、すい口ふきのとう

小皿 川鱒、神鳥康、からしミそ

長硯蓋 焼鳥雀、コシ小豆ニ長芋、角切細工物也、

蠣ノ田楽、鮑 猪口煎梅肉あへ

茶碗煎 鳥、きくらげ、ねぎ、白根、玉子入

已上五種、殊之外見事也、

大鉢肴 生鯛 ミそ懸、若大根

吸物 すまし、モウヲ、つけ茄子汐出シ

大平皿 鳥たゝき、ふとせんまい

蓋物 堀川牛房、小品、能煎而

本膳

向 鱈、ひはら子付、しらかうを莫太、いりさけ

懸汁

平皿 コクセウ、鯛切目ヤキメ、カウ茸ひしき

鴨食 カヤク

茶碗 鱧あんへい、しめし、くす引わさ

焼物 若狭汐小鯛

台引 割伊勢蝦

吸物 アラすつほんに 鉢

ひたし物
卷錦玉子
茄子
からし

小鉢 鱈ノ子、花かつほ

水物 鯛鉢、福寿竹、梨二切、ミつかん、真桑瓜ノ形

右之外種々

与次兵衛、六兵衛、清次郎、町内之衆中は取持

太郎兵衛、忠兵衛、貞太郎、三郎兵衛、勘三郎、七兵衛、市兵衛

其外町内惣代

柴屋佐助、柴屋儀兵衛、西村屋善兵衛

右叮嚀饗応在之、幾久無滞目出度祝ひ候也、

当役勘三郎格別之心配、古近無双之御馳走、

当日為祝儀從仲間諸白三升差出候事、

一、石原庄三郎様御息女御死去ニ付、御勝手方御手代畑祖六様方下笠村

おかん殿江急御用書状迄通、

右八船便りニ而も不苦、急々相届候様被仰越候へとも、外御用向と

も違、わさく仕立飛脚ニ而賃銭此方払、小舟人丁子屋林蔵罷越ス、

一、十二月廿三日、右為御悔与次兵衛羽織袴ニ而御役所へ罷出候、為

御香典金貳百疋差上候、御葬式之儀承候処、未日限不相知、廿五六

日之内ニ而も京都本國寺中可有之哉ノ由、於内御玄関ニ被仰聞候、

尤右御息女余程御年倍ニ被為渡候由、しかれば御葬式之御供ニ上京

致し可申事、齡廿一才、

一、葬式廿四日夜亥ノ刻御出門ニ而、京都本國寺々中於慈珠院廿五日晚

六つ時御當

七兵衛、勘三郎、供新助、廿四日夕方上京致ス、

右隣寺ニ休足所在之、内堀氏之後室御附添被成、姉御様御供被成候、

御勝手方用人畑祖六様

其外重ノ御手代衆は御出勤なし

御蔵番内田、古望仁兵衛、其外御出入方計二而重ノ御手代衆は御出勤なし、

米会所も前日尋被成候へ共、上京不被致哉、不見当候事、

十二月廿日

一、米壹俵 廿三日ニ高田屋嘉兵衛方へ式斗三升かへ二売也、

右ハ例年之通石山寺より参り候、

覚

一、金貳百疋

右者当申年為御挨拶被下置、慥頂戴仕候、以上、

文化九年

申十二月廿四日

膳所御役人中様

右者十二月廿四日膳所船奉行永田郷右衛門様御使山本太蔵殿御持参

二付、右受取書相渡、

一、十二月廿六日、石原様御忌中為御伺と菓子折、杉ニ而白木台ニのせ、

白求肥貳斤、大徳寺黄色金鈍貳拾入、

求肥壹斤六匁也、

右組合 金鈍三分替、

其外箱台代とも廿匁余、沢村藤兵衛ニ而仕立、袴羽織ニ

而年寄与次兵衛相勤ル、

右ハ寛政五丑年之振合を以取計候、

一、十二月廿八日、跡算用、夜分貝屋半六二而

にしめ、はうたら前え付差出し候、
同諸白貳升、上組、下組、小舟中を持参いたし候、

右ハ近年之事也、

上田左太郎内

一、南鐮壹片

高谷九郎右衛門

右ハ吉川、小濱、木濱其辺之浦舟ニ渡海被致候挨拶与して被差出候、
当津蔵元伊勢屋清次郎殿方を酉正月十三日ニ参り候、

但し是迄ハ西村多右衛門殿与申候へとも、代り被申跡役右之名
前ニ御座候、

(裏表紙)

八拾七番

百艘

二、「万留帳」文化一〇年（一八一三）

（表紙）

（後筆之）
「八拾八」

癸 文化拾年

万留帳

酉 正月吉日

（本文）

- 一、例年四組惣番積やめ二相成正月四日なもぎどり之事、
- 一、赤塚村出火見舞之事、
- 一、京公事方加納萬五郎殿母公死去香典遣し候事、
- 一、能登川宿彦三郎何角世話不致候二付宿替申度段舟頭共る申出候事、
- 一、大津町組清治郎父浄真隠居年寄と唱候事、
- 一、与治兵衛船内海行小木綿紛失之事、
- 一、御役所内地面荒候二付、吾妻川土砂五升計遣し候事、
- 一、坂本町る当会所江出物差出し候様被申聞引合之事、
- 一、町役篠田氏御役御免曾根氏帰役之事、
- 一、松本舟矢橋江参り掛沖二而帆檣こかし侍二疵付候事、
- 一、市松舟、治兵衛舟、忠兵衛舟積荷紛失之事、
- 一、堅田町組三郎兵衛暫勝手勤二付会釈出候事、
- 一、北之町組市兵衛子息市三郎仲間手伝として出勤之事、
- 一、堅田町組三郎兵衛養子勇治郎顔見せ之事、
- 一、能登川宿長右衛門江相替り候事、

- 一、和邇北濱、中濱及出入当仲間を取喰之事、
- 一、石原様御出符（附）二付部家を呼二参り候事、
- 一、御元々柴山氏出符見立并餞別之事、
- 一、滋賀郡之舟改帳御役所江差出し候事、
- 一、石原様御親子初而御出符（附）目見江御見立之事、
- 一、三井寺観音鐘楼堂大風二而大破再建寄附之事、
- 一、見世村参宮小舟遣し挨拶参り候事、
- 一、寛政二戌年船御改帳不残差出し候様、并日吉御神事御引上廻文仲間を差出し候事、
- 一、京東御奉行佐野様御登り出迎之事、
- 一、日吉御神事三之宮舟二乗候坂本之者入水助け候事、
- 一、仲間年寄孫右衛門死去跡役三郎兵衛江願書出し候事、
- 一、能登川宿長右衛門悴初而宿之挨拶二参り候事、
- 一、山上村参宮小舟遣し挨拶之事、
- 一、東御奉行御初入恐悦之事、并御高札御書替願之事、
- 一、大津町組与治兵衛養子与兵衛顔見せ之事、
- 一、堅田町組三郎兵衛年寄成、北野町組市三郎見習之事、
- 一、石原様其外御手代中御出府御留主見舞之事、
- 一、清治郎古舟常楽寺平八江壳渡同浦帳付之事、
- 一、内堀氏、曾根氏関之津迄舟二而御下り之事、
- 一、江戸御勘定奉行肥田豊後守様せた川筋御下り之事、
- 一、金蔵堀二繋候大船六艘大風二て艫綱切御蔵高堀江もたれ損し候二付、御役所江御断之願書差出し候事、
- 一、石原様江戸を御帰り二付御出迎并恐悦上物之事、
- 一、杉江三郎兵衛難渋二付合力角力頼二付金百足遣し候事、
- 一、御勘定奉行江戸江御帰り当所御蔵御見分当仲間出迎見立之事、

- 一、はりへ幸左衛門祝義炭不参二付催促状遣し候事、
- 一、薩州御隠居様矢橋の御船二而石場江御揚り之事、
- 一、三郎兵衛舟、七兵衛舟、治兵衛舟、おき物有之御届之事、
- 一、三郎助舟内海行荷物切解紛失届之事、
- 一、年寄与治兵衛死去跡役無人二付暫ク御断願出し候事、
- 一、川口堀ざらへ之事、
- 一、石原様若殿御用御手伝被仰蒙候上物恐悦之事、
- 一、同御息女江戸表江御縁付御下り二付恐悦之事、
- 一、渴水二付小舟入橋掛金蔵堀入口水底石あげ候事、
- 一、町代堀猪三郎殿子息元服祝義遣し候事、
- 一、当宿の割まし願之事并吾妻川さらへ之事、
- 一、御元々内堀氏江戸御供留主見舞之事、
- 一、江頭の下船にて米積登り候二付書状遣し候事、
- 一、扇屋関の女入水之様子相知れ湊町引合之事、
- 一、内堀氏江戸の御帰り出迎并着歡之事、
- 一、北之町組太郎兵衛子息暫ク不参又々出勤之事、
- 一、江頭順番帳難立故急き米断之分酉年中登り高之事、
- 一、仙洞様御崩崩御二付泉涌寺賄方御用石原様被仰蒙京都江伺并上物之事、
- 一、三好順之助殿町役被蒙候歡之事、
- 一、嶋之関堀中ざらへ之事、

皇都年始御礼之事

東御奉行様は旧冬江符御下向二付、未御留主中故不勤候、

御公事方

山田釵次郎様

- 石嶋五三郎様
- 塩津宗五郎様
- 加納万五郎様
- ×金百疋宛
- 同御公事下
- 櫛橋平蔵様
- 喜多尾八郎右衛門様
- 平尾演右衛門様
- 末吉新五郎様
- 中尾勇右衛門様
- ×九軒、白銀壹両宛
- 西御奉行
- 三橋飛驒守様
- 金子三百疋、白木台、下ケ札付ル
- 御用人
- 武藤貫三様
- 辻本仁左衛門様
- 松本雄太夫様
- 御取次
- 小林与作様
- 久保嘉十郎様
- 吉原直様
- 大竹半平様
- 右七軒白銀壹両宛
- 御公事方
- 深谷平左衛門様
- 不破伊左衛門様
- 本多新左衛門様
- 飯室助左衛門様
- 下田耕左衛門様
- ×五軒、金百疋宛

同御公事下

上田八蔵様

山田傳左衛門様

柏原治部右衛門様

浅賀和作様

廣瀬佐野右衛門様

杉原作十郎様

酒井宗助様

ノ七軒、白銀壹両宛

町代

筆工

田内与助殿 白銀貳両

奥田九右衛門殿 白銀壹両

下町代

藤沢傳六、藤村佐市 鳥目貳十疋宛

東西御門番 三百文宛 東西中番中江三百文宛

ウワ町代中江 五百文 下町代中江五百文

小番 三百文

追分

山科

丸屋四郎兵衛 百文 大津屋孫兵衛 百文

宿鍵屋佐助 三百文 同下女中江貳百文

右例年之通正月三日、但前日より登京いたし、

七兵衛、勘三郎、供多七、荷物やとい壱人

正月二日、膳所船奉行

永田郷左衛門殿 外良餅貳卓壱匁つゝ、
硯ふたこのせ手札添

同下役 田原喜右衛門殿、同壱卓

阿閉権三郎殿手札計、是ハ在役中限、退而ハ勤ルニ不及、

右之通六兵衛、定太郎、供清吉

正月四日、初寄合、諸帳面表勘定仕立、

いつもの通り中飯、御鏡披キ、

鰯ノ焼物、かき汁、酒

六日、四組帳書キ、蛤吸物、酒到来、

但船頭共前々方取固之ため、六日汁と号而初寄合いたし候事、

爰元方汁料銭貳貫文遣し、勤かたノ趣申渡ス、

当所御礼例年正月二日之処、旧冬方御忌中二付四日忌明被成、

五日ニ御受在之候、四日節分也、

石原庄三郎様 金貳百疋、白木台二下ケ札付ル、

元ノ 柴山泰蔵様 同

内堀繁太様

町方 篠田牧太郎様 同

三宅新右衛門様

船方

岡田大八様

小頭 右ハ五軒金百疋

目付小頭兼帯 川嶋惣右衛門様 手塚傳十郎様

目付 柿沼小平太様 佐久間又兵衛様

右銀壹両宛

船方下

北出雲平殿 白銀壹両

惣年寄 同

矢嶋藤五郎殿 小野宗九郎殿

町代

町代

堀猪三郎殿 遠藤仁右衛門殿

右銀壺両宛

当駅肝煎 同

吉本弥四郎殿 山本儀五郎殿

御足輕

稻葉半七殿 小遣ひ衆兩人

右五人鳥目廿疋

御門番 吟助殿 鳥目五百文

内江 鳥目貳百文

白崎久太夫様 御蔵番三人

御門内新建 組屋敷不残

平蔵町年寄 当町内年寄、是ハ近年当屋敷町持ニ相成ニ付、

貝屋七兵衛

右不残手札二而

右之通与次兵衛、六兵衛、供新介

一、例年七日ニハ四組惣番積いたし来候処、近年到而渡し物諸荷物無
数、尤右初積致候ニ付而、聊なから失却等も相懸り、時節柄不相当
之事ニ付、仲間一同及相談ニ、当春より仲間積相止メ、正月四日
もぎとりニいたし候、依之初積いたし候者ヲ為祝儀四日、五日、七
日迄、向せた泊共、酒式升宛仲間江差出候筈ニ相究り候、
右之趣ニ候へ共、又賑ひ候時節ニ立戻り候ハ、任其時宜ニ可申事、

一、正月十一日、帳固メ祝儀

献立

膳 いか、きくらげ、大こん

汁 かき、大こん

平皿 鳥、牛房、人參、鳥子、しいたけ、玉こめ、但玉こ入ハ廿

一日也、当年ハ取違候哉、

ちよく、水な、からしあへ

御飯

焼物 鱒

台引 小ふね田楽、いゝたこ

中酒

肴 ほうれん草、ひたし物

吸物 こち、赤ミそ 同 ひはりノあら、すつほんに

小皿 ひこりうを、からしミそ

鉢 大こんくき

吸物ハ宜蛤ニ而可然

諸白式升 尾花川舟方 諸白式升 下組小舟中

鯛式把 惣代善兵衛 甚兵衛

太郎兵衛 長助

饅頭百 壹籠入 諸白式升 関船次兵衛

上組小船中治兵衛徳蔵 同 式升 坂本新兵衛

右之通持参致候付、小舟上下組、尾花川惣代ハ、のつへいノ吸物ニ
而組重三種勝手ニ而為祝候事、

新兵衛、治兵衛ハ勝手ニ手伝給使等いたし取持候故、前々本膳た
へさせ申候、

正月十五日、芦浦御礼

一、観音寺様

昆布熨斗

扇子三本人壱箱

但し台三重くり

西川五郎兵衛様

久松清右衛門様

松岡市左衛門様

是迄片岡喜右衛門様江勤候得共、未幼年ニ付出勤も無之由ニ付、依之松岡氏当時老分故如此取計いたし候事、

此三軒へ扇子壹箱つゝ、

外ニ西川民弥様へ手札計ニて立寄申候、

右之通六兵衛、忠兵衛相勤ル、供新助

一、白銀壹両 西川五郎兵衛様より被下候、

右ハ西川氏御内より御頼ニ付、渡海之節挨拶与して御差出し被成候、

覚

舟主本堅田浦

長左衛門

一、小艦舟壹艘

但船格好ハ側高ク艦板之裏ニ丸之内ニ長之字之極印有之、船中

ニ櫓式丁入置、此外ニ舟具無之、

右之船本堅田浦浜先ニ繫置候処、去申十二月廿六日夜之風波ニ而流

失候哉、同夜ハ相知不申候ニ付、諸浦相尋候得とも、今以不見当由

ニ而、浦々吟味之義願出候間、浦限相糺、右船有之候ハ、船主へ

及通達ニ可相渡候、此配符浦名下令請印早々順達、留り所可相返候、

以上、

大津

〔御印〕 酉正月十九日 御役所御印 大津始長沢迄 右浦々

庄屋

舟年寄

右同様文言御配符壹通

松本三ヶ所始伊庭マテ 右浦々

庄屋

舟年寄

正月十九日申ノ刻計松本村へ相渡ス、使新介 右御配符正月十九日未ノ下到来、

正月廿一日、例之通神酒相勤候、定日ニ而御座候得とも、旧年ハ赤

ノ井村と三ヶ浦取合未相済無之、正月廿一日二者双方御召出ニ付、

右差支故無抛十九日ニ相勤、一統に目出度御神酒頂戴致候事、

差支ニ付不参之衆中、七兵衛、三郎兵衛、勘三郎

但丁内ニ不慮之義在之候故、

献立は式枚おく二記、

覚

一、百廿四銅 壹つ

一、四十八銅 壹つ

一、三十六銅 式つ

一、廿四銅 三つ

一、十二銅 十九

外ニ御供料 壹封

問屋仲間之分、百艘取次ニ記ス、

右之通奉納仕候、以上、

大津

酉正月廿一日 百艘印

貴布祢御社中

一、正月七日、夜四つ時比赤塚村出火在之、翌日酒三升廻り清吉ニ為持見舞遣候事、右ハ是迄伊勢参宮之節船遣、其外船積之義御申来り候間、右之通取計候、尤已前ニも右之振合在之候、

正月十五日、從御役所呼ニ来り、七兵衛罷出候処、兼而赤之井出入之義ニ付、当廿一日双方罷出可申段御差紙御渡し被成候、則赤之井村江ハ仕立飛脚を以十六日ニ差遣シ、賃錢四百四十八文先取、小舟入働喜兵衛、片田、八幡へハ十七日ニ丸屋町働治兵衛と申者、堅田迄三百廿四文ニ而やとい遣候、此賃錢ハ爰元方扣置候、尤添状差遣ス、

前ニ記在之候十九日神酒献立之覺

鱈 鱈に付、うと、いり酒酢

汁 鱈すまし、薄雪昆布、こせう

焼物 生小鯛、いせ鼻折

押 鳥子、す味噌あえ、蓮根、百合根

御飯

平皿 のつへい、鳥、くいな、牛房、しいたけ、にんしん、玉こめ

香物

台引 大あわひふくらにふた切、玉子あつやき

吸物 蛤、潮煎

吸物 ふなあら

此蛤ノ吸物ハ十一日也、当日ハ外の品ニ而可然、

ひたし物 ほうれん草

小皿 赤貝せうか酢

右ハ記ニ不及候へとも、近来板元かわり候節は料理方いろくくと変殊二十一日杯ハ祝儀日之事ニ付、振合違ひ候而ハ不宜、依之得と貝

屋半六へ申聞せ、役方ニもとめ置右躰之品相違不致、勿論不束之物ハ遣ひ不申候様申置候間、例年見くらべ定例ニ取計可申事、

一、京都東御公事方加納萬五郎様御袋老御死去ニ付、正月廿五日六兵衛外上京之序、為御悔金百足持参いたし候、

一、能登川宿彦三郎、近來ろくく、船之せわ不致、加子共も寄流あしく、依之、外ニ宿替申度旨加子共申出ニ付、一同相談之上是迄長々宿相頼置候へとも、年々当会所へ来候義も無之、親彦三郎ハ及老年代もかわり聊心得違も可有之哉、左候へハ切角相頼置候而も為方ニも不相成、左候ハ、外へかえ候而も可然、尤爰元方別段引合候も如何ニ付、加子共老年之内方品よく及懸合ニ、納得いたし候上、外宿頼可然段、尚又弥外ニ相究候ハ、其段当会所へ可申来段申渡置候事、

正月晦日、

一、大津町組清次郎父浄真老、是迄沙汰も無之候へとも、正月廿七日伊勢講之席ニおゐて役方一同及相談、向後隠居年寄と唱可然旨、よつて此段二月朔日、同組六兵衛右宅へ被参其由被申咄、無滞相濟候事、右ニ付為心祝清次郎方諸白式升、いとより三尾、はまくり被差出、幸ひ二月二日寄合ニ一同相披露め申候、

与次兵衛ふね内海積之内、塩左殿小木綿壱荷紛失いたし候趣意、左之通、

乍恐口上書

一、当正月廿九日、当津与次兵衛船ニ江州常樂寺并ニ能登河行荷物積合、字扇屋関堀ニ繫置日和待仕、昨朔日船中見改候処、荷問屋塩屋佐右

衛門方を積入候荷物之内、木綿六拾六反入壺箇紛失仕、打驚色々鑿穿仕候得とも相知し不申、全水主夜中寝入候間ヲ考、烏乱者這入盜取候義哉と奉存候旨、水主庄七申之候二付、尚又篤と相糺候へとも、外二存当り怪敷義も無御座候間、此段乍恐御届奉申上候、尤右船之義は外急荷物積合等御座候付、日和次第出船為致度、此段御聞濟被成下候ハ、難在可奉存候、以上、

船主百艘

乍年寄

文化十年

与次兵衛印

酉二月二日

湊丁荷問屋

塩屋佐右衛門印

大津

御役所

但し舟方岡田御氏此砌留主中二付、三月二日届書差上候、

右之通与次兵衛、塩左子息喜九郎御訴二罷出候処、町代堀猪三郎殿取次一井助^{集太}九郎殿被召出、書付之趣承届候間、尚又手懸り等も在之候ハ、早束^速訴出候様被仰渡候而引取候、御目付三軒、口上二而右之段与次兵衛届ル、町代猪三郎殿方へも与次兵衛挨拶二参ル、筆工二頼不申候、会所二而庄兵衛相認候、一井江も手札二而挨拶参り置候、右一件与次兵衛方塩左殿江追々懸合事、

右御船方江も御届可申事二候へ共、御出役被成旧冬方御留主二而未御歸り不被成候二付御届不申候、御歸り被成次第可申上候事、

一、二月三日夕方、町役篠田牧太郎様方御役所中ノ口江罷出候様申来り、与次兵衛罷出候処、御役所内地面荒候所在之、吾妻川之土砂差入候様申之ニ付、不苦八嶋ノ関二砂取寄申度、是迄御屋敷取寄候例も有

之哉旨被仰聞候付、与次兵衛答上候ハ、近来吾妻川浚御座候而も嶋ノ関江持出し不申、中途ニかり地ヲ拵差置、砂入用之節ハ夫方町方江売遣候趣段仕、勿論昨年ハ川中土砂も無御座候、此節いつ方江も遣し不申、此間も古望^我仁兵衛方貴ひに候へとも、右之趣二付断申、是悲入用ならば嶋ノ関堀中へ流込候砂少し在之候間、夫二而も可差遣候哉之段申遣置候、未何之沙汰も不承候、右之振合御座候へとも、御役所之義ハ外々とハ訳違、たとひ這地面欠候而も差上可申義御座候、勿論丁卯之高水之節御役所へ御取寄被遊候義も御座候、随分御勝手ニ御取可被遊候、乍併砂取方二より跡あれ候而ハ甚迷惑仕候義二付、手伝方へ乍恐其段被仰聞、私共方程よき所差図いたし、其所ヲ取候様仕度段申上置、尚明日二而も取しらへ其段申聞へく旨被仰聞候、砂凡五升計と被仰聞候、

右之趣付此後二ても格別差支義在之候ハ、御断可申義御座候へとも、五升位之砂御断申上候も如何敷、尚又此節外二御取分被成砂無之候、

一、二月五日、当町方呼二来り、詰合勘三郎参候処、町内年寄原田五郎助、五人組 浅井屋源兵衛、^々納屋六左衛門、柳屋喜兵衛立会被申出候、近来風呂屋関懸屋敷町分江売得いたし、其後入用等も多御座候二付、已来為祝儀半季金千足百艘仲間方差出候様、勿論米会所も右之通御座候間、同様二承知いたし候旨二付、勘三郎承之、尚又引取可申談旨申歸候、

右之趣於仲間及相談二候処、何分ひら断申可然義二付、二月十一日与次兵衛、七兵衛原田方江罷越、此間勘三郎江被仰聞候義御尤之様二御座候へとも、何分時節柄困窮仲間二付、米会所抔とハ訳違同様^{之義}之ことハ存も不寄御事、全跡近年御町持二相成候節、一同宿賃上ケ

被仰聞、其節も当仲間之義ハ古ク住宅仕、随分御町内御世わ二預り不申様相慎罷在、外々とも違候事故、宿賃上ケ候義、達而断申上度存候へとも、又外差支候程も如何ニ存、先仰之通り承也、何分追而八下地之通御下ケ被下度、尤年久敷借居候規模ニ、余分丈樽代ニ被成候而八返し被下心付、此旨御頼申上度存居候折柄、別段存も不寄御事御座候、併町分被聞候義、ケ様御断申上候も、甚気毒ニ奉存候へ共、此段となた様ニも御氣ニ障り不申様、宜被仰達被下度候、又時節よく相成候ハ、其節ハ如何様ニも可仕間、ひたすら御聞込候義御猶予被下、長ク此末住宅仕候様願上候旨申込候様、ふ原田被答候者、仰之通町分江沙汰いたし、品ニ又御目ニ懸り可申様被申聞候、何時成とも罷出候様申置帰り候、

一、町役篠田牧太郎様、御役御免、

曾根源次郎様、御帰役、

右二付曾根様江金百疋、以先例差出申候、二月十三日参ル、

百艘年寄

与次兵衛

一、二月十三日、松本舟矢橋へ参り懸ケニ沖ニ而帆はしらこかし、右チヤリコニ乗り合居候内之もの、京都之侍額面へ柱之先キあたり、疵付痛ミ舟中甚騒キ、チヤリコ早急矢橋へ漕着ケ、同所より世話被致候趣、爰元へも知らせ被呉候二付、早束松本浦へ詰番清次郎并当番八郎兵衛同道ニ而見舞ニ参り候事、

一、矢橋浦右之様子知らせ被呉候故、同日挨拶状左之通遣し候、

以手紙得御意候、春寒難退御座候処、弥御安全可被成御座珍重奉存候、然ハ松本舟ニ怪我有之旨、早束御知らせ被下、嚙御浦方ニおみて御

世話之御儀与奉存候、夫二付何成とも用向等も御座候ハ、可被仰越候、右御答旁申上度、早々、以上、

二月十三日

矢橋浦舟年寄御衆中

百艘年寄

十四日朝、松本舟年寄長兵衛、昨日之礼ニ被参候、怪我人格別之事も無御座候、夜前相済候様被申之候、

矢橋礼状来り候、松本浦へ引取、同所を京都へ為送遣候様承り申候、

二月廿三日午ノ中刻

大津

一、書付 御役所

今堅田村貸船屋 久助

右御書付老通、今日中ニ久助方へ相届ケ候様被仰付候、今片田舟屋惣七与申仁へ幸便ニ遣し候、

去ル正月二市松舟、次兵衛舟、忠兵衛舟、紛失荷ニ付届書、左之通、

乍恐口上書

一、正月廿二日積常楽寺積、問屋伊左衛門上り、

八印砂糖漬小樽壹

当津問屋木屋作蔵積 船主 市松

右之舟扇屋関堀ニ繫置日相待いたし、廿五日出舟、

一、正月廿四日積常楽寺積、問屋忠右衛門上り、

人形 壹挺

当津問屋大坂屋六郎兵衛積 船主 忠兵衛

右之舟金蔵堀ニ繫置日相待いたし、廿九日出舟、

一、正月廿五日積江頭行、問屋太郎兵衛上り、

当津問屋大坂屋六郎兵衛積

ト紙荷壺固 船主 次兵衛

右之舟金藏堀ニ繫置日和待いたし、晦日出舟、

右之通着舟仕水揚之節前書之通紛失仕候二付、当所問屋より先々之荷主江掛合段々吟味仕候得とも、相知レ不申義ニ御座候、全日和待いたし罷在候節、何もの歟水主共油断ヲ考、右品々盜取候義与奉存候二付、此段御訴奉申上候、尤段々穿鑿罷在候二付、御届延引ニ相成、此段も御断奉申上候、以上、

荷問屋

文化十年 木屋作藏印

西三月二日 同

大坂屋六郎兵衛印

船主市松印

同 次兵衛印

同 忠兵衛印

百艘年寄

太郎兵衛印

大津

御役所

右書付当番所江堀猪三郎殿取次被呉候様、御当番柿沼御氏御聞届之上、尚又手掛も在之候ハ、可申出旨被仰渡候事、

右願書外ニ尅通、舟方岡田大八様江差上候、則奥書左ニ記ス、

右之通町方御役所江今日御訴奉申上候二付、此段御届奉申上候、以上、

百艘年寄

西三月二日 太郎兵衛印

大津

御役所

外ニ品書尅通御目附手塚傳十郎様へ差上置、御同役両家江八口上ニ而届置申候事、

一、前二記し有之候正月廿九日積与次兵衛舟、能登川行木綿壺固紛失いたし、即日御役所江八届書差上候得とも、其砌舟方岡田御氏御留主中二付、今日前書之通ニ丸写二いたし奥書仕、乍次手差上申候事、

上巳御礼

石原庄三郎様 青銅百足、木札附

元々

柴山泰藏様

〃

内堀繁太様

町方

曾根源次郎様

〃

三宅新右衛門様

舟方

岡田大八様

右者鳥目五十疋宛

右之外御門内御手代衆、新建同断、組屋敷不残、

北出雲平殿

右手札計

与次兵衛、七兵衛、供清吉

三月廿一日

一、金百疋

堅田町組

三郎兵衛持参

右ハ当時勝手勤メニ付、会釈与して差出され候、

同日

一、南鏡沓片

右同人持参

右ハ三郎兵衛被立入候中保町棚倉ノ出火等之節、蔵所裏へ舟廻し呉候様頼候儀ニ付、同人取次ニ而差出され候、

一、北之町組市兵衛子息市三郎、兼而出勤致度旨頼も有之、此節無人ニ付仲間方手伝ニ出被申候様一同評義有之、当二月晦日より仲間方之手伝ニ相詰被申候事、

其節之持参もの酒二升、鮒五枚差出され、晦日寄りニ付遣ひ候事、

一、堅田町組三郎兵衛、旧冬養子致され、当三月二日夕三郎兵衛付添養子勇次郎顔見世相済、即刻引取被申候、其節之持参もの、諸白酒式升大鯛壹枚、差出され候、同夜寄り合ニ付、遣ひ申候、
あわび三つ

一、前二記在之候ノト川加子共船宿之義、彦二郎方江為承合候処、近来及老年、其上間片二百姓いたし、孫子供等も在之候付、手も廻り兼候故、折ヲ見合せ御断も申上度存居候折柄御座候へハ、随分外へ御頼ニ被下度、私義も長々いやニ相成、百艘御仲間方御合力等受居候義付、別段御挨拶申上度候へ共、此節之事ニ候へハ、此段宜御断申上呉候様申之ニ付、則長右衛門方江已来加子共船宿相頼、然る上ハ

船等日和待之節、又ハ帳付等いたし候ハ、精々氣ヲ付被呉候様及引合置候旨、三月九日加子老分元七申来事、

右之通ニ御座候へ共、畢竟加子共義ニ候へハ、近日右長右衛門来候ハ、右之趣得と申聞せ引合置可然事、

一、近来平方振舞三月五日ニ定置候処、昨日(年之)は松本一件ニ付延引いたし、六月中旬ニ於靈仙ニ相勤られ候、当年丑は赤ノ井一件ニ付、三月前何角多用故、不取敢之故差懸り三月五日明キ候序無之、不得止事三月六日梅寿軒ニ而被相勤、板元八百嘉江被申付、無滞相済候事、

当役不残出勤、市三郎儀漸二月晦日ノ手伝旁出勤被致候事ニ付、留主番被致候事、

平方之内不参、二郎左衛門、今七、善左衛門、

右之外ハ出勤被致候事、

一、三月十二日、岡田大八様江罷出候処、乍序頃日和邇北濱、同中濱及出入候義ニ付、百艘方ニ而取嚙内済為致度存候へハ、御下ケ被下度候旨、与次兵衛申上候処、大八様被仰聞候者、先頃方段々相糺候処、中濱之者共心得違致居候ニ付、船年寄へ申条不相用段、已来ハ相用候旨書付差出候様、昨十一日申聞候へとも、彼是申立居候事ニ付、弥書付不出来候而八元ノさや江はまりかね候義在之候而ハ如何ニ付尚明日双方罷出候様申付、又北濱ハ中濱之肩書いたし候而も差而差支も有之間敷旨申聞置候間、其意を以取計候様被仰渡候、
右ニ付即刻北濱呼ニ遣候処、北濱舟年寄太助、市右衛門、惣代作之丞代久助、右三人被来候ニ付、与次兵衛申聞候者、今日御役所ニ而承候処、例年被取候船改帳ニ近来中濱は名前計ニ而、肩書ニ中濱と申義無之旨、此義ハ被書入候而も不苦様、中濱ヲ北濱カ一本ニ上ケ

候二、中濱之者と北濱とわかりかたく候間、此上被仰渡候而も違背も成ましく候間、尚又中濱方已来舟年寄申条二從ひ候旨、書付差上ケ候ハ、何ノ子細も無之事二候間、押手すゝめ候事二ハ無之候へ共、勘弁二致候様為申聞候、尚宿元江引取、とくと申談返答可致段々御苦勞之段申聞され引取被申候、

一、同從御役所方与次兵衛罷出候様申来り、岡田様被仰聞候者、先刻宅二而申咄候義、此方計承置候而も心濟不致、即只今申談候処、下ケ候事者不相成候へ共、此節殊二御用多候事、幸其元被申聞候二付内濟致候ハ、宜候間、其旨書付差上ケ可申談被仰聞候、其上両浦今日呼出、其方江参り候様可申渡旨被仰聞候、与次兵衛申上候者、奉畏候、右二付只今北濱之者共呼寄了簡承候へハ、むつかしく申居候而、容易二肩書致候共不申候間、書付差上ケ、又不調之義二而ハ却而御倒⁽³⁾二御座候へハ、今日ノ処御猶予被下度、弥相濟候義二候ハ、明日書付差上ケ可申段御断申上、御含置被下候様被仰渡候、

一、中濱村役人佐介、十助被来承候処、中濱と肩書致呉候ハ、其上船年寄申条違背不仕段書付差上候様被申上候、

一、同北濱太助、久助、市右衛門代与八右三人被来、今朝被仰聞候義段々御苦勞二存候、然る処右市右衛門親病氣之由、則代与八飛脚旁只今登り来候、則市右衛門帰村致候二付、今朝被仰聞候義共、村方残候者共江一応為申聞、明朝五つ迄二御返事申上候間、暫猶予致呉候様申来候、

一、前一件之義は、当二月廿日和邇北濱舟年寄新次郎、与八、外惣代孫左衛門、弥三八、是迄中濱改帳北濱方一緒二上ケ収来り、北濱之附浦二御座候処、二月八日初午村中惣休二付、其段申聞在之処、中濱之者共不構漁二出候而、北濱方差留メ二遣候処、中濱ハ別段御年貢相収メ、北濱之申条付不申段申立候付、不得止事御願申上候旨、尤

舟年寄江断相立候ハ、ゆるし遣候へ共、左様之義ハ決而不致、然^{勝手}二参り候由被申候、

一、式石 漁運上 北濱、久保久五郎様、遠藤様、堀田豊前守様、久保次郎吉様、右四方之入組也、

一、五斗 中濱、伊東采女様

右ハ中濱方収候事故、北濱とハ別浦二付、北濱之下知二從ひ不申段、勿論已来ハ船改帳直収二いたし度旨被申之候、

中濱庄や権右衛門、年寄源之進、村役人佐介、十助、外漁師三人被来候、右二付此方申聞候者、船帳別二直納杯と申義ハ決而難相成、何分双方品よく和談被致候様申置候事、

右留書ハ最初二可読物也、

一、当時七石、十三艘、北濱 かり舟

一、七石、九艘、中濱 已前ハ三艘計在之由、

一、同十二日、北濱久助、与八被来、只今村方登り候処、残之者共申居候者、百艘ノ御取嚙被下候義承知不致候義無御座候へ共、右肩書望ミ之所存、何共不得其意奉存候間、弥肩書致候二付テ者、急度其代り二相成候書付二而も取くれ度旨被申之候二付、百艘ノ申聞者、強テ肩書望むと被存候而ハ如何候へ共、已前之書上ケ二も有之義候へハ、只何となく任頼此度中濱之肩書致候而も随分可然哉、其上已来之義ハ御役所へ書付御取被遊候写二而も遣候へハ、急度北濱之訳ハ相立候趣存候、しかし此方共も押手すゝめ申義ハ無之候間、とくと勘弁可被致旨申聞候所、随分御尤二存候、今一応宿元へ下り、其段為申聞度^{被申候付}之候、しからは今日ハいつれ御断二罷出候間、中飯したゝめ早々被仰聞候様申歸し候、

一、右中飯後何之沙汰も無之候付呼二遣候処、太助、久助外三人被来、段々御苦勞存候へ共、今少相談難出来、今一応御役所へ罷出、其上

弥御聞上ケ無之様子ニ御座候ハ、其節ハ何卒下ニ而御せわ被下度旨被申聞候ニ付、御役所へ罷出、岡田様へ右之段申上候処、彼は百艘方太義ニ被存、尚呼出し、尚又其方へ可参旨可申聞候間、其上之取計被致候様被仰聞候、則書付左之通、

乍恐口上書

一、当二月、和邇北濱村舟年寄共ニ、同中濱村を相手取御訴訟奉申上候義ニ付、下ニ而可相濟義ニ御座候ハ、私共ニ双方へ利解申聞為相濟度奉存候間、来ル十五日迄御猶予被成下度奉願上候、此段御聞濟被成下候ハ、難在可奉存候、以上、

文化十年

西三月十二日

大津

御役所

一、同十四日、中飯後北濱久助被来、今朝兩村御召出之上百艘方江下ケ遣候間、其旨相心得候様被仰渡候、何時ニ而も御用御座候ハ、可被仰下旨申参り候付、与次兵衛申聞候者、是迄段々内談致置候上ハ、最早此方ニ可申義も無之候へハ、右肩書之所否哉申談し、急々可申来様申聞候、

一、中濱呼ニ遣シ佐助、十助被来、十六日中飯後迄猶予致呉候様被相頼候付、跡戻り不致候様申談し、無間違十六日ニ可被来様申歸候、

一、十五日朝北濱太助、久助外壱人被来、何分肩書ハ出来かたく候へとも、是悲致申さね成不申候ハ、当時九艘御座候へとも、已前ニ立戻り三艘之分ハ肩書いたし遣可申哉、是迄も好候義ニ而も無御座候間、何卒肩書なしニ相濟候様□にせわ被成下度被申聞候付、中々左様之義ニ而ハ中濱方承知も出来間敷、全躰各方ニも得と勘弁被致申

べく、御憐愍にて下ニ而相濟候様被仰渡、難在被存候ハ、強而彼是被申候訳ニ而も有之間敷、尚此方ニも相考可申様申聞歸し候、又中飯後久助外二壱人被来、弥出来不申断ニ被参候ニ付、しからは其段御役所へ可申上候而歸し候、

一、右ニ付十六日朝中濱壱人可被来様申遣し、佐助被来候付、前段之趣申咄し、其元返事待居候付、不及迎も難相調候へハ、左様可被得相心与申聞候処、段々御苦勞ニ奉存候、私方ニも今日四つ時迄村方之内壱人登り候筈ニ御座候、其内御蔵所へも出候処、此間各様ニ被仰聞候通、船方之義ハ御不案内ニ付、何分百艘之せわニ而相濟候様可致旨被仰渡、私共ニも大躰承知仕候間、尚此上可然頼入候様被仰候、一、十六日御役所へ罷出、岡田様へ与次兵衛右之始末申上候処、早や昨日北濱ニ罷出其段申聞候ニ付、今一応其方ニ而被申聞候而ハ如何と被仰聞候付、承知仕候へとも迎も承知仕間敷存候、右肩書之義ニ付、後日故障等在之候ハ、此方ニ取計可申旨申聞候へとも、右之仕合御座候段申上候処、左程迄懸合候上ハ無是悲、尚寛政之頃船改帳ニ見改可申、其已前無之候間、其上又如何様ニ候とも被取計段被仰聞候、定而其頃ハ肩書有之候様私共も存候間、御吟味被下度、尚此上何時ニ而も御用之節ハ罷出可申、先づ是限御断申上候様申上置候、

百艘年寄

壱人

右明十五日四つ時罷出可申段申来候、

惣年寄

町代方

十五日四つ時、太郎兵衛罷出候、此度御出府ニ付、十九日御上京在之、廿日朝御歸り被成、同昼後御揃迄御見目へ在候間、其段相心得可申様、

尚又上り物ハ御兩殿ニ上ケニ不及、此前之通目錄金貳百疋ニ而可然旨被申聞候、御出立廿一日也、

一、三月十三日、御元々柴山様御出立二付、与治兵衛、太郎兵衛石場迄御見立、外惣年寄兩人、町代遠藤仁右衛門殿、宿方宇治屋弥惣兵衛殿

右之分石場迄、其外御入魂向ハ不殘勢田迄被參候、石場はりまや長兵衛二階へ御上ケ被成、当所迄見立之分計出候様被仰聞候、右之通罷出候処、御いとま乞御盃被成、御機嫌よく御出立被成候、古望仁兵衛子息忠藏殿御供ニ而罷下られ、右外ハ□なし、

吸物 蛭ミ立 手提重組

小ふなにひやし

右二付三月八日御餞別金貳百疋、柴山様

金二朱畑祖六様、同三好□

同二朱本庄彦六様、是ハ前以

此兩人ハ殿様附ニ而御下り候由、江戸御屋敷御取繕御下り被成

候二付、留主見舞也、

右ハ此節外用向付毎事御役所往通いたし候相柄二付、此度取計候、已来之例ニハ不相成、其規宜ニ可任事、

一、三月十七日、從御役所与次兵衛呼来り、岡田様被仰聞候者、今日も北濱呼出し段々利害為申聞候へとも、何分不致承知候付、尚得と相考七つ時迄二否哉申出候様申渡候処、明十八日朝迄猶予いたしくれ候様申之付、任其意遣候、自然其許方江可參哉も不相知候二付、此段申置候様被仰聞候、

一、十九日朝、与次兵衛御役所へ罷出、岡た様被仰聞候者、昨朝も北濱

出立も何分不致承知旨二付、此上は如何可取計哉、何分此節御代官御出立前二而、取込居候旨被仰聞候二付、与次兵衛申上候者、余り御役所御苦勞奉忍入候付、私共色々勘弁仕候内、已前服部様御役中船改帳例年式通宛差上申候、しかる処、寛政年中右手扣之分百艘見競二も可相成哉二付、右帳面頂戴之義も御座候付、段々仲間方取さかし候処、漸長持之底方出申候、乍併御尋無御座候二付、御覽二入候義も如何二付、只今御宅へ上り候処、御出勤之跡二相成、不得止事是二而御目ニ懸ケ申候、右北濱村船帳二則中濱肩書在与存、岡た様被仰聞候者、夫はよき物出候、於役所も段々さかし、已前二通り上ケ候義も在之由二付、北出方いろく鑿穿致候而も何分不相知候、勿論寛政四、五年後ハ段々帳面も在之候へとも、最早其節之帳面二ハ肩書無之候、全此節之事と存候、不苦ハ此帳面一兩日かし呉候歟則印形も在之事二付、役所之帳面之心持二而取計致候間、此段承知いたし候様被仰聞候二付、右帳面差上置引取申候、

一、中飯後從御役所呼二来り、与二兵衛參り候処、岡た様先刻之帳面見受候所、定而外浦方共不殘可有之ヲ予メ被差出候与被存候、右二付矢張志賀郡之分とぢ込ながら被差出、其外共不殘持參いたし、又右之外前後右様之帳面有之候ハ、差出候様被仰聞候二付奉畏候、尚引取鑿穿仕、明日二而も差上候様申歸り候、

一、堅田浦舟年寄江御差紙只今為持遣候様申来り、則仕立飛脚を以差遣し候、

三月十九日七つ半過時、賃錢五百文、飛脚

先渡し

西山町

太助

一、同七つ半時過、与次兵衛御役所へ罷出、先刻被仰渡候船改帳之義承知仕候へとも、右帳面之義ハ全駄私共方ニ可有之物ニも無御座候前申上候通、服部様御手扣之分後日見競ニも可仕旨被仰下頂キ置候義ニ而、畢竟内分あなた様迄此度余り御苦勞之程恐入、御目ニ懸申候、是も一ツハ御奉公と存候而、御義御座候、然るニむつかしく相成、同何事帳面不残差出候様先刻被仰渡候へとも、長持之底ニ入置候ヲ引出し候付、又外箱ニも入込有之候哉、差当り揃ひかたく、依之志賀郡分計壹綴差上ケ申候、外之義ハ此節乍恐御入用ニも有之間敷候哉、何時ニ而も御入用之節ハ取出し御覽ニ入可申候へ共、此度之義ハ御用捨可被下旨御断申上候、成程其旨承知いたし候間、先是ニ而宜候間、此方限ニ預り置候様被仰聞引取申候、

一、三月廿日、例年之通沖島綱方る鱒三本来り候付、内壹本貝屋半六へ預ケ、式本は月並算用ニ付即座ニつかい申候、貝半ハ壹本代四匁也、

一、三月廿日

石原庄三郎様

同 捨之進様

明廿一日初而御出府ニ付、為御暇乞御目見江被仰付候、先例之通金貳百疋上ケ候、

尤已前別段ニ若殿様江も目録上ケ候義在之候得とも、未御部屋住之御事、心配致候而ハ却而大殿之覚召ニ不相叶御迷惑ニ候由、何事も楽宮様御下向之節之振合ニ可致段、別ケ而被仰渡候ニ付、先御登り迄は差扣候、御登候上ハ御双方様共恐悦目録差上可然事、右八前十九日ニ御登京被成、廿日八つ時過御帰津被成、直様銘々御目見江御座候事、

与次兵衛、太郎兵衛相勤ル、供新介

一、三月廿一日

右御双方様共御機嫌よく御出立被遊候、是迄勢田江御見立ニ罷越候へとも、此度は一同石場ニ而相濟候様被仰出、則於生蓮坊ニ御目見江在之候、

尤石場限之分は御構無之、是迄勢田迄御見立仕候分、不残御酒被下候事、但石場播磨屋長兵衛二階ニ而、鮎ミそノ御吸物、御蜆蓋五種

焼鮎、鉢肴

たけのこ

御ひたし物三つば

惣年寄兩人 石場年寄 百艘 御出入方 兩替仲間

町代兩人 本陣 米会所 仲仲間 質屋

肝煎

御門前中 絞油屋仲間 酒屋仲間

右之外大勢在之候、長沢仙八郎様御取持被成候、

右之通ニ御座候へ共、当仲間之義は外々とハ格別ニ而、万一船之御用等在之候ハ、可相勤義ニ付、勿論先例ニも振候へハ、勢田迄七兵衛清次郎罷越シ、石場は与次兵衛、太郎兵衛務候、

右ハ此節道中諸家様方御通り繁ク混雜ニ付、石場ニ而為御濟被成、今晚草津御宿之御積也、

石部宿ニハ長州様御宿ニ付、細川様ハ大津宿御泊也、

右供御手代衆三好順之助様、御勝手方畑祖六様、若殿付七里龜太郎様殿様附 // 柴山様御子息

清水善之助様、持永

右之外御近習員野喜蔵様

篠田永五郎様

外二御壱人

右之内草津限二而御歸り被成候方も在之候、

一、三井寺觀音鐘樓堂、近來風二而打つぶし候処、此度再建之由講中頼二被見江、尤先達而觀音様御開帳之節、金三百疋寄附いたし候へ共、講中何之挨拶も無之、外々ハ夫々取扱被致候、余不束之事二付、志も上ケ間敷様一同申居候へとも、畢竟仏事二付、此度金百疋かた、町丸屋仁兵衛殿迄差出候処、講中ノ受取書被差越候、三月十日方晴天五日之積り之処、折々雨天二而廿一日迄可被置候、

一、志賀見世村參宮二付、小船壱艘治郎左衛門方へ申來候、下ノ平六船右ハ三月廿一日出立、廿日夕際川へ相廻候、

仲間方薄縁四枚入遣ス、外二人もの等ハ無之候事、

くと一、鍋壱つ入遣ス、

右下向三月廿七日、迎ひ舟山田行、

上ノ加子新兵衛
庄吉
かめ

村方左衛門方へ持參被致候土産もの、御祓半切紙壱包、わかめ少々、火繩壱卷、まんちう壱包、酒五升并銭壱貫文、舟賃也、右之品二郎左衛門方中間へ被差出候二付、右之内半切紙とまんちうハ二郎左衛門方へわけて遣ス、酒五升之内式升ハ下地之振合小舟へ遣ス、
壱貫文ハ送り迎ひ両度之舟賃也、

一、三月廿二日、從御役所呼二來り、勘三郎罷出候処、寛政式戌年船御改帳、此間与次兵衛方高嶋郡之分差出し、跡ハ断申被居候へ共、矢

張不残差出候様岡田大八様被仰聞、且又山王神事十一日二御引上ケ之風聞在之候二付、為心得浦方江廻状差出し置可申段、右兩様勘三郎承歸ル、

一、右二付、三月廿三日四つ時、与次兵衛御役所へ罷出岡た様二申上候ハ、昨日是悲御運上帳不残差出候様被仰渡畏奉候、乍併於此義者私共心得違在之、先達而も御断申上候通、此度北濱一件余り御苦勞二奉存候二付、何か与御役二もと存、あなた様迄右帳面壱冊御内見二入置申候、然る二於御役所御沙汰被下、残らず御覽可被下旨被仰下段々御断申上、乍併高嶋郡之分ハ不残差出、跡ハ御断申上候、又候昨日押而被仰渡候義ハ何とも恐入候、尤此度外之帳面御入用之義も御座候ハ、格別之義二御座候へとも、左様之義二も不奉存、全躰此帳面私共方二所持可仕筈も無御座、自然蒙御察当、其上御引上二相成候而ハ実二私一分之ひシと相成、甚歎ケ敷奉存候、從御役所被仰渡も無御座内、余り差出テ候段何とも迷惑仕候間、乍併此上御断申上候も恐多奉存候、不残持參仕候、御一覽ノ上ハ急々御戻し被下候様くれく申上候所、岡田様も赤面被成、成程此方限二も如何と存内堀迄咄致候処、右之振合二付不残被差出候様申遣候、中々御察当在之候義二而ハ無之候間、先つ此帳面此方限二預り置、追而差戻し可申旨被仰聞、寛政式年戌船御改帳并貸船屋共、已上七冊差上置候、山王御神事四月廿三日之処、十一日二御引上ケ之程も不相知候二付、前廉二為心得廻状差出被申候様被仰渡候、廻状左之通、

岡田大八様也、

一、山王御神事四月廿三日二御座候処、若哉十一日二御引上之義も難計旨、於御役所風聞承り候間、浦々兼而其御心得二而差懸り、手支無御座候様可被成置候、此廻状早々御廻し被成、留り所方百艘会所へ

御戻し可被成候、已上、

三月廿三日

百艘

年寄印

今津

海津

大浦

塩津

右浦々舟年寄御衆中

廿四日夕、今津飛脚江遣入、宿高嶋屋久右衛門

但白木廻状箱入、四月三日二戻ル、

一、三月廿六日、從御役所岡田様呼二御遣し被成罷出候処、此間中わに北濱、中濱段々利害為申聞、尤此間被差出候帳面見せは不致候へ共、古半帳面二肩書在之候旨、口上二而為申聞候へ共、何分北濱之者賢意地二而承知不致候間、此上押而取計之義も御代官御留主中二付難致、依之先つ双方片かき致ス共又不致とも、只何となく差歸し可申存候、右二付百艘方二ハ弥先日手切相成在之義哉、念之為承候段被仰聞候、与次兵衛答候者、段々御苦勞二奉存候、先日も申上候通、私共方ハ手切レと申二而も無御座候へ共、北濱何分不致承知、其上押而申聞二も如何二付、しからは念はらし二御役所罷出可被申、乍併御聞上ケ無之時ハ如何候哉、もの二候へ共先ツ左様被致、又何時二而も用向二付テハ可被申来旨申歸し候、私共義ハ如何様二而も不苦候間、可然御取計被下度旨申上候処、成程左様之趣二承候、しからは書付二而も為致差歸し候様被仰聞候、乍序此間被仰渡候山王御神事廻状、折節今津船参り合不申、右二付廿四日夕今津飛脚江差遣候段申上置、

三月廿七日

一、ウグヒ四十四本 せた舟年寄持参、

例年ふ少し小から故数多し、役人銘々配当ル、

四月朔日、山王御神事御廻状、左之通、

一、御配符壱通

大津百艘船持中

但し御文言例年之通二付略之、

覚

一、船数七艘

是者日吉御神事之節御馬船

右之船来ル十一日、日吉御神事二候間、如例年可差出候、尤服忌差合之もの相改可申候、此配符令請印、早々順達、留り可相返もの也、

西四月朔日

石庄三郎御印

山田浦

矢橋浦船持

朔日山田左市二相渡入、

表書二

船割賦石庄三郎

大浦始

来ル十一日、日吉御神事神輿船割賦之事

大浦

丸船貳艘

水主九人

宛 船年寄

但百八拾石積方貳百石積迄、二宮方早船

今津浦

水主拾壱人

丸船老艘 外楫取壱人 十左衛門

丸船老艘 右同断 八郎左衛門

丸船老艘 右同断 船年寄

丸船老艘 右同断 船年寄

海津浦

丸船老艘 水主拾壱人 治左衛門

外楫取壱人

丸船老艘 右同断 長次郎

丸船老艘 右同断 善八

丸船老艘 右同断 甚兵衛

塩津浦

丸船老艘 水主拾壱人 清兵衛

外楫取壱人

丸船老艘 右同断 孫三郎

丸船老艘 右同断 源六

丸船老艘 右同断 宗兵衛

右之船例年之通致吟味、来ル十一日以前大津へ着船可致候、尤服忌
差合之もの相改可申候、此配符令請印早々順達、留り所可相返も
の也、

西四月朔日石 庄三郎御印

大浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々

船年寄

此廻状船頭町高嶋屋太郎助手紙添為持遣入、

表書二

添触

大津御役所

岡田大八

大浦始

来ル十一日、日吉御神事二付、例年之通船割賦被差出候、右差船之
内差支有之候ハ、石付揃候丈夫成船致吟味代船可被差出候、尤御
神事四五日以前大津へ着船、其段可被相届候、此添廻状共昼夜二不
限早々順達、留り所可被相返候、以上、

大津御役所

西四月朔日

岡田大八御印

大浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々船年寄中

此廻状船頭町高嶋屋太郎助二書状相添為持遣入、

表書二

廻状 大津御役所 坂本始

山王御神事之節、神輿船二寄近年雇水主致乗船、還御先着励合之砌
水主共不法之儀有之、相互二怪我人等致出来候由も相聞候付、右御
神事之節、寄進乗或者者助水主等二罷出致もの有之候共、往古定来
候神輿船老組二加子式拾式人之内へ加り候儀者格別、右之外壱人茂
神輿船江乱乗候儀致間敷旨、前以申触候趣弥堅可相守候、若相背候
もの於有之者、急度可及沙汰条可得其意候、
右之趣船持并水主働いたし候もの共へ不洩様可申聞候、此廻状浦名

下令請印早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

西四月朔日 御役所御印

坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、同躰方、西ノ切、
釣獵師、今堅田、小野、南濱、北濱、五ヶ浦、南比良、北比良、
南小松、北小松

右浦々庄屋

船年寄

朔日巳刻坂本又兵衛二相渡ス、

廻状 大津御役所 矢橋始

此御文言右同断ニ付略ス、

矢橋方八幡船木迄

右浦々

庄屋

船年寄

右御廻状例年四月朔日二御渡し被成候処、当年者始ノ申十一日二チ、
マリ候故、内分ニ而前晦日二御渡し被成候へ共、表向朔日二御出し
被成候趣ニ符合致し候様書入之相渡し候事、

但し今津浦へハ飛脚遣し候二付、手紙添遣ス、文言左之通、

以手紙得御意候、暖氣御座候処、弥御安康被成御座、珍重奉存候、
然者山王御神事、先廻状ニ申上候通り弥当十一日二相成、則從御役
所御廻状式通、大浦始御渡し被成候二付、態々仕立以飛脚此段申達
し候間、乍御世話其御浦方浦順早々御順達可被成候、尤飛脚賃壹
貫貳百文此者へ御渡し可被成候、已上、

四月朔日

百艘年寄

今津浦

船年寄御衆中

一、四月三日、和邇北濱、中濱於御役所ニ是迄段々御利害被仰聞候へと
も、北濱只片意地ニ而、何分肩書不相成旨申之候二付、此節御殿様
ニも御留主中旁、無抛御帰館在之迄帰村致候様被仰渡、双方書付差
出し帰村被致候事、

一、東御奉行佐野肥後守様四月七日京入候処、道中川支二付八日二御京
着之旨、公事宿鍵屋佐助殿方申来ル、

一、山王御神事御回状之内、山田浦、矢橋浦之分、兼而山田浦相頼二付、
右浦江相渡し遣候、為挨拶諸白式升山田うらる被差越候、

四月七日

一、京都東御奉行

佐野肥後守様四月八日大津宿御泊り、
四月七日石部宿御泊り、
草津迄御出迎、四月七日を罷越ス、七兵衛、勘三郎、供やとい壱人
当所

石場迄御出迎、 太郎兵衛

六兵衛、供新介

翌九日八町ノ上迄、七兵衛

勘三郎、供多七

但八日夜八つ時半御出立、

以手紙奉申上候、追々暖氣相増御座候処、弥御安全被遊御座奉珍賀候、

然者東御奉行様御初入恐悦御受之日限相知レ候ハ、乍御世話早々
為御知被下度、此段以書中御頼奉申上候、以上、

四月九日

百艘年寄

田内与助様

田内より之来状

御手紙被下忝致拜見候、追日暖氣相増候処、弥御堅勝奉賀候、然ハ
東御奉行佐野肥後守様当九日御着有之、則来ル廿六日御初入有之候
間、前日御上京可有之候、右之段可得御意、如此御座候、以上、

四月十三日

田内与助

百艘船年寄中様

尚々当月十九日より御初入御礼始り、各様方来ル廿六日御礼御請可
被成候間、左様御承知可被申候、佐野様御家中為御心得申進候、

佐野様御用人

同御取次

関谷宗兵衛様

松原久蔵様

敷山儀助様

横井権十郎様

長嶋藤兵衛様

水野啓次様

今中兵助様

右之通知らせ来り候二付、請礼状左之通、

御紙面被下忝拜見仕候、如仰追日暖氣相増候処、弥御壯健可被遊御
座、珍重之御儀奉存候、然ハ東御奉行様御初入恐悦御請日限、来ル
廿六日与被仰出候趣、早束御知らせ被下承知仕候、来ル廿五日方無
相違罷登り可申候間、此段御承知可被下候、尚拝顔之節御礼可申上候、
先ハ右御請旁申上度、如此御座候、草々以上、

四月十六日

百艘年寄

田内与助様

神泉苑町宿鍵佐方

四月十九日町礼

右之通御座候、

知らせ来り候御初入御礼日

廿三日

寺社

鍵屋佐介

廿六日

地役

ちん廿四文申参ル、

一、当年山王神事廿三日二候処、是迄之通当十一日二御引上在之、前後
天氣克渡御成、既二七本柳ノ七社之神輿無滞被遊御乘船、追々唐崎
御着岸之節何とか致祓、三之宮御船二取乗候汰沙付、鉄棒引耆人入
水致、折節近辺二助ケ候舟も無之、只遠目二あれよたすけよとひし
めく計、海上事故空敷見物いたし居候折も、幸ひ則当所ノ神事見物
二被参候舟之内、古望仁兵衛殿かり切二而参り合せ候加子共種々せ
わ致、無難二引揚色々助抱二而命二無別条、依之着類等迄かし遣し、
漸元船二のせ歸し遣し、一同無此上も悦ひ候事、

右二付、又翌十三日坂本ノ挨拶ニ参候処、如何心得候哉古望方江重々
挨拶致候哉、則古望方ノ少樽被差越候付、是二而ハ筋違之由、古望
方礼受候訳二而無之、品物之多少二不寄直々当仲間方^江坂本ノ被来、
其上仲間方ノ差略二候ハ、小舟方申分も無之候へ共、何分是二而
ハ心濟致かたく旨惣代之もの申参り、一通り尤二も候へとも、畢竟
礼式二拘り助ケ候義二而ハ無之、此度之所ハ是而為相濟可申旨利解
申聞、漸納得いたし、依之品物は直様小船加子共へ遣候事、尤上組
惣代治兵衛せわいたし候二付、右治兵衛方江為持遣ス、

右之通古望方ノ使二而鳩諸白式升樽壹、鯛式把被差越候へとも、差
歸候二付、則久保良齋、上組惣代治兵衛方江被参候、爰元へハ橋本
丁紙屋五兵衛ノ使二而右兩種為持越候、則上組惣代へ為持遣ス、
三宮船、海津善八

はまり候者ハ

長二郎

坂本久保良齋、

日雇
下使之由

古望仁兵衛見物船かり切、加子虎吉

亀吉

新兵衛

右助ヶ候ものハ此加子共也、

上坂本八条

久保良斎はまり候者ハ日雇之由、

当所紙屋五兵衛ハ右良斎方江商ひ得意之由

右紙五兵衛申聞候、

乍恐口上書

一、先達而御届奉申上候百艘仲間年寄役之内、孫右衛門死去仕候二付、右跡役此度三郎兵衛為相勤申度候間、乍恐此段御聞濟被成下候様奉願上候、願之通被仰付被下候ハ、一同難有可奉存候、以上、

百艘年寄

文化十年

西四月十七日

七兵衛印

大津

御役所

右御届ヶ書与次兵衛持参致し、船方御掛り岡田様へ差上候処、此節御代官様御義関東へ御下向二付御留主中二候間、預り置御帰館之上被仰上候様被仰聞候、右序二和邇北濱之もの共、此節帰村被仰付候間、先達而差上置候諸浦船帳面御下ヶ被下候様申上候処、此義ハ関東へ被遣候間、今暫貸置呉候様被仰聞候事、

能登川宿是迄彦三郎相勤来り候処、折々不行届キ義共有之二付、相談之上為相止、向後同村長右衛門与申者相勤候二付、則同人忰八郎兵衛挨拶二来り候事、引附加子門次、**由**

四月十九日

覚

一、炭式俵

右者朽木兵庫助様より被下置、慥ニ請取申候、以上、

文化十癸酉四月十九日

升屋市左衛門殿

百艘年寄

一、山上村参宮二付、小舟壹艘尾花川忠兵衛方へ申来り候、下ノ甚兵衛舟加子四月十四日立、熊ノ川へ宵廻し、差入もの茶釜、くど、割木少々茶わん式つ、薄へり四枚

右下向迎ひ舟、四月廿日、熊ノ川へふね廻し、上ノ治兵衛舟加子

村方る忠兵衛方へ持参被致候、土産物御祓杓子壹本、青のり、火繩酒式升ノ切手并銭壹貫文舟賃也、忠兵衛方中間へ差出され、右之内杓子、青のり、火なわ等ハ忠兵衛方へ持せ遣し候、酒式升ハ中間入、壹貫文ハ送り迎ひ舟賃小舟へ遣し候、

四月廿六日、御初入恐悦

京都東御奉行

佐野肥後守様

金子式百疋、二重くり台、下ヶ札付

御用人

関谷宗兵衛様

敷山儀助様

長嶋藤兵衛様

今中兵助様

御取次

松原久蔵様

横井権十郎様

水野啓次様

小林丹治様

右八軒八手札計

町代田内与助殿

白銀壹両、先格之通遣ス、

太郎兵衛、六兵衛相勤、供清吉、雇利八

乍恐口上書

一、当津橋本町大橋詰ニ御建被下置候船御高札、御印紙御書替奉願度、今日京都西御役所へ持参仕候二付、乍恐此段御届ケ奉申上候、以上、

文化十年

西四月廿五日

大津

御役所

右御届書ハ町方御当番所へ差上、御目附方三軒へも口上ニ而相届ケ、橋本町年寄、小歩キへも相達候事、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰ニ御建被下置候船御高札、御印紙御書替頂戴仕度奉願上候、則先達而被下置候御高札、御印紙奉御高覧入候、尤是迄之御高札、御印紙共、前々之通被下置候様奉願上候、以上、

文化十年

西四月廿六日

大津百艘年寄

太郎兵衛印

六兵衛印

御奉行様

右之願書、御高札、御印紙共西御役所へ持参仕、御玄関御帳前へ名札差出し、御公事方御逢被下置候様申上置、御廊下ニ差扣居候処、公事下同心杉原作十郎様御出逢被成候二付、御高札、御印紙并願書共差上、尤いまた御文言糺敷御座候間、御名、年月計御書替被下候様申上候処、御伺可申間差扣へ候様被仰聞候二付、相待居候処、杉原様御出逢被成、追而御沙汰可有之間、今日ハ引取候様被仰渡、帰津致候事、

但し先格ニ而、今度御登り被遊候御奉行様へハ、御届ケ不申上候事、

大津百艘年寄

太郎兵衛

六兵衛

右之もの共、明朝日四つ時を九つ時迄ニ無相違罷出可申事、

西四月廿九日

西公事方

右御書付ニ、為惣代大宮三条上ル所白粉屋権兵衛を済状（係）いたし、賃錢五百文相渡し候様被申越候、則受取書ニ差添相渡し申候、

覚

一、西御公事方様を明朝（日）の四つ時を罷出可申様、御書付之趣奉畏候、已上、

西四月廿九日酉刻

百艘年寄印

白粉屋権兵衛様

右之通四月廿九日小酉刻ニ飛脚来り候処、太郎兵衛は無抛内用在之、与次兵衛、六兵衛、朔日朝七つ時を上京いたし候、

一、五月朔日四時、与次兵衛、六兵衛西御役所江罷出候処、無程御公事

方飯室助左衛門様、御公事下杉原作十郎様、右御兩人の御印紙、御高札共御渡被下、則御請取証文調印仕差上首尾能相濟候事、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙御書替被成下度、先達而西御役所江奉願上候処、右御高札、御印紙共頂戴仕難在奉存候、乍恐此段御届奉申上候、以上、

文化十西五月朔日

大津百艘年寄

与次兵衛印

六兵衛印

御奉行様

右以書付東御役所へ御届申上候処、公事下末吉新五郎様御出被成承置候間、勝手二歸津可致旨被仰渡候、

是ハ銀壹両差上候事も在之、又ハ依規宜ニ上ケ不申候へ共、ことくしく御名を承り抔いたし、或ハ先様の御名前被仰聞候事も在之、只無手ニ而不取合ニ被存、此度ハ銀一両差出し申候、已来も其用意ニ而登り可申事、

御高札被下候御礼

三橋飛驒守様

佐野肥後守様

金貳百疋 目錄台のせ
下ケ札付ル、

右同断

西公事方

深谷平左衛門様

本多新左衛門様

飯室助左衛門様

耕左衛門事

下田庄右衛門様

不破伊左衛門様

東

山田釵次郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

加納萬五郎様

右九軒金百疋

外ニ此度御懸り役

飯室助左衛門様

同公事下

杉原作十郎様

御書役

今井本次郎様

右三軒金百疋

鳥目貳百文、宿鍵屋佐助江祝儀、

右之通相濟、其日歸津いたし候、尤白粉屋権兵衛方へ廻り新助寄せ申候、

右与次兵衛、六兵衛、供新助、荷物利八やとい

乍恐口上書

一、先達而御訴奉申上候船御高札、御印紙、京都西御役所ニ而御書替被成下、頂戴仕候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

百艘年寄

七兵衛印

文化十年

西五月二日

大津

御役所

右町方御役所へ無取次、直々相届ル、

当津御目付役

手塚傳十郎様

柿沼小平太様

佐久間又兵衛様

右三軒銀三匁つゝ、

橋本町年寄雁金屋平兵衛殿へ相達、小歩キ江先例之通鳥目貳百文遣、

右之通無滞目出度相濟申候、

五月二日

大坂御目附代

扇屋之関

内藤隼人正様

御出迎

松野八郎兵衛様

七兵衛

勘三郎、供清吉

右は勢田川筋御順見として御越被遊、当御役所江先例之通御立寄膳所方御馳走船来り、依之御供船三艘差出し、外二用意舟壹艘、風呂屋之関二置、上下惣代、次兵衛、甚兵衛来り申候、

一、五月三日、三井寺方例年之通竹之子拾本到来、役人中江配当いたス、当年八八つ竹也、

一、五月六日、例年之通山王参社、堅田町船加子多吉、増次郎、坂本新兵衛

境重 めし、にしめ竹の子

ふき 氷こんにやく

酒五升

肴重 やき鯛煎付、せうが

組肴 あわび、あつやき、はむ、かう竹、ゆは、でんぶ

蜆汁

したし物 ミつ葉、香物きうり 大こん

端午御礼

石原庄三郎様

青銅百疋、木札付

御元々

柴山泰蔵様

同

内堀繁太様

町役

曾根源次郎様

同

三宅新右衛門様

舟方

岡田大八様

右五軒青銅五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、新建御手代衆、組屋敷不残、北出雲平殿
右名札計二而相勤、七兵衛、三郎兵衛、供新八

一、五月二日、寄合之節大津町組与次兵衛養子与兵衛、顔見せ相濟候事、定之通酒式升差出被申候、

覚

一、百式十四銅 壹つ

一、四十八銅 壹つ

一、三十六銅 貳つ

一、廿四銅 三つ

一、拾式銅 十九

メ廿六

右之通奉納仕候、以上、

大津

百艘印

酉五月廿一日

貴布祢御社中

一、艀船八艘 幅三尺八寸ろ

四尺

但壹ノ村カノ式艘ツ

右者御茶壺御下向、来月五日宇治御出立、同日守山宿御止宿、翌六日野洲川渡船之御用二候間、丈夫成船致吟味、洗之柄杓壹本宛船毎二入置、五日昼時迄野洲川渡場へ船差出可相勤候、此配符令請印、不限昼夜早々順達、留り所カ可相返候、以上、

大津

酉五月廿六日 御役所御印

江州野洲郡

須原

比留田

矢橋

木濱

右浦々庄屋

舟年寄

覚

一、艀船五艘 幅三尺八寸ろ

四尺

但壹カケ村カノ壹艘宛

右者御茶壺御下向、来月五日宇治御出立、同日守山宿御止宿、翌六日横関川渡船之御用二候間、丈夫成船吟味致し、洗之柄杓壹本宛船毎二入置、五日昼時迄二横関川渡場へ船差出可相勤候、此配符令請印、不限昼夜早々順達、留り所カ可相返候、以上、

大津

酉五月廿六日 御役所御印

蒲生郡

牧村

長命寺門前

船木

南津田

野洲郡

野村

右村々庄屋

船年寄

右飛脚平蔵町利八遣又、須原へ三百五十文

枚村へ四百五十文

添状相認廿六日四つ時カ遣し候事、

一、五月廿一日、貴布祢御神酒役人不残出勤、

同日三郎兵衛年寄成盃、年寄計三人二而相済、

右二付諸白式升、鯉二本 鱸三本被差出候、尤是迄自分用向二

付不参曾子二も有之候故、心を込められ候趣、

同日、北之町組市三郎、是迄何となく手伝二出られ候所、廿日組二而盃相済、当日於仲間一統盃いたし候、尤年寄四人、肝煎ハ惣代六兵衛二而相済、已来見習二相成候、

右二付、諸白式升、鱸式本

金百疋、是ハ養子振舞料也、

右之通二候処、長日之折柄故、後段二為料打催候事、

一、石原庄三郎様当三月御出府、未就御留主中二為御窺と、如先例之金

式百疋白木台二のせ下札附之、尤若殿捨之進様二も御一緒御座候へとも、御部屋住二付、先下地之通二取計候、御機嫌克御上津之上は、御双方江恐悦相勤可申積り、
右二付、御元々

柴山泰蔵様江金百疋

三好順之介様

畑祖六様江、南鐐一片つゝ、

是ハ是迄相勤無之候へ共、当時之振を以如此取計候、

已来ハ見合可申事、

柴山泰蔵様御小兒、御双方とも御痘瘡、四月中旬より一向承り不申候、

漸此節過候事故、乍序金式百疋為御見舞と上ケ候、

右之通、与次兵衛、太郎兵衛、とも清吉

六月三日

一、柴山様江為御留主伺、金式百疋、百艘

かたゝ年寄共

八まん

右ハ此節赤之い一件二付毎度往迎いたし候付、如此相談之上相勤候事、

一、御門番吟助殿留主見舞として南鐐一片

是ハ於末終心安ク御門内出入致候、此節之事二付如此、

後而見くらべニハ致間敷也、

一、大津町組清次郎持丸船式百三十石積壹艘、右ハ此度常楽寺浦平八方江売渡し被申候処、平八もち小舟七月限ニかり置候事故、其儘ニ七月迄常楽寺浦順番帳附置、尚又此度買請候船も歸村次第帳附申度、尤外ニ一艘大船も帳付在之、然る上ハ是迄式艘持之処、三艘名前帳

附候様暫之内、盆迄漸四十日計事二付、他浦方ハ承知二付、則年寄右馬次郎印形も持参いたし歸し被申之候へとも、元来二艘持之処、暫之内ニもせよ、左様為致候而ハ浦法之振、又外代り浦存入候程も難計、依之矢張此度帳切為致候ハ、歸村次第小舟ノ帳を引、其上当時買受被申候船帳付可被申旨為引合、平八得と承知二付、則御届ケ書致遣相済候、尚又此段間違不申様小舟の帳を引、其上当時買被申候船ヲ払可被申様及引合候段、帳屋平右衛門方江清次郎方書状差遣し申候事、

一、右清次郎義ハ古船売渡し、直様新造被造候二付、出来次第御印受可申事、

六月三日

右御届書ハ、丸船願書下書帳二在之候、略ス、

一、御書付 志通 堅田浦

右六月五日申刻御渡被成候二付、同日堅田彦右衛門舟二遣し申候、舟雇出して、当所桑へ頼遣ス、

六月七日、内堀様、曾根様其外関ノ津迄舟二而、夫方陸宇治へ御越被成候趣二付、舟差出し候様被仰付、関ノ治兵衛艦、加子三丁二而御出し被成候、

右関舟治兵衛艦之儀ハ、前々服部様川下へ御見分ニ御出被成候義も有之趣二付、此度之所もせたる御乗替被成候儀も氣之毒ニ存、相談之上前々之振合も有之事故、右艦差出し申候へ共、此後ノ所ハ右治兵衛儀ハ日々川下へ通ひ候艦ノ儀ニ候へハ、氣之毒ニも存、此後被仰付候儀も有之候ハ、随分御断申上候は可然存候、右関津二而宇右衛門方へ御揚り被成、御中食被成、宇右衛門川筋之咄し委細申上

候二付、案内致呉候様御頼被成、同人案内致し宇治へ御こし、当所へ夜九つ過二御歸り被成候事、

又々九日二も同所へ御こし被成、同船同し加子共差遣し呉候様被仰、今日ハ内堀様、長沢様御出被成候様承り申候、関ノ津方宇治へ三筋道有之、一筋ハ前々御出被成、七日二ハ二ノ尾越、九日二ハ池ノ尾越御見分被成、又関ノ津へ御戻り被成、右ノ舟二而せた方矢橋迄、磯つたひ二御見廻り御戻り被成候様前日承り候へ共、矢橋迄ハ御出も無之候事、右関ノ津右衛門今日も御案内被申上候様承り申候、尤前七日之時宇右衛門へ酒手として少々御遣し被成候二付、御戻し申上度申居候処、九日二も御案内仕候故、右酒手ハ受被置候様、加子之者申之、加子名前、舟へ人物等ハ役舟帳ニ留有之事、

一、六月九日、上片田町郡山藏裏湖水際方凡拾六七間計向、湖中二溺死人浮有之候二付、右町分と仲間与連印二而御届申上候処、双方方取片付致候様被仰渡候、右一件之義ハ別紙帳面委敷記シ有之候二付、爰二略ス、

覚

一、分持 壹荷

此人足壹人

外宿駕籠壹挺、宿々二而用意置可給候、

右者我等儀御用二付、今九つ時大津出立、中山道垂井宿迄罷越候積、先触差出し候処差支有之、明十一日暁七つ時出立、中山道罷越候条、書面之人足御定之賃錢請取之無遅滞繼立、渡船、川越有之場所者前宿方及通達、止宿等之儀も無差支様取計可被申候、此先触於美江寺宿我等着之上可被相返候、以上、

酉六月十日

石原庄三郎手代

内堀繁太御印

百艘

矢橋、夫方草津宿

中山道守山方美江寺宿迄

右宿々

問屋

年寄中

右未ノ刻添状認、廻り太七二遣し候様申渡ス、太七、増二郎へ渡し候様申候、

六月十一日、人馬会所方京都御組瀬田橋御見分二御出被成候二付、同所迄船壹艘申付呉候様申来、尤何れ迄御供可仕哉と相尋被申候二付、当関へ相廻し候へハ少々隙取申、小舟入へ御こし被下候へハ早ク御座候由申候所、承知之趣二而被歸候、直様小舟入二舟用意致し御出迎定太郎、松井忠藏様御供兩人、

右御乗船被成松本浦迄参り候処、せた方御同役御組様、大津へ向テ御越被成候艦二出逢、正連坊沖二而右せたノ艦へ御乗移り被成、せたら御出被成候御組様も引返し、御同船二而せたへ御こし被成候事、当所ノ舟者松本浦方戻り候事、

一、江戸御勘定奉行諸々御見分二付、勢田川筋御見分在之、宇治迄御行抜被成候積り二付、前以当御役所方も内見二御越被成、膳所方も度々見分有之由、郡山も海つ浦^代大官当所へ被登居候処、六月十五日旁せた江御越候旨二付、右代官もせたへ被参、当所方も舟方岡田様、元々内堀様も御出被成候、十五日夕草津御泊り、十六日朝矢橋方膳所

川御座二被召、尤せた二御休足所^{西光寺}酒屋六左衛門方共三ヶ所取拵在之候由二候へとも、御揚無御座、直様下へ御下り被成候、御勘定奉行^{肥田}阿部豊後守様、外二下役四方、同勢凡八十人計在候、御駕籠長持類ハ矢橋ヲ大津へ来り、御入用之品計御持行被成候、内堀様岡田様も宇治迄御付添被成候、右外之義ハ風聞計二而睨と不相分候、当所へ御越在之候ハ、石場迄当仲間方御出迎可申上事二候へとも、右之振合二付御挨拶不申上候事、

六月十八日、本庄藤六様ヲ呼二参り、三郎兵衛参候処、此間御奉行様せた川筋御見分之節、関ノ津村宇兵衛と申者二川筋案内為致候二付、右ノ礼二此吉封遣し、尤金子百足入有之由被仰候、便船有之候節相達し、受取書差越候様被仰渡候、

関津村

大津御役所

宇兵衛殿

内堀繁太

右之通上書致御渡し、致添状関ノ治兵衛へ渡入、受取書ハ取来り候様申渡置候、

同廿六日、右受取書持来、金子吉封右之通慥受取申候、以上、西六月十九日、関屋治兵衛様、関津宇兵衛印
右受取書本庄様へ上ル、

六月十九日未中刻、例年船増減御改御配符
未中刻御渡し被成、文面如左、

例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日ヲ十日迄可致持参候、
一、右帳面之内浦方ニハ貸船致混乱候間、借主并貸船屋共入念相改、船每貸借符合致し候様可書出候、

右之趣得其意、此配符致受印無遅滞早々順達、留り所ハ可相返候、以上、

^{副印影写}
「西六月十八日 大津御役所御印

大津始り川道迄、右浦々庄屋、舟年寄、此廻状十九日夕方四つ
家宗兵衛へ相渡、

一、右同御文言之御配符吉通、

松本三ヶ所始り、伊庭留、浦々

庄屋

舟年寄

右即刻廻り多七二松本へ為持遣入、

口演

一、貸船増減相改帳面二記、来七月朔日ヲ十日迄二上納可被致候、尤帳面之内浦方ニより貸船致混乱候間、借主并貸船屋とも入念相改、船每二貸借符合致候様可被書出候、此廻状早々順達、留り所ハ御返し可被成候、以上、

西六月十九日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、

五郎八、善兵衛、源六、

一、六月十九日昼七つ時前、俄二白雨嵐強吹、金蔵堀蔵橋町ヲ見通し西之方ニ繫在之候船、地舟計七艘在之処、西小口ニ在之候孫右衛門舟計のこり、残り六艘一所ニ艦綱引切、向倒御蔵高堀ニ突当、押巾吉間余り損しゆかみ、腰板も疵付、瓦四、五枚計落候処、折節金蔵堀二門次、長三郎居合、兎角致居候内追々寄来り、精々働候処、何分風筋二候哉、手ニ合兼右之成行御座候処、忠兵衛金蔵堀江参り合せ、御蔵役中嶋剛之助様尋ニ、御蔵番内田喜平次殿、気山長三郎殿、右之趣被申聞、右之段中寫様ハ船役岡田様へ被仰上候旨、直様忠兵衛可来様被申聞、則其儘忠兵衛御役所へ参り、右之始末御断申上候、

岡田様被仰聞候者、一通り断計二而も不相濟、年寄共申聞せ得と相糺、其上可申上段被仰渡、依之忠兵衛直様与次兵衛方参り右之趣為申聞、又与次兵衛出勤之上加子共呼寄承糺候処、無扨趣二付此段御断申上候処、及夕景岡田様ハ御留主故中寫様へ其段御断申上置、御蔵役へも挨拶致、内堀繁太様へ罷越、右之始末申上御断申上候、天災之事二而無扨儀とハ乍申、場所柄あしく候ハ、何れ者六ヶ敷候付、口上之趣書取、今晚差出し可申様被仰渡、依之相談之上左之書付差上ヶ申候、

西ノ方

庄兵衛船 加子門次

長三郎船 直乘

三郎兵衛持

三郎助船 小兵衛

同

彦三郎船 伊八

忠兵衛持

忠八船 岩吉

次郎左衛門船 伊兵衛

六艘

右西之方ニ孫右衛門船在之候、

乍恐口上書

一、百艘仲間之者共、是迄迎も金蔵堀ニ船囲仕罷在候処、今十九日昼七つ時前、西南ノ方ハ俄ニ白雨嵐吹来り、風雨甚強御座候而、右金蔵堀西之方ニ囲置候丸船、式百石積ハ式百拾石積迄之船六艘、一緒糺綱押切、尤場所ニ加子共老兩人も居合候而働居候内、銘々寄集り、俱々無如才相働候へとも、何分烈敷風雨ニ御座候へハ、取止かたく、其

中向側御蔵高堀ニもたれ、御高堀壱間余り損候様子見受奉恐入、依之私共驚入、右加子共早束承糺、尚又私共も右場所へ欠付見受候處、糺綱杯も古キ物ニ而も無御座、全如才ニ仕候義ニ而ハ無御座候へ共、風筋ニ在之候哉実ニ白雨風つよく、無扨仕合ニ奉存候、御太切之御堀ニもたれ損候段、重々恐入候義御座候、右奉申上候通相違無御座候、乍恐已来之義ハ急度右躰之義無之様可仕候間、此度之義ハ幾重ニも御憐愍を以御高免被成下度奉願上候、願之通御聞濟被成下置候ハ、広太之御慈悲難在可奉存候、已上、

百艘年寄

文化十年

与次兵衛印

西六月十九日

太郎兵衛印

大津

御役所

別紙以書付奉申上候、今十九日金蔵堀ニ繫置候六艘之船名前、左之通ニ御座候、

西ノ方

庄兵衛船

長三郎船

三郎兵衛船

右同人持

忠兵衛船

次郎左衛門船

右之通ニ御座候、

右書付初夜時過岡田様御宅江、与次兵衛、太郎兵衛持参仕候、明日罷出候様被仰聞候、

右ニ付船主并加子共翌廿日当会所へ呼寄置、与次兵衛、太郎兵衛御

役所へ四つ時前罷出候処、岡田様被仰聞候者、右書付之趣無拋義二在之候へハ、先づ書付ハ此方江取止置、追而沙汰可致段被仰渡候、

六月八日、与次兵衛、太郎兵衛罷出候様申来、与次兵衛病氣二付御断申上候処、七兵衛も病氣、三郎兵衛船主之儀故、太郎兵衛一判二而御聞濟有之、舟方岡田大八様、御立会役篠田牧太郎様、前二差上候願書二継添ノ文言、左二記、

前書之趣書付差上候処、此度之義者格別ノ御勘弁ヲ以御沙汰二不被及、御聞濟被成下難有奉存候、已来之儀者舟主、加子へ急度申渡可申候、依之継添一札、仍而如件、

右之通之継添いたし差上相濟申候、年寄与次兵衛病氣二付、代兼年寄太郎兵衛印

右二付御札之覚

舟方岡田大八様、元メ内堀繁太様、御藏方中嶋剛之助様、メ三軒へ御肴料として金百疋つゝ、篠田牧太郎様ハ御立会被成候へ共、御札ハ相勤不申候事、

一、右同日、米原船登り二斤田沖二而白雨嵐二出合、帆はしら打こかし、ほくそ鱸之方江押込候、尤怪我は無之由、翌廿日此段承候付、彦根他屋会所江六兵衛見舞被参候処、右之通二候、

六月廿六日、京都暑中御窺

西御奉行

三橋飛驒守様

金子式百疋

二重くり台
下ケ札

御用人

御取次

武藤貫三様

小林与作様

辻本仁左衛門様

久保嘉十郎様

松本雄太夫様

吉原直様

メ七軒へ手札計

大竹半平様

御公事方

御公事下

深谷平左衛門様

上田八蔵様

不破伊左衛門様

廣瀬佐野右衛門様

本多新左衛門様

酒井宗助様

飯室助左衛門様

山口傳左衛門様

下田庄右衛門様

浅賀傳兵衛様

右五軒へ銀壱両つゝ

杉原作十郎様

東御奉行

真壁辰右衛門様

佐野肥後守様

右七軒へ手札計

御用人

金子式百疋

白木台
下ケ札

御取次

御取次

関谷宗兵衛様

杉原久蔵様

敷山儀助様

横井権十郎様

長嶋藤兵衛様

水野啓治様

今中兵助様

小林丹治様

右八軒へ手札計

御公事方

御公事下

山田釵次郎様

櫛橋平蔵様

石嶋五三郎様

喜多尾八郎右衛門様

塩津宗五郎様

平尾演左衛門様

加納萬五郎様

中尾勇右衛門様

右四軒へ銀壱両つゝ

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

吉岡兵治様

右九軒へ手札計

町代

田内与助殿へ銀三匁

若狭屋八兵衛殿へ差鯖式刺

金壹両

銀壹両九つ

三匁

右之通廿六日朝六兵衛、三郎兵衛相勤、供雇利八

六月廿八日、当所暑中御窺

石原庄三郎様

素麵三拾抱

白木二重くり台
下ケ札付

御元

柴山泰蔵様

同

内堀繁太様

町役

曾根源次郎様

同

三宅新右衛門様

船方

岡田大八様

右者素麵式拾抱宛

小頭

川嶋惣右衛門様

同御目附兼帯

手塚傳十郎様

御目附

柿沼小平太様

同

佐久間又兵衛様

右者素麵拾五抱宛

右之外御門内御手代衆、組屋敷、新建不残、北出氏、右八手札二而相勤候事、

与次兵衛、太郎兵衛、供太七

石原庄三郎様

同 捨之進様

右御両所共江戸表を御登り被遊、七月朔日守山宿御出立にて御帰館被遊候二付、草津宿迄御出迎与して前日より参候、則川向ひ迄御出迎、夫を草津御本陣木屋七左衛門方二而御目見江有之、先例之通干菓子壹折献上仕候、白木台下ケ札付、右代銀廿三匁、但し三種、沢藤にて調へ候事、

草津宿御出迎

太郎兵衛 供雇利八

三郎兵衛

石場御出迎

与次兵衛 供清吉

勘三郎

右御出迎之義二付、前以町代部屋を呼二参り、太郎兵衛罷出候処、

堀氏被申聞候ハ、此度御出迎之義御調有之、是迄草津宿迄罷出候人馬会所役人、百艘、米会所、米仲年寄、右之分も此度ハ勢多迄罷出候様申達候様被仰渡候趣被申之候二付、太郎兵衛答候ハ、外仲間之義ハ格別、私共之義ハ御代官様ニハ不限、京都御奉行様御登之節ニも、草津宿迄御出迎ニ罷出候、此義ハ矢橋渡船有之場所ニ付、船御用向等御伺旁罷出候義ニ付、先規方草津宿迄罷出候様□申聞候処、今一応御伺可申段被申聞、直様御伺被申上候処、百艘之義ハ仕来之通可致段被仰渡候趣被申聞候二付、先例之通草津宿迄不相替御出迎罷出候、尤後年為心得留置候事、

七夕御礼

石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

元々

柴山泰蔵様

//

内堀繁太様

町役

曾根源次郎様

//

三宅新右衛門様

舟方

岡田大八様

右鳥目五拾疋宛

右之外御門内御手代衆、組屋敷、新建御手代衆不残、手札二而勤、船方北出雲平殿へ手札計、

太郎兵衛、三郎兵衛相勤、供清吉

七月七日、当所殿様当朔日江戸表方御帰館被遊候、今七夕御礼跡ニ而恐悦御請被遊候二付、如左、

石原庄三郎様 金子五百疋、白木台、下ケ札付

同 捨之進様 同 五百疋、白木台、下ケ札付

右若殿様御帰館之上恐悦之儀ハ御請無之趣、前以町代部屋方呼ニ参申達し有之候へ共、宝曆年中御親子様御参符之砌相勤有之事故、前日船方御掛り岡田様へ太郎兵衛参り、右先例有之趣申上、此度も私共義ハ別段相勤申度趣申上候処、岡田様被仰聞候ハ、明朝迄ニ相調へ被成候而、御沙汰可有之旨被仰聞候二付罷歸り候処、翌七日呼ニ参り太郎兵衛罷出候処、岡田様被仰聞候ハ、段々相調へ見申候処、右宝曆年中御親子御参符之砌ノ御役所ニ上ケ物等之留も相分不申、定而其仲間方ニハ留も有之哉と被仰聞候二付、仰之通委細留メ書有之趣申上候処、当御殿様安永年中二江戸表方御初入之砌ニハ上ケ物等致し候哉と御尋被成候二付、留メ帳吟味致し候処、其砌ニハ御玄関御帳前まで口上ニ而御悦申上候迄ニ而、上ケ物等ハ無之趣申上候処、殿様ニハ昨六日方御上京被遊候事故、尚御帰館之上御窺申上、恐悦御請被遊候前二、何れ共御沙汰可有之趣被仰聞候、然ル処、七日恐悦御請前二岡田様被仰聞候ハ、何れ若殿様ニハ御逢ハ無之候間、御用人中迄申入ニ相成候間、殿様恐悦一同相濟候上ニ而、御玄関御帳前へ罷出候様被仰聞候二付、其段承り一同恐悦相濟候上ニ而、御帳前へ罷出、若殿様御機嫌能御帰館被遊候段、恐悦申上候処、御取次様被仰聞候ハ、其段申入候間、暫中ノ口へ差扣へ候様被仰聞候二付、中ノ口ニ相待居候処、無程御勝手用人畑祖六様御出被成被仰聞候、若旦那ニも私方宜敷御礼申入候様被仰付候趣、甚以御丁寧成御挨拶被仰聞候事、

右太郎兵衛、三郎兵衛相勤、供清吉

七月廿五日

一、柴山泰蔵様江戸へ御帰り被成候二付、石場迄御出迎、太郎兵衛三郎

当三月殿様御出符御供二而御下り被成候処、石部宿御泊り二而今日

御帰り被成候趣、吟助殿を為知被呉、九日前る石場舟屋彦助方へ参

り待受居候処、せたる艦船二而七つ時過播麻屋へ御揚二付、同所二

而御挨拶申上、暫御休被成、直様御帰り被成候事、

せた迄御出迎ハ、岡田様、三好様、其外御手代衆、惣年寄小野氏、

御出入方其外御入魂ノ衆中、はりまや迄ハ町代遠藤仁右衛門殿、跡

方堀氏見へ申候、

翌十六日、御機嫌能御帰着之御悦ニ金子貳百足、太郎兵衛持参、相

勤候事、

一、七月十五日を五日之間、杉江問屋三郎兵衛難渋二付、合力角力いたし候二付、当仲間江も札差越頼ニ参り候故、金子百足為持遣ス、但し四廻り多七親与八、杉江へ参り候二付ことづけ遣ス、

七月晦日、年寄与次兵衛殿死去被致、為香典金百足遣し候事、

京都八朔御礼

東御奉行

一、佐野肥後守様

御用人

金子三百足

御取次

目録台

下ケ札付

関谷宗兵衛様

敷山儀助様

長嶋藤兵衛様

今中兵助様

松原久蔵様

横井権十郎様

水野啓治様

小林丹治様

右七軒へ銀壹両つゝ

御公事方

山田釵次郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

加納万五郎様

右四軒へ金百足つゝ

御公事下

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾演左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

吉岡兵治様

右九軒へ銀壹両つゝ

西御奉行

一、三橋飛騨守様

御用人

武藤貫三様

辻本仁左衛門様

松本雄太夫様

金子三百足

御取次

目録台

下ケ札付

小林与作様

久保嘉十郎様

吉竹直様

大竹半平様

右七軒へ銀壹両つゝ

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

本多新左衛門様

飯室助左衛門様

下田庄右衛門様

御公事下

上田八蔵様

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗助様

山田傳左衛門様

浅賀傳兵衛様

右五軒へ金百疋つゝ、杉原作十郎様

真壁辰右衛門様

右七軒へ銀壹両つゝ、

町代

田内与助殿 銀貳両

筆工

奥田九右衛門殿 銀壹両

下町代

藤沢傳六殿

鳥目廿疋つゝ、

藤村佐市殿

東西御門番

三百文つゝ、東西中番中へ 三百文つゝ、

上八町代中へ

五百文つゝ、下町代中へ 五百文つゝ、

小番へ

三百文 追分丸屋四郎兵衛へ百文

山科大津屋孫兵衛へ百文

宿鍵屋佐助へ 三百文

同 下女へ 貳百文

✂金三両三步

五百文 二

銀貳両壹包

三百文 六

銀壹両三十式

貳百文 三

百文 二

右之通勘三郎、三郎兵衛相勤、廻り新助、荷持七兵衛

当所八朔御礼

石原庄三郎様

金子貳百疋

目録台
下ケ札付

御元✂

柴山泰蔵様

内堀繁太様

町方

曾根源次郎様

三宅新右衛門様

舟方

岡田大八様

右五軒へ金百疋つゝ、

小頭

川嶋惣右衛門様

小頭目付兼帯

手塚傳十郎様

目付

柿沼小平太様

〃
左久間又兵衛様

右四軒へ銀壹両つゝ、

〃

遠藤仁右衛門殿

右五軒へ銀壹両つゝ、

御足輕稻葉半七殿

宿場肝煎

御小遣 藤七殿

吉本弥四郎殿

政八殿

山本俵五郎殿

✂五軒へ鳥目廿疋つゝ、

御門番吟助殿

〃内義へ

鳥目五十疋

鳥目廿疋

白崎久太夫様

御蔵番三人

手札計

御門内御手代衆、組屋敷不残、新建、平蔵町年寄、坂本町年寄、

貝屋七兵衛、右各々手札計

右之通太郎兵衛、六兵衛、供与八

一、御勘定御奉行 肥田豊後守様

御勘定御差出し方 若林市左衛門様

外二御普請役四方

右者去ル六月瀬田川御見分被成、当八月五日京都御出立二而当所御藏御見分被成候二付、片原町大津屋迄御出迎、三郎兵衛、勘三郎、供孫七、石場迄御見送り、

右御藏御見分二付、船三艘新兵衛へ申付為揚候事、

金藏堀掃除二付、艀壹艘加子老入差出し候様、町代部屋二而被申付、尾花川へ申遣ス、但し高水二付格別ゴモクも無之故、壹艘二而相濟候事、

針江る例年祝義炭未不参候二付書状遣ス、

以手紙得御意候、秋冷御座候処、弥御安康可被成御座奉珍賀候、然者例年不相替被差出候祝儀炭之儀、当春者御為登も無之、其後御手船之加子衆へ伝言致し候処、其已来何之御沙汰も無之候二付、是迄例年之事故当年二限り御失念之儀ハ御座有間敷哉二奉存、若哉途中二而間違等之儀も有之儀二候哉、此度当津太郎兵衛船罷下り候二付、右御答被仰聞可被下候、先者右得貴意度早々如斯御座候、已上、

八月十二日 大津百艘年寄

針江幸左衛門様

此返書二三枚奥二有、

小高様る今津、海津迄舟賃御尋二付、左ノ書付遣ス、

覚

一、長持壹竿 此舟賃 三匁五分

一、明ヶ荷壹箇二付 同 壹匁貳分式り

一、打上駕籠壹丁二付 同 三匁五り

一、辻駕籠壹丁二付 同 壹匁五分三り

一、たれ駕籠壹丁二付 同 貳匁四分五り

一、両掛壹ヶ 同 壹匁壹分

一、人壹人二付 同 三拾文 此分ハ捌錢二而当所ノ舟二御乗被成候へハ、舟賃違ひ之趣申入有之

右者当浦る今津、海津迄舟賃、如斯御座候、已上、

酉八月十五日 百艘

小高丹藏様

八月十日、御役所る呼二参太郎兵衛被参候処、岡田様被仰候ハ、此度薩州御隠居様御登り候付、矢橋浦る御乗船被成小舟入へ御着船二相成候ハ、差支ノ有無御尋被成候故、差支無御座候趣申上候、十三日又呼二来り、此間小舟入へ御着舟差支無之趣被申聞候処、其趣膳所へ申遣し候処、石場へ御着船二相成候へ共、自然風筋二る小舟入御着船之程も難計候二付、掃除致置候様被仰聞、日限之儀ハ耽と不相知候故、宿場二而成共聞合可申被仰聞候故、此方ノ心得二而膳所田原喜右衛門殿方右御渡船之節舟ノ御用向等無御座候哉、御見舞旁々参上仕候段申上候処、御留主二而御家内被申候ハ、十六日と承り候様被申候、

右二付耽与難相分候故、矢橋へ見舞旁々尋状遣し候処、返書二十六日二相違無之趣申来、尤其日ハ泊り、荷物積候舟ハ遣し不被呉候様申被越候事、

膳所田原喜右衛門殿る左ノ書面来ル、秋暑之砌弥御堅固被成御暮、珍重御事御座候、然者此間者御出被下被入御念候儀忝奉存候、右御渡船之儀弥明十六日二相成申候義二御座候、先者御挨拶旁々如斯御座候、已上、

八月十五日

田原喜右衛門

百艘船方

御年寄中

十六日、会所前致掃除置申候、御召船ハ膳所ノ御馳走ニ而、同所御座舟ニ御召被成、朝五ツ時松本へ御着船被成、播磨屋へ御揚り被遊、暫御休足被成御立被成候、尤右部宿りニ而、伏見へ御出被成候、右小船入へ御着船無之故、当所ノ相勤候儀ハ無之候事、

八月廿一日、御役所より御書付忝通、和邇北濱舟年寄へ右相届候様被仰付候二付、則仕立飛脚を以遣し候、賃せん五四文申遣ス、飛脚東ノ与七

(綴込文書)

〔^{端書}〕文化八年辛未八月十九日夜五ツ時頃、長濱善四郎舟出火仕候義二付、明廿日御役所ノ呼ニ参り年寄与次兵衛被参候処、右始末御尋二付差上候書付写』

御尋二付申上候書付

今夜五ツ時頃、字金藏堀先キニ有之候東江州長濱善四郎持船ノ出火仕候付御見分御出候者、私共仲間之もの共も右始末見聞可仕儀ニ而、御尋ニ御座候、

此段今夜五ツ時頃、金藏堀先キニ有之候船ノ出火仕候趣見請候付、驚私共仲間ノも船乗出し様子見聞仕候処、長濱善四郎持船ニ而、右善四郎殿水主壱人乗合石灰積入、昨十八日未明長濱出船仕、同夕当地彦根他屋最寄まで参り候処、風並悪敷他屋へ着船難仕、金藏堀ニ船掛り見合罷在候得とも、右時刻迄も同様風並二付、其儘右場所ニ罷在候処、折節強雨二付苦合ノ雨洩強燃上り候付、御蔵近辺之儀別

而相驚防罷在候由、尤彦根他屋ニ参り合居候舟頭共、追々小船ニ而乗付川口堀先迄も押出し、俱々相防候趣ニ候得とも、終二者船沈候様子ニ御座全強雨二付苦合ノ洩入、右躰及始末候儀与奉存、外二怪敷儀も一切見聞不仕候儀ニ御座候、右御尋二付書付奉差上候、以上、

百艘仲間

文化八年末八月十九日

年寄与治兵衛

大津

御役所

九月朔日八ツ半時頃、吉三郎船せんどう伊八来り、只今向行荷物少々積入紺屋関へ相廻し、艫へ這入見請候処、薄縁ノ積様違有之故、引退ケ見候処、衣類ノ包有之趣申来、右衣類見受候処、

花色ジヤガ嶋合羽織 忝 おなんと女袷せ 忝 紋ニ重輪重桔梗エリ

古キ黒か、薄花色木綿女袷せ 忝 白嶋古キ単物 忝

右之通有之候二付、即刻太郎兵衛御役所へ御届ニ被出書付、左之通、

乍恐口上書

一、百艘仲間三郎兵衛持船西川口堀ニ繋置、今昼八ツ半時頃加子伊八と申者、船積可仕と右船へ這入見受候処、左ノ置物有之候趣ニ而、私共へ為相知候二付、右置もの品々左之通、

一、木綿嶋女袷 忝

一、同 女単物 忝

一、藍天紋付単物 忝

一、木綿嶋袷羽織 忝

× 四点

右之通ニ御座候、全何ものか右品何方ニ而歟盗取、右船へ隠し置候

儀と奉存候二付、右品差上此段御訴奉申上候、以上、

百艘年寄

西九月朔日

太郎兵衛印

大津

御役所

右御当番所二而高橋等太郎様へ差上ケ候事、

右之通老通相認、奥書二右之通今日町方御役所へ御訴奉申上候二付、

此段御届ケ奉申上候、以上、と相認、舟方岡田様へ差上候事、外二

御目附三軒へ口上二而相届ケ、手塚様へ品書差上右之候、

町代遠藤仁右衛門殿 銀式匁

筆工 歩六

右七つ時分ノ事故、町代部屋衆中被引取候二付、兩人出勤致被呉候

様相頼候二付、右之通礼相勤候事、

幸左衛門を返書、

先境御地船便御書札被下忝拜見仕候、先以来意秋冷相趣候へ共、其

御表為御揃益御壮健被遊御座候、珍重ニ奉存候、然者例年為年玉と

四メ炭献し候処、当年未無其儀罷過候ニ而御尋ね仰被下、御尤之至

奉存候、当春大雪ニ而、右四メ炭上之分とんと山中を今以出不申、

不都合ニ而乍失礼も未た無其儀相過居申、何れ其内無間違献し上候

間、延引失礼之段御免可被下候、右御断り申上度、以上、

八月廿八日

針江幸左衛門

百艘

御年寄中様

九月三日、船頭町七兵衛船ニ置物有之趣、七つ半時船頭与四郎持来

候へ共、晩景ノ事故四日四つ時太郎兵衛御届ケニ被出候趣、左二記、

乍恐口上書

一、百艘仲間七兵衛持船金藏堀ニ繋置、今朝加子与四郎与申者、右船へ

這入見受候処、左之置物有之候趣私共へ為相知候二付、右置もの品々

左之通、

一、木綿藍嶋 式反

一、浅黄嶋 壹反

一、紺嶋 壹反

一、鉄色木綿 壹反

一、雨桐油 式枚

木綿 五反

雨桐油 式枚

右之通ニ御座候、全何もの歟右品何方ニ而歟盗取、右船へ隠し置候

儀と奉存候二付、右品差上此段御訴奉申上候、已上、

百艘年寄

西九月四日

太郎兵衛印

大津

御役所

右御当番所二而八戸民五郎様へ差上候、

右之通相認、奥書二右之通今日町方御役所へ御訴奉申上候二付、此

段御届ケ奉申上候、以上、と相認、舟方岡田様へ差上候事、

外ニ御目付手塚様へ左ノ書付上ル、

覚

一、品書

右八百艘仲間七兵衛持船金藏堀ニ繋置、今朝加子与四郎と申者右船へ這入見受候処、右ノ置物有之、私共へ為相知候二付、只今御役所

へ御届ケ申上候二付、此段奉申上候、以上、

西九月四日

百艘年寄太郎兵衛

外御目附式軒へ口上二而御届ケ申上候事、

九月五日七つ過、治兵衛船内海積固メ、艫ノみぎらの下見受候処、
綿入式つ、内壱つハ藍天巴紋付綿入羽織壱、鼠小紋蟹牡丹紋付女綿
入壱、有之趣申持来り、左二届ケ書記、

乍恐口上書

一、百艘仲間治兵衛船金藏堀ニ繋置、昨五日七つ時過頃、加子与兵衛与
申者荷物船積可仕与存、舟ニ這入見受候処、左ノ置物有之趣私共為
相知候二付、右置物品々左之通、

一、藍天紋付綿入羽織 壱

一、鼠小紋紋付女綿入 壱

×式品

右之通二御座候、全何もの歟右品何方ニ而歟盜取、右船へ隠シ置候
儀と奉存候二付、右品差上此段御訴奉申上候、以上、

百艘年寄

太郎兵衛印

酉九月六日

大津

御役所

右之通壱通奥書いたし、船方岡田様へ差上候事、

外二御目附手塚様へ品書差上候、外式軒へハ口上二而届ケ申事、
右書付御当番所ニ而高橋等太郎様へ差上候事、

九月五日、御町役三宅新右衛門様御内室御死去二付、為香典南鐐壱
片遣し候事、

九月五日、大坂屋六郎兵衛殿三郎兵衛方へ被參、先月廿九日積三郎
助船内海ノト川行藤兵衛揚り荷物之内皮籠四つ、右之内壱つ切解木
綿類舟中ニ取散せ有之趣、大六殿下男折節参り居合見届ケ歸し候旨
申被聞、舟主三郎兵衛方を罷下り、問屋藤兵衛宅ニ而荷主北清水村
善五郎立会相改候処、皮籠式つ切解有之、余程紛失之品も有之書付
為致、此外二白木綿五疋計不足候様存候へとも、悴旅商ひニ罷出有
之故、睨与致し候義ハ不相分候段申居候由承、七日七つ時歸宅致し
候二付、明八日御届申上候書付左二記ス、

乍恐口上書

一、去ル八月廿九日、当津三郎兵衛船ニ江州常樂寺、ノト川行荷物積
合、字金藏堀ニ繋置日和待仕、九月二日夕出船、同四日二ノト川へ
着船仕荷物船揚可仕候、当津荷問屋大坂屋六郎兵衛方を積入荷物之
内、江州北清水村善五郎行皮籠四つ之内式皮籠切解有之候二付、打
驚早東問屋藤兵衛揚り二付為相知、大津表へ積出し問屋、船主へ申
越し候二付、早東船主罷下り荷主立会相改候処、紛失之品左二奉申
上候、

覚

一、女單物 壱、(合患)

一、男單物 壱、(合患)

一、裕羽織 壱、(合患)

一、納戸綿入羽織 壱、(合患)

一、裕せ 壱、(合患)

一、女裕せ 壱、(合患)

一、鉄色三丈物 壱反、(合患)

一、豎横薄浅キ 壱反、(合患)

小筋ノ大嶋

一、障子こし嶋 壹反

一、木綿嶋 壹式反計

一、雨合羽 貳枚

×拾一点

右之通御座候、尤外二紛失之品も有之様荷主善五郎申居候へ共、同人悴宇兵衛と申者当時遠方へ旅商ひニ参り居候二付、睨与致し候義ハ相知不申、右宇兵衛罷歸り次第御訴可奉申上、此段御断奉申上候、尤加子虎吉、勘吉船二泊り居候へ共、全日和待之内夜中寝入候隙ヲ考へ、胡乱者這入盗取候儀と奉存候、且加子兩人共得と相糺し候へ共、怪敷存当り無御座候旨申之候二付、乍恐此段御届ケ奉申上候、以上、

荷問屋

文化十年

西九月八日

大坂屋六郎兵衛印

船主 三郎兵衛印

百艘年寄

太郎兵衛印

大津御役所

右御当番所二而高橋等太郎様へ差上有之事、

右之通壹通奥書相認、船方岡田様へ差上候事、

外二御目附手塚様へ左之書付上ル、

覚

一、品書

右八去八月廿九日、当津三郎兵衛船ノト川行荷物積入九月二日夕出船、同四日二同所へ着船ノ上船揚仕候処、当津荷問屋大坂屋六郎兵衛出之皮籠、四つ之内貳皮籠切解有之、右荷物紛失仕今日御届ケ奉申上候二付、此段奉申上候、以上、

九月八日

外御目附貳軒へ口上二而御届ケ申上候事、

覚

一、単物 壹枚 女中

一、" 壹枚 男中

一、^{あわせ}羽織 壹枚 男

一、綿入羽織 壹枚 納戸

一、袷せ 壹枚 男

一、" 壹枚 女中

一、鉄色 壹反 三丈物

一、立横うす 壹反 五筋之

一、あさき 大嶋

一、障子こし嶋壹反

一、木綿嶋 壹式反計

一、小合羽 貳枚

× 荷主、北清水村善五郎様分

粹刃兵衛様

右之通り二御届申候、

問屋藤兵衛(印影：江州問屋藤能登川)

西九月六日

船師 三郎兵衛様

伊八殿

右八藤兵衛方を参候書付也、

重陽御礼

一、石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

御元々

柴山泰蔵様

〃

内堀繫太様

御町役

曾根源次郎様

舟方

岡田大八様

右四軒へ鳥目五拾疋つゝ

御町役

三宅新右衛門様 此節御忌中ニ付差扣へ、御忌明之上相勤可申、

御門内御手代衆、組屋敷不残、新建不残、北出氏へ手札計ニ而相勤候事、

右七兵衛、三郎兵衛相勤候、供太七

一、九月十日夜七つ時、膳所馬乗馬場出火ニ付、左之通、六兵衛見舞ニ

参候事、

阿閉権三郎殿

船奉行

永田郷左衛門殿

同下役

田原喜右衛門殿

右ニ付翌十一日田原喜右衛門殿方挨拶書面参候事、

九月十五日、從御役所御渡し被成候御配符式通、左之通、

追而本文、運上銀大津橋本町古望仁兵衛方ニて懸改候間、得其意

納入印形持参可致候、已上、

湖上船運上銀来月朔日より五日迄持参上納可致候、遅滞致間敷候、

此配符令請印、早々順達、留り所より可相返候、以上、

大津

(マコ) 申九月十五日 御役所 印
(割印影写)

大津より川道迄

右浦々庄屋、船年寄

坂本ふね惣兵衛与申者二午上刻ニ致ス、
(渡)

一、右同断 壹通

松本より伊庭迄

右浦々庄屋、船年寄

同日、松本浦舟年寄方へ為持遣ス、使新八

石原庄三郎手代

先触

柴山泰蔵

藤澤永四郎

大津宿始

覚

一、御用長持

壹棹

此人足四人

一、具足櫃

壹荷

此人足壹人

一、乗物

壹挺

此人足四人

一、垂駕籠

壹挺

此人足式人

一、人足九人

内 両掛

六荷

竹馬

壹荷

步竿

式組

合羽籠

壹荷

人足貳拾人

右者当作毛為檢見、御代官明後十七日曉七つ時大津御役所出立、其筋被罷越候条、書面人足於宿々無滯差出、御定之賃錢請取之被繼立、渡船、川越之場所ハ從前宿通達致し、止宿等之儀も差支無之様可被取計候、且又於村々送迎人足之儀ハ申合、無間違可差出候、尤泊村之儀者檢見手操ニ寄治定難致候得共、先つ為心得相達候、人数者上下拾六人之積可被相心得候、此先触早々順達、留村より可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

藤沢永四郎

〔副印影写〕 西九月十五日 長澤仙八郎

岡田大八

柴山泰藏

浅井郡

大津

十八日泊り 鍛冶屋村

矢橋

郷野村

草津

野瀬村

守山

中村

十七日泊り 愛知川

高山村

西村

高宮

田村

鳥井本

寺師村

米原

甲津原村

長濱

右宿 問屋

村々 庄屋 中

年寄

追而於宿々垂駕籠三挺用意致置可給候、已上、外二御廻状表封、左之通上書、

大津

廻状 御役所

江州浅井郡

鍛冶屋村始

右之通九月十五日從御役所七つ時ニ為持被遣、即刻矢橋浦江相遣し候事、

九月廿二日

一、例年之通石山より松たけ甘本来り候二付、役人中へ配らせ候事、

覚

一、百貳十四銅 壹

一、四十八銅 壹

一、三拾六銅 貳

一、貳十四銅 三

一、拾貳銅 十九

人 廿六

右之通奉納仕候、已上、

大津

西九月廿一日

百艘印

貴布祢御社中

一、九月廿一日より、北之町組市兵衛子息市三郎事市兵衛与改名被致、

右之趣組内より披露被致候事、

但し是迄見習勤いたし被居候所、此度一統相談之上、今日より

本役ニ為居り候事、

右ニ付諸白式升、はむ壹本、赤貝七つ、市兵衛を差出され候事、

乍恐口上書

一、百艘仲間年寄役之内与次兵衛儀、当七月死去仕候処、此節無人数ニ付于今跡役難相究、余り延引仕候間、此段御断奉申上候、猶跡役之者早々相究、其節御届ケ可奉申上候、乍恐此段御聞濟被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

文化十年

西九月晦日

百艘年寄

太郎兵衛印

七兵衛印

三郎兵衛印

大津

御役所

石原庄三郎手代

岡田大八

藤沢永四郎

大津百艘始

覚 追而雨天日送り積可相心得候、以上、

一、両掛 式荷

此人足式人

垂駕籠式挺、此人足四人用意可給候、

右者当作毛為検見、我等明廿八日曉八つ時大津出立、野洲郡村々江

罷越候条、書面之人足於宿々無滞差出、御定之賃錢請取之被継立、渡船、川越等之場所者從最寄通達いたし、止宿等之儀も差支無之様可被取計、且村々送迎人足之儀ハ申合、無間違可差出候、此先触早々順達、留り村々可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

割印 九月廿七日

藤沢永四郎印

岡田大八 印

大津百艘、矢橋、草津、守山、富波澤村、五条村、北比江村

右宿村々問屋

庄屋 中

年寄

右之通九月廿七日午ノ刻御役所ニ而御渡し被成、即刻矢橋浦へ相達し候事、使清吉

尋儀有之間、来ル廿六日罷出可相届、若於不参者可為越度もの也、

大津

十月十日 御役所御印

百艘

堅田

八幡

右浦々船年寄

右御差紙十日堅田藤七舟へ相渡、

十月十日

赤ノ井村へ御差紙壹通

同村善吉艦へ遣ス、

堅田浦二遣し候書状、左之通、

以手紙得御意候、追々冷氣相増候処、弥御安康可被成御座奉珎賀候、然者今日当御役所方御差紙御渡し被成候二付順達仕候、赤ノ井一件之儀二御座候二付、先達而各々御歸り之節御噂之通、八幡浦ハ御書入有之候へ共、先此度者登り候二も及間敷段、御内意被仰聞候事故、此配符御廻し被成候二も及間敷奉存候、乍併御序之節、右御沙汰被成置可被下候、尤貴浦之儀も御吉人御登り被成候而も宜敷様、是又御内意も有之義二御座候へ共、此義者思召次第ノ事と奉存候、尚委曲拜眉之節可申上候、早々以上、

十月十日

大津百艘年寄

堅田浦船年寄中様

尚々御差紙之儀者返上仕候事故、御登り之節無御失念御持参可被成候、以上、

石原庄三郎手代

先触

柴山泰蔵

藤沢永四郎

大津百艘始

追而浅井郡北野村江之書付壹封、先触一同順達可給候、以上、

覚

一、垂駕籠 貳挺

此人足四人 但し自分駕籠

一、分持 六荷

此人足六人

内

両掛 五荷

歩竿 貳組

外人足 拾人

外

垂駕籠 壹挺用意置可給候、

右者我等共儀当作毛為檢見、明十四日曉七つ時大津出立、江州浅井郡村々江罷越候条、於宿々御定之賃錢請取之、書面之人足無遅滞差出可被継立候、尤渡船、川越等之場所ハ前宿方及通達、差支無之様可被取計候、此先触早々継送り、留り村方我等共着之上可被相返候、以上、

西十月十三日

石原庄三郎手代

藤沢永四郎

長沢仙八郎

岡田大八

柴山泰蔵

大津百艘、高宮、矢橋、鳥井本、草津、米原、

守山 守山宿江申達候別紙、北桜村江之書付壹封、賃錢北桜村二而請取候積、早々相達可被給候、長濱、

武佐、曾根村、浅井郡 十四日泊り愛知川 上下九人之積可被相心得候、

右宿村

問屋

庄屋 中

年寄

外二 石原庄三郎手代

柴山泰蔵

一、書付 岡田大八

長沢仙八郎
藤沢永四郎

江州野洲郡北桜村

庄屋
年寄 中

一、書付 同断

右四人様

江州浅井郡北野村

庄屋
年寄 中

×三通巻箱

右者十月十二日ニ御渡し被成候付、翌十四日ニ矢橋浦江相達候事、

十月廿二日夕、川口町年寄升屋市左衛門殿当会所へ被参、此節渴水ニ付川口堀さらへ致度、是迄堀さらへ之節人歩出され候先々へ申遣し置、明日より懸り候間、中間方是迄之通世話いたし呉候様頼二付、中間相談之上二而、文化七午年之振合を以、金貳百疋樽代与して升市宅へ七兵衛持参挨拶致置候、

但し先達而之後へ川口方頼之節、堀入口之所加子手伝二出し、中間方役人付添加子之懸ケ引世話致候事も御座候、其後後へ有之十八文懸り、三文ハ中間方出シ呉候様頼御座候へ共、割合ケ間敷例も無御座、畢竟堀口舟通之儀を相弁へ、樽代与して貳百疋遣し候事ニ御座候、此度も其意を以取計候事ニ御座候、例二ハ相成不申、然しとも右之形振りたるべき事、

大津

書付 御役所

浅井郡南濱

右門次郎

右御書付巻通、十月廿六日南濱へ相達し候様被仰渡候、

十月晦日、三井寺方例之通暑氣見舞素麵五十五把到来之事、

右暑中ニ参り候へ共、当年ハ賄方新役二而不案内二付、延引候段断申参り候事、

当所若殿様御用御手伝被蒙仰候二付、為恐悦与

石原庄三郎様へ 金子三百疋 目録台、下ケ札付

同 捨之進様へ 同 三百疋 同断

右十一月二日五時半時方罷出相勤候事、太郎兵衛、三郎兵衛、供新助右之跡二而、御息女様江戸表へ御縁付被遊、当四日御下り被成候二付、為御祝

金子貳百疋 目録台、下ケ札付

右御玄関へ罷出御取次へ申置二而、差上候事、

右御供ニ小使ノ藤七下り被申候二付、饞別ニ朱遣し候事、

十一月四日暁七時半時、御息女様江戸下り御出立、

右八石原様関東之御縁家様江御縁談相究り、御入被遊候御事、

右二付石場迄七兵衛袴羽織二而御見立申上候、供新介

右御息女様御下り二付、御付添内堀繫太様御越し被成候二付、金貳百疋御饞別御肴料差遣し候事、

当秋之頃より雨かたく照続キ殊外渴水二而、小舟入浜いつも乗せ場よりハ水二つれ舟を浜へ下ケ積せ候へ共、次第ニ水減り船すハリ、入舟足入杯ハ寄り兼、積場ニ迷惑いたし、空を見合せ心抱致候へ

共、早急ニ水増候気色相見へ不申、追々干水ニ付同所波留場先石垣外へ当分橋掛呉候様、十月中旬上下小舟之者とも頼出候ニ付、場所見ニ参り中間相談之上、波留場石垣幅同様板ニ而湖中へ三間通先へ掛ケ出し致、跡之取払ニ至迄橋一色、手伝之半七ニ積らせ中間世話不入、尤丈夫成受合、六貫文ニ渡し切誂申候、且又右波留場石垣年々浪ニ而洗へ、詰石抔抜ケゆるみ損し、路次あしく角石傾キ、後ニハ水中へ落舟之害ニ相成候故、乍序直させ此手間賃七メ文ニ誂申候、年寄太郎兵衛日々手拔無之様見廻り氣を付出来いたし、都合十三貫文、十月廿六日手伝半七へ相渡し申候事、但し是迄渴水之節板橋掛ケ出し候砌ハ、郡山蔵所ノ橋板、或ハ若狭蔵ノ橋板抔かり用ひ候へ共、当年ハ何方も入用ニ付、無其儀候事、

金蔵堀入口船通し見当水底ニ石四つ所々ニ有之、此節渴水ニ而船入船之害ニ相成候故、取退ケさせ申候、此賃銭壹貫五百文、十月廿六日手伝ノ藤兵衛へ相渡申候、右堀入口水底ニ御座候石之義ハ、御蔵石垣側其近辺ニ有之候処、いつとなく大浪打候砌自然与ゆり出し、如此舟通りへちらかり、舟行通ひ別而夜陰杯ハ相懸難儀いたし候ニ付、先達而地舟加子共取退ケ懸候処、其石ハ御蔵石垣之捨ステいし容易ニ取退ケ間敷旨、蔵番咎メラレ候故、誰れ有テ不構捨置候得共、此砌之渴水ニ而甚障りニ相成別而御城米も追々積登り、都而御大切之御印頂戴之船障りニ相成候趣ニ付、三郎兵衛蔵ばん内田氏へ参り懸ケ合之上、御蔵之石垣側へ取退ケ寄せさせ置候事、

一、此節堀猪三郎殿御子息元服被成候ニ付、十一月七日はむ式本、鮑壹つ、中間方方相祝ひ候事、使太七ニ持せ遣入、右例ハ無御座候へ共、此度当駅より江戸表へ割増願之催御座候ニ付、

宿付舟方之儀何角是迄之振合を、年寄太郎兵衛より右堀氏へ相頼合候義ニ付、折柄右之通御挨拶送り候事、

十一月十一日、百艘年寄太郎兵衛、舟主七兵衛、同治兵衛代庄兵衛、同三郎兵衛代分次郎、大坂屋六郎兵衛付添わに屋藤左衛門石橋町牢屋敷へ御呼出し有之、九つ時過罷出候処、先達而紛失荷并置場之儀ニ付、御目附御三人御立合ニ而、書付ニ印形御取被成、三郎兵衛儀八年并家内等御尋被成、船主三人共遠方留被仰付候、

覚

- 一、銭壹貫四百文
- 一、花色横袖女袷 壹つ
- 一、木綿豎嶋女単物 壹つ
- 一、藍天紋付女単物 壹つ
- 一、藍立横嶋袷羽織 壹つ
- 一、藍しま 貳反
- 一、浅黄しま 壹反
- 一、紺しま 壹反
- 一、花色 壹反
- 一、納戸□紋付綿入羽織 壹
- 一、鼠小紋紋付女綿入 壹
- 一、鼠小紋女単物 壹
- 一、藍立横嶋男単物 壹
- 一、藍棧崩シ男袷 壹
- 一、茶同引嶋女袷 壹
- 一、布紺しま 貳反

一、 同染切□

三つ

一、 雨桐油

三枚

×十八点

右九月朔日夜金藏堀船二而紛失之品

御目附右之通書付差出し候様、大坂屋六郎兵衛へ御渡し被成候書付御写し置、尤北清水荷主善五郎出候二不及、大坂屋六郎兵衛荷主代二而罷出宜様被仰聞、同人右品書願書差出し候様被仰渡候、願書之写左二記置、

乍恐口上書

一、当八月廿九日、百艘仲間三郎兵衛舟へ積入申候荷物之内、江州北清水村善五郎行皮籠式ケ、能登川問屋藤兵衛へ積送り申候所、右船中二而荷物切解、則品数別紙二認奉差上候通紛失仕候二付、此段先達而奉願上、尤船主三郎兵衛へ掛合二相及居候処、右盜賊此節御召捕二相成候段奉恐入候、依而右紛失之品々所持仕居候義二も御座候ハ、何卒荷主善五郎へ被下置候ハ、難有奉存候、右善五郎義病身二御座候二付、乍恐私共右此段奉願上候、右之通御聞濟被為成下候様御願奉申上候、以上、

荷問屋

文化十年

大坂屋六郎兵衛

酉霜月

右御願奉申上候通相違無御座候二付、乍恐奥印仕候、以上、

年寄

大津

御役所

右之願書持參被致候処、先而書付出来文言ハ大牀右之趣二、年、家内等書入有之趣候様大六殿被申候、右書付ハ不用二候へ共、為心得

写置もの也、

一、十一月十五日、薩州御隠居様御国へ御登り、伏見立二而膳所瓦ケ濱へ御立寄被成候二付、松本へ御乗船之趣二候処、此節至而干水二付舟ハ止メ二相成候旨、前十四日矢橋浦弥左衛門殿、割増し儀二付当処へ見へ候二付、田原喜右衛門殿右此段百艘会所へ通達致し呉候様伝言有之、右弥左衛門殿又膳所へ被參候二付、田原氏へ宜敷御挨拶被下候様相願遣し候事、

此度当宿方へ割増為御願之、宿惣代山本倭五郎殿、宇治屋弥惣兵衛殿、兩人出府被致候二付、当処并矢橋浦共右御願申上度候二付、右兩人へ相頼遣し候二付、十一月十四日当御役所へ願書差上ル、御船方へハ矢橋浦年寄弥左衛門、百艘年寄太郎兵衛連印願書差出御聞濟有之、委細ハ割増一件帳二留メ置、仍略之、

十一月十九日曉六つ時、山本倭五郎殿、宇治屋弥惣兵衛殿出立被致候二付、是迄先例も不相見候へ共、時節之振合二応し七兵衛、三郎兵衛、供太七、石場迄見送り二罷出候事、

一、十一月七日、堀猪三郎殿方元服祝ひ与して肴兩種送り候処、同廿三日右同人方より書札添酒五升返礼与して、但し諸白也、使参り候二付受置候事、

一、十一月廿九日、吾妻川浚二付御見分与して、御町役曾根源次郎様御組頭川嶋惣右衛門様、町代堀氏付添御越被成候二付、右場所へ年寄太郎兵衛罷出候処、下ノ立会場二而式尺浚二相成候間、右二准シ相浚候様被仰聞、御休息ハ無之直様御引取、夫へ獵師町川端明キ地

二 建家御願申上候二付、御見分被成候上二て御歸り被成候事、

一、金式百疋

右内堀繫太様江戸御下り二付、御留主中為御見舞と差上候事、

閏十一月五日

江頭右下船二而米積登り候故、帳屋へ遣し候手紙如左、

以手紙得御意候、寒冷御座候処弥御安康可被成御座奉珍賀候、然者御浦方積米順番、小口之浦方へ前広二御案内被下候儀ハ御承知之儀二可有御座候処、下船二而余程積登り候趣承り、左候而者御執計方御行届キ不被成推察仕候、其趣二而者小口船之者甚以迷惑二奉存候間、此已後急度積米出来前広二順小口之浦方へ御案内状御差出し可被下候、此段間違無様御執計可被下候、此已後間違筋出来仕候而申し分二も相成候而ハ、御互二不宜儀二御座候間、此段御心得被下、已来間違無之様御執計可被下候、先者右得御意度早々如斯御座候以上、

閏十一月十三日

百艘年寄

帳屋傳右衛門様

右返書到来、左之通、

御芳墨被下忝拜見仕候、如来命甚寒二御座候処、各々様被成御揃弥御安靜可被成御座、珍重奉存候、然者当浦順番小口舟之儀、執計方不行届ノ義被仰聞承知仕候、且又先達而飛脚便りへ御案内指出し候処、飛脚間違二而候哉大きく延着仕候と承り、下拙不念之筋二御座候急飛脚遣し候へハ左様之間違無御座候処、何卒く不行届之儀ハ偏二御高免可被下候奉希候、已後急度念入間違無之様相守り、此度之儀ハ偏二御免可被下様奉願候、先者右御断申上度如此御座候、以上、

閏十一月十五日

帳屋傳右衛門

御年寄中様

閏十一月十一日昼九つ時過頃、扇屋ノ関浜先石垣下々をつたひ、四十才計ノ女御役所東ノ方水門先湖中へ這入身拔(投カ)之躰入舟之加子見付、早束声を懸ケ町よりも出合引揚ケ置候処、御役所ハ湊町呼二被遣取計候様被仰付候得共、町をはなれ湖中之儀断被申、百艘を呼二参り町内と談し取計候様被仰付候故、右之もの町より参り水中へはまり候儀二御座候間、場所ハ御役所先之儀二候間、百艘も御断申上候所何分差懸り候急成儀、双方共余所事二見捨かたき場所、懸りしらべハ跡へ廻し百艘并町内与申談し取計候様被仰渡候二付、則町内与談し火をたきあたらせ、古綿人買取彼是致居候内二、御役所ハ大江右人下々小家式人呼二遣され、右三人参り濡れ候着類を着替へさせ、町内二塩佐借家明キ家御座候故、其所へ入し火をたき介抱いたし、医師を招キ、則木や町一平殿并大工町奥村殿脈躰被見、一命二別条無之兩人共被申之、御目附佐久間又兵衛様御立会二而菓を調合いたし被歸、早束服薬養生致させ、佐久間様右女二様子御尋被成候処、何分申兼隙入漸ク年三十九才、所ハ京都北野紙や川町智宝院光月与申仁之姪ま津与申もの二而、痛症病者之由、今朝宿元を出候趣申之候二付、佐久間様御引取被成、夫より百艘、湊町町代部屋へ出候処、右入水之趣連印二而御届申上候様との義二付相届申候、若変り候義も候ハ、可申出様被仰付候、夜分之番ハ大江へ被仰付、下々小家兩人番を致し、先方へ之飛脚双方申合差出し候様との義二付、此儀ハ宿方ハ御差遣し被下候様申之候処、待番を御遣し被成候処、夜中智宝院右飛脚与同道二而八丁尾張や江着被致、其由待番ハ懸り町代衆へ届置、翌十二日早天、場所隣家ニおゐて智宝院へ湊丁并百艘立会

懸ヶ合候処、本人平日癩症二而引籠、昨朝不存内出あるき右之仕合二御座候、何分内分二而取計相渡し呉候様、尤入用万端承り度訳而頼二付、町代部やへ申込、則町内并百艘当テ名之一札を取、病人相渡し申候、右書付ハ湊町年寄木綿屋長兵衛殿へ相渡し置、写し左之通

一札

一、拙者隠居光月方同居まつ与申当三十九才二相成候もの、昨十一日昼九つ時過頃御当所扇屋関浜先湖水中へ這入候を、其辺二罷在候船頭見受、早速引揚各々方へ為相知候趣二而、御立合御見受被成候処、氣分等相替義も無之候得共、湊町明家へ御取入服薬養生被致置候而拙者方へ為御知被下候二付、驚早速罷越候処、右まつ二相違無御座候、尤同人儀ハ昨朝宿元罷出候二付、近所相尋候得共不相知候二付、尚又心当り之所々相尋居候折柄、為御知被下候儀二御座候、勿論まつ儀持病癩症気之もの二付、右躰及始末候儀与被存候、右二付御町内を騒し、其上御介抱御世話被下候儀共、千万忝仕合御座候、右之もの召連罷帰り度、御引渡之儀御頼申入候処、御内分二而御引渡し慥二請取申候、依之一札差出候処如件、

文化十年酉

閏十一月十二日

京都北野紙屋川町

智宝院 圓

湊町

町役人中

百艘仲間

年寄中

右二付払方之分留置、

一、南鐮沓片 町代遠藤氏 一、銀三匁 医師、大工町奥村氏
一、銀三匁四分 同 堀氏 一、同式匁 中保町一平

一、同四匁三分 御目附 佐久間様

一、壹貫百文 綿入 壱つ代 京町古手や

一、同式匁

筆工歩六

一、四拾八文 病人二着せ 候ふとん代 灰屋長右衛門

一、三百文

場所隣家方 喜介茶代 昼夜番ノ

一、三百世式文 割木代 喜介

一、壹貫貳百文

者四人 紙屋川迄夜通

一、七百元 番ノ者 酒代 魚屋嘉七

一、五百文

紙屋川迄夜通 飛脚兩人賃

一、百文 懸ヶ走り 小使雇賃

一、廿四文

わら代

一、百文 御目附佐久 間様供老人

一、貳百壹文

町内小歩キタ べ物世話料

△金二朱、銀十四匁七分、せに四貫六百九文

此所へ南鐮沓片遠藤氏分、銀三匁四分堀氏分、同四匁三分佐久間様分、同式匁筆工歩六分、

右四包与外二金三分、せに四十八文智宝院差出し、湊町年寄長兵衛へ被相頼候二付、いせ清方二而両替いたし、夫々無間違立会取計遣し候事、

右之通病人を智宝院へ相渡候趣之届書差上候所、双方へ被仰付候二付、湊町年寄長兵衛、五人組甚右衛門、百艘年寄七兵衛連印を以十二日御届申上候、

四つ時頃過、病人をかご二乗せ早々帰京致され候、

湊町五人組ノ内木屋甚右衛門殿宅へ参り、年寄木綿屋長兵衛殿、五人組木屋作藏殿、若狭屋、百艘三郎兵衛、七兵衛立会払方世話致候塩屋佐右衛門殿明キ家を病人之入場二遣候挨拶与して、酒三升中間方より遣し候、尤町内も少々内費等御座候へ共、最初二御役所より訳而双方へ御利害も御座候事故、無抛町内宛二賄ひ被置候趣承り候二付、仲間方も塩佐へ之挨拶之分、中間出し二取計候事、

右一件之もの前段之通町所相知し、早束先方を呼寄せ懸ヶ合引渡し、

勿論入用等二至迄取賄ひ被帰、穩二片付候へ共、自然即死杯いたし
何方之もの哉出所方角不相知候へハ、甚厄介役害もの二御座候、但しあ
げろ出来候もの二而も打寄せ候もの二而も、場所ハ御役所地先之事
二御座候へハ、津内宿方懸り二御座候、御しらべも御座候へハ、其
趣可申上事二候、

当所寒中御窺

石原庄三郎様

真鴨一掛

白木台、下ケ札付

元々

柴山泰蔵様

内堀繫太様

篠田牧太郎様

町役

曾根源次郎様

三宅新右衛門様

舟方

岡田大八様

右六軒へ南簾壹片宛

小頭

川嶋惣右衛門様

小頭兼帯御目附

手塚傳十郎様

御目附

柿沼小平太様

佐久間又兵衛様

右四軒へ白銀壹両宛

舟方下

北出雲平殿、名札計

右之外御門内御手代衆、組屋敷、新建不残、手札二而閏十一月十九
日七兵衛、三郎兵衛相勤ル、供清吉

此節仙洞様御停止御慎中二有之候得共、先例二有之様相見江候二付、
殿様へ真鴨一掛差上候処、篠田様御出被成二定例ナレトモ此節之事
故京都へ相伺、品二ヨリ御差帰シ二相成候儀も可有之哉、此段相心
得候様被仰聞候、

右鳥ハ者先此方へ御預ケ被成、追而御沙汰有之次第差上候様被仰渡
候、遠方之儀ハ御請被成、近辺之儀者何れも右之通二相成候様承候事、
篠田牧太郎様ハ御元々役二候へ共、御触も無之不存候二付、是迄不
相勤候へ共此度ろ御礼相勤候事、

閏十一月十九日、内堀繫太様江戸ろ御帰被成候二付、勢田迄御出迎

二七兵衛、三郎兵衛相勤候事、

一、金子貳百疋

右同日内堀様御機嫌能御帰着、為御悦と差上候事、

覚

一、御納豆五拾把

右者從御前様例年之通被下置、難有頂戴仕候、以上、

西閏十一月廿五日

大津百艘印

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子百疋

右者従当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶、從御前様被下置髓頂
戴仕候、以上、

酉閏十一月廿五日

大津百艘印

觀音寺様御内

松岡市左衛門様

閏十一月廿一日、京都寒中御伺

西御奉行

献上

三橋飛驒守様 真鴨壹掛、二重くり台、下ケ札

御用人

御取次

武藤貫三様

小林与作様

辻元仁左衛門様

久保嘉十郎様

吉原直様

大竹半平^平様

六軒江手札計

公事方

三 深谷平左衛門様

古 上田八藏様

古 不破伊左衛門様

古 廣瀬左野右衛門様

古 本多新左衛門様

古 酒井宗助様

古 飯室助左衛門様

古 山田傳左衛門様

古 下田庄右衛門様

古 浅賀傳兵衛様

五軒江南鐮壹片宛

三 杉原作十郎様

三 真壁辰右衛門様

七軒江手札計

東御奉行

献上

佐野肥後守様

真鴨壹掛、二重くり台、下ケ札

御用人

御取次

関谷宗兵衛様

松原久藏様

敷山儀助様

横井権十郎様

長嶋藤兵衛様

水野啓治様

今中兵助様

小林丹治様

八軒江手札計

御池 山田釵次郎様

御池 櫛橋平藏様

石嶋五三郎様

喜多尾八郎右衛門様

塩津宗五郎様

平尾演左衛門様

加納万五郎様

中尾勇右衛門様

四軒江南鐮壹片宛

北筋一軒計

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

吉岡兵治様

町代

田内与助殿、銀三匆

若狭屋八兵衛殿、ふずい鳥

九軒江手札計

壹羽

南鐮壹両式朱

銀三匆

右之通廿一日朝勘三郎、市兵衛兩人相勤ル、供廻り多七

一、米壹表^俵

右者例年之通石山寺参候、

十二月廿五日

一、金子貳百疋

右者膳所本多隠岐守様方例年之通被下置候、

十二月九日、定太郎不快ニ付暫不参致被居、今日方出勤被致候為挨拶と、真鴨壹羽、生貝壹つ、玉子三十、せり被差出候故、為致料理一同賞翫致し候事、

十日、瀬田橋本村方あじ鴨五羽到来致し候事、

先頃より大津町組六兵衛病氣引致被居候処、此節快氣出勤被致、為挨拶大鯛壹枚、かき七籠差出され、二日寄合、

一、金子百疋

右者三好順之助様町役被蒙仰候ニ付、為恐悦十二月晦日持参仕候事、

一、金子百疋

右ハ朽木様方被下物受取左ニ留メ置、



覚

一、金子百疋

右者朽木様方例之通被下置、慥受取申候、已上、

文化十一戌年正月

御用達

升屋市左衛門殿

右ハ西暮被下置候へ共延引ニ相成、当正月ニ参り候故、正月之日付ニシテ受取遣ス、

一、米三千三百六俵

当西年分

右江頭方順番船難立、急キ米ニ付断申参候分、外ニ俵数不相知候、断状余程有之候、

嶋関堀近来段々埋り浚も致度折柄、当年ハ初秋已来至而渴水ニ付手伝働之ものニ堀中積らせ、此方より印を付ケ候分土を堀り取、西づら石垣下タへ落石数多有之候分引上ケ、石垣拔ケ有之候所を繕ひ、西づら多分之土砂をさらへ、其節之水一様ニ五寸乘り候様ニ積らせ見競候所、田上新免村吉三郎之積り利口ニ付、四拾貫文ニ渡し堀らせ候、閏十一月十八日より懸り暫休日御座候、夫方十二月朔日方同十四日迄百七十五人手間懸り、別而寒中無如在入精ニ付、相談之上五貫文増遣し候而、都合四拾五貫文相渡し遣し申候、

十一月仙洞御所崩御ニ付、泉涌寺御賄方御用石原庄三郎様被蒙仰御在京ニ付、御池通御旅館迄御窺申上候、上ケもの左之通、

石原庄三郎様江

金三百疋

二重繰り台ニ乗せ

芝山泰蔵様

中嶋剛之助様

本庄彦六様

清水善之助様

御若手近習御両三人様

右御一統様へ御肴料貳百疋

右ハ閏十一月十一日、七兵衛、勘三郎、供清吉御窺ニ登り候処、早天泉涌寺へ御詰被成、御留主番清水善之助様へ申上候処、念之入候儀御帰館之上可然様可仰上との御事ニ付、引取申候、

(裏表紙)

八拾八番

百艘

三、「万留帳」文化十一年（一八一四）

（表紙）

甲 文化十一年

万留帳

戌 正月吉日 八拾九番

（本文）

- 一、坂本町組治郎左衛門、大津町組孫右衛門、与治兵衛見習出勤、堅田町組三郎兵衛養子勇治郎手伝ニ出勤之事、
- 一、吾妻川浚見分之事、
- 一、海津木船ニ乗前積下し候事、
- 一、川七舟、治兵衛舟、吉三郎舟、紛失荷濟口之事、
- 一、北野町組助左衛門舟持立之事、
- 一、舟改帳七冊舟方岡田氏江催促之事、
- 一、御普請役せた川筋御通りニ付道筋書付差出し候事、
- 一、牧野氏舟方江御帰役挨拶之事、
- 一、白髪明神御開帳寄附之事、
- 一、京御組舟二而せた江御出之事、
- 一、せた橋掛替ニ付御配符并御役所ニ而被仰渡之事、
- 一、せた川渡舟諸入用櫓打御配符之事、
- 一、大坂御目附せた川筋御順見之事、
- 一、御所司代酒井讃岐守様御中下り御出迎之事、
- 一、堅田町組勘三郎年寄成御役所届之事、

- 一、小舟入上ノ仁右衛門舟矢橋を戻り品村之者櫓こけ疵付事、
- 一、百石町善通寺を墓所之古石大江村江舟積之事、
- 一、堅田彦右衛門舟今津、海津乗前荷積下り難舟之事、
- 一、京御役所を当仲間江御役所銀拜借いたし候様被仰付御断申上候事、
- 一、中保町を今堀川橋を下江竹垣申参り引合之事、
- 一、湖水常水を何程干水ニ相成候旨御役所を御尋之事、
- 一、尾花川次郎兵衛と申者彦根蔵江出入いたし候ニ付同蔵る同人所持之艀江家形を被遣候事、
- 一、八幡宿忠兵衛相撲興行ニ付心付遣し候事、
- 一、南保町糠屋八兵衛裏波留場石垣并米屋町裏竹垣之事、
- 一、寛政年中船改帳七冊御役所を戻り候挨拶之事、
- 一、坂本新兵衛艀ニて際川上之村々江尿積参り度願之事、
- 一、北出雲平殿子息見習出勤挨拶之事、
- 一、惣年寄小野宗九郎殿死去香典之事、
- 一、嶋之関ニて相撲いたし度地面かり受ニ参り候事、
- 一、野田源蔵相続人頼置之事、
- 一、矢橋舟旅人入水早速引上養生為致矢橋江連し帰り候事、
- 一、治郎左衛門舟三つ縄盗取候者相知れ表届之事、
- 一、針江幸左衛門小舟持立不相成返書并返答之事、
- 一、京西御奉行江戸御下り出迎見立之事、
- 一、八幡忠兵衛舟金蔵堀ニ而博奕いたし御目付より呼ニ参り候事、
- 一、木濱舟ニ幸津川ニて米積登り堅田にて一札取置候事、
- 一、御所司代酒井讃岐守様御登り出迎見立之事
- 一、せた橋掛り与力、同心衆江寒氣見舞之事、

正月二日、当所御礼

石原庄三郎様 金子貳百疋 目録台、下ケ札付

元々

柴山泰蔵様

〃

内堀繁太様

〃

篠田牧太郎様

町役

曾根源次郎様

〃

三好順之助様

舟方

岡田大八様

右六軒へ金子百疋つゝ

小頭

川嶋惣右衛門様

小頭兼帯御目附

手塚傳十郎様

御目附

柿沼小平太様

〃

佐久間又兵衛様

右銀壹両宛

北出雲平殿

小野宗九郎殿

遠藤仁右衛門殿

右銀壹両つゝ

当駅肝煎

同

吉本弥四郎殿

山本俵五郎殿

稲葉半七殿

小遣式人

〆五軒へ鳥目貳拾疋つゝ

御門吟助殿 五百文

同 内へ 貳百文

白崎久太夫様 御蔵番三軒

御門内新建、組屋敷不残、平蔵町年寄

貝屋七兵衛殿、当町内年寄

右不残手札二而相勤候事、

右之通七兵衛、三郎兵衛相勤、供清吉

三日、京都御礼

東御奉行

佐野肥後守様 金子三百疋

目録台
下ケ札

御用人

御取次

敷山儀助様

松原久蔵様

長嶋藤兵衛様

横井権十郎様

今中兵助様

水野啓次様

右七軒江白銀壹両宛

御公事方

御公事下

御池 山田釵次郎様

御池 櫛橋平蔵様

〃 石嶋五三郎様

〃 喜多尾八郎右衛門様

〃 塩津宗五郎様

〃 平尾演左衛門様

〃 加納萬五郎様

〃 中尾勇右衛門様

右四軒江金百疋宛

北筋 末吉新五郎様
森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

吉岡兵治様

右九軒江白銀壹兩宛

西御奉行

三橋飛驒守様

金子三百疋 目録台
下ケ札

御用人

御取次

武藤貫三様

小林与作様

辻元仁左衛門様

久保嘉十郎様

吉原直様

大竹半平様

浅村一郎様

右七軒江白銀壹兩宛

御公事方

御公事下

三 深谷平左衛門様

古 上田八蔵様

古 不破伊左衛門様

廣瀬左野右衛門様

本多新左衛門様

酒井宗助様

飯室助左衛門様

三 山田傳左衛門様

下田庄右衛門様

古 浅賀傳兵衛様

右五軒江金百疋宛

三 杉原作十郎様

三 真壁辰右衛門様

右七軒江白銀壹兩宛

町代

下町代

田内与助殿 白銀貳兩

藤沢傳六殿

筆工

奥田九右衛門殿 同壹兩

藤村左市殿

東西御門番 三百文宛

右兩人江 鳥目廿疋宛

上町代中江 五百文

下町代中江 五百文

東西中番中江 三百文宛

小番江 三百文

追分

山科

丸屋四郎兵衛 百文

大津屋孫兵衛百文

宿鍵屋左助 三百文

同下女中江 貳百文

金三兩三步 五百文貳

銀貳兩壹 三百文六

同壹兩三十壹 貳百文三

百文二

右之通相勤ル、勘三郎、定太郎、供多七、荷物利八

二日乃上京いたし、三日ニ相勤ル、

正月十一日、帳固メ

諸白貳升 尾花川船方

諸白貳升 下組小
船甚兵衛平六

鰻頭百 上組小船

同 貳升 関舟治兵衛

徳蔵

同 貳升 坂本新兵衛

右之通持参致候二付、上下小船、尾花川惣代、勝手二而酒出し候事、
新兵衛、治兵衛ハ勝手ノ手伝給仕いたし取持故、本膳出し候事、

十五日、芦浦御礼

一、観音寺様

昆布熨斗

扇子三本入壺箱
但し台二重くり

西川五郎兵衛様

久松清右衛門様

右式軒へ扇子壺箱つゝ

外二西川民弥様へ手札計遣ス、

右之通三郎兵衛、市兵衛相勤ル、供新八

一、白銀壺両

西川五郎兵衛様を被下候、

右者御渡海御挨拶として被下候事、

正月廿一日、例之通貴船御神酒、役人不残相祝ひ候事、

坂本町組 治郎左衛門 諸白式升

大津町組 孫右衛門

〃 与次兵衛

〃 〃

為見習と今日を出勤被致候二付、

右各々養子振舞料として金子百足つゝ被差出候事、

外二片田町組三郎兵衛忰勇次郎、今日を手伝として出候事、

酒式升持参、

右四人組合二而鯉式本被差出候事、

覚

一、百廿四銅 壺つ

一、四十八銅 壺つ

一、三十六銅 式つ

一、廿四銅 四つ

一、十二銅 十七

右之通奉納仕候、已上、

戌正月廿一日

貴布祢御社中

百艘印

正月二日、膳所船奉行

永田郷左衛門殿

外郎餅式棹、但し壺つゝ、硯ふた二のせ手札添

下役田原喜右衛門殿

同壺棹

阿閉権三郎殿手札計

是ハ在役中計

右之通六兵衛、忠兵衛兩人相勤候事、供清吉

正月四日、初寄合、諸帳面表勘定仕立

いつもの通り中飯、鏡披キ、鱈ノ焼もの、かき汁、酒

正月六日、四組帳書き、

同七日、惣番初積、水主とも惣出、尤例之通酒二豆腐ノ吸もの

一、正月廿日、吾妻川さらへ出来、見分として町役三好順之介様御組手

塚熊太様、丁代遠藤仁右衛門殿御越被成候二付、右場所へ年寄太郎

兵衛罷出、御見分無滞相濟候上、会所二而御休有之、茶、煙草計差

出ス、

但し此節雨天続二而仲間持場さらへ致無之候二付、急々さらへ候

様被仰聞候二付、翌日尾花川へ申付相掛り候事、尤賃錢三貫文

二月五日尾花川忠八へ渡ス、

正月廿五日

一、南鏡志片

舟屋三郎兵衛を持参、

右ハ三郎兵衛被立入候中保町棚倉より出火非常之節、蔵所裏へ舟廻し呉候様頼之儀二付、同人を取次二而差出候分、

一、炭 貳俵

右者朽木兵庫助様を例之通被下候事、

二月四日

但し升屋市左衛門殿を為持被遣候、

覚

一、炭 貳俵

右者朽木兵庫助様を被下置、慥受取申候、以上、

文化十一年戊二月

百艘年寄印

升屋市左衛門殿

一、海津浦木船二乗前荷物積下り候儀者、右浦方前々を之法度二有之処、当所冬分荷支之節、不日和二而入船無之節甚畏候儀折二有之、左様之節右木船参り合居候而も海津浦之古法ヲ守り不積受候故、客方之間二も如何敷、且ハ海津浦も不積通り二相成候而ハ、自然と浦々淋敷相成道理二而不宜事と存、依之海津舟年寄八兵衛年頭二被参候節、七兵衛掛合候処、跡を返事可致趣二而、二月二日同浦市兵衛、舟年寄を之手紙持参二而被登、委細承り候処、木船乗前積之儀ハ前々を之法度と相定有之処、今更難差免乍併訳而被仰候儀難默止、先当年之処ハ被仰之通承知仕、右無抛御手支之節ハ手紙御添積下し可被下、来年之処ハ当年々々年心見差支之筋も有之候ハ、御断申上度趣二相聞へ、差障りも無之候ハ、当年之通二御心得可被下様被申、

右差支之儀ハ右二順シ、猥成積方出来候而ハ浦方之古法二背候儀故、無抛申度存念と相聞へ候二付、此方二も容意二木船二為積申間敷、実々無抛手支之節ハ、手紙ヲ附積下し可申事、

舟盜賊又四郎濟口

去西九月三郎兵衛船能登川行紛失荷并川七兵衛船、治兵衛舟、三郎兵衛持吉三郎船二置物有之、右置物品々差上御訴申上置候所、右盗人ハ船頭長兵衛忰又四郎と申者二而、早速被捕牢舎いたし居申候処、同十一月十一日七兵衛、治兵衛代庄兵衛、三郎兵衛代勇次郎、付添年寄太郎兵衛并荷主代大坂屋六郎兵衛、付添わに屋藤左衛門牢屋敷へ御呼出し有之、掛り舟持三人と大坂六郎兵衛へ遠方留被仰付、其節荷主代大坂屋六郎兵衛を盜取申荷品被下置候様之願書上ケ有之候、当戊二月五日、右掛り之もの共御召出し有之、是迄仲間掛り二而有之処、此度ハ町内年寄、五人組付添罷出候様申来、此義ハ仲間へ可申来ノ処、大六殿も此度ハ町内二申来差掛り之事故、船頭町年寄勘三郎、五人組市兵衛付添、川七兵衛、治兵衛代庄兵衛、三郎兵衛罷出候処、又四郎外二盗人三人、又四人右掛り町数多二而大勢有之候事、殿様、御元々、御町役、小頭、御目附御立会二而、此度江戸表若君様御誕生二付、依之右盜賊四人中二ハ重罪人も有之候へ共、御仕置御赦免二而御門前払二相成、剩鳥目式百文ツ、右四人二被下之、御慈愍之御取扱、右二順シ惣掛り之者共も、此上過料御咎メ等も可有之所、何之不被及御沙汰二も相濟、尤三郎兵衛舟其節之船頭等も御糺も可有之所、是以何之御沙汰も無之、荷主北清水村善五郎義も、最初御召出しも可有之様承り候へ共、代人大坂屋六郎兵衛殿二而相濟、都而事軽ク穩便之御慶二有之候事、

右謝礼、左二記、

一、金貳百疋 手塚傳十郎様 一、銀三匁 矢嶋藤五郎殿

是ハ内々御伺ニ参り候儀度々有之故、一、〃三匁 遠藤仁右衛門殿

百疋つゝ式包ニ致し差上候、 右両人今日出勤ニ付、

一、〃 百疋 柿沼小平太様

一、〃 百疋 佐久間又兵衛様

一、銀 壹両 内堀繁太様

一、〃 壹両 曾根源次郎様

一、〃 壹両 三好順之助様

〆御三人ハ今日御立会ニ付、

右謝礼ハ中間方出し、六日ニ清治郎相廻り申候事、

一、北野町組市兵衛二艘持之所、助左衛門舟先達而仲間へ相断、同組太

郎兵衛方へ譲り被申、其後壹艘持ニ御座候所、此度次郎左衛門古船

二月九日被買受、同日帳切相済、則此古船助左衛門名前舟ニ被致候

ニ付、右暫中絶致有之候所、此度被持立候間、右之為挨拶と樽肴料

金百疋被差出候事、

二月十二日、是迄御船方岡田大八様、此度大坂詰ニ相成候趣承、先

達而方御出役被成今日御歸り被成、直様御引越之様承り候故、去酉

三月故与次兵衛内々御目ニ掛被置候舟改帳七冊、于今御下ケも不被

下大坂へ御越被成候而ハ、此上御催促申上候御方も無之候故、三郎

兵衛参り掛り御目、是迄御苦勞之趣、且又御引越之御挨拶旁々参候、

右帳面何卒御入用ニも無御座候ハ、御下ケ被成下候様御頼申上候

処、此義永々借り置候事ニ候へとも、わに北濱、中濱出入堅田庄兵

衛取喫ニ而一旦ハ納り候へとも、何とやら納り兼候様子ニ相見へ

候ニ付、右帳面ハ差而役ニ立と申事も無之候へ共、御役所所持之帳

面ニ致取扱之事ニ候へハ、右出入弥不致再発納り候へハ、随分差戻

し候積りニ有之、右ハ重々内堀掛り之事ニ候へハ、同人能承知之事

ニ有之、同人被申出候而も宜敷候へ共、跡役牧野被相勤候へハ、牧

野氏へ得と可申置、自然沙汰も無之候ハ、同人へ催促致し候様被仰

聞、其上不相分儀も有之候ハ、大坂表へ書面ニ而申越候へハ、此

方方掛合可申候様被仰候ニ付、乍憚牧野様へ得と御咄し被成置下候

様、押手相頼置歸り候事、

右之通被仰聞候事ニ候へハ、牧野様へ御尋申上、不相分候ハ、内堀

様へ申上候而も宜敷候事、

二月十九日、三好順之助様被仰候ハ、明廿日御普請役せた川筋宇治

御通拔被成候ニ付、道筋之義御尋ニ付、左之通書付御目ニ掛申候、

西

東

石山、平津へ式丁

平津、アカ川へ拾丁

アカ川ノ東、川向黒津供御之瀬、
此所渡し舟有之、

南郷

黒津、太子へ五丁計

畑村

関ノ津、さハのへ四丁計

獅々飛

さバの村、東村へ六丁計

淀村

東村、淀村へ五、六丁計

石山

淀村

石山方獅々飛へ壹里余

舟ハ関ノ津迄参候事、

一、二月十九日未ノ刻、御役所より御配賦壹通、山田舟年寄り参り候ニ

付、則魚ふね惣左衛門と申者ニ同刻相渡し申候事、

一、牧野九郎兵衛様舟方御帰役被成候二付、金子百疋為御肴料と二月廿三日持参、御挨拶申上候事、

二月廿一日、炭善へ為持遣入、

一、金子百疋 白髪明神開帳二付上ケ、

右者白髪社僧老人当所宿炭屋善助其外両三人頼二見へ、仲間内家別二八廻し不被申様致相对、右百疋寄附致し候事、

上巳御礼

石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

元々

柴山泰蔵様

〃

内堀繁太様

〃

篠田牧太郎様

町役

曾根源治郎様

〃

三好順之助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右八鳥目五十疋宛

右之外御門内御手代衆、新建同断、組屋敷不残、北出雲平殿、

右手札計

三郎兵衛、勘三郎、供清吉

大津 配賦 御役所

堅田浦 舟年寄

右御配賦壹通、三月十日堅田浦へ相届候様被仰付候、三月十二日四つ半時、柳町近利江新助為持遣入、白木之状箱二入遣入、

大津 差紙 御役所

八幡浦 舟年寄

右御差紙壹通、三月十三日八幡浦へ相届候様被仰付候、同所舟年寄喜十郎登り被居候二付、直二相渡し申候、

三月十三日夜子ノ刻、御役所より只今罷出候様申来り候二付、宿番忠兵衛参り候処、牧野様被仰候ハ、勢田橋及大破渡船用意可致旨、京都町奉行所より大津御役所へ達シ有之、則堅田浦今日登り候二付、十八日渡船用申渡し有之、罷出候様申付置并八幡浦へも差紙遣し候、然る所今夕俄二京都より申参り、近々紀州様御通り二付、早々艀之手当申渡度、急差紙壹通相届候様被仰付候、

大津 差紙 御役所

堅田浦 舟年寄

右八尾花川善四郎、治兵衛仕立飛脚賃銭七百文、添状いたし先取申遣し候、右兩人十四日早天帰り申候、

一、御用急ぎ御差紙壹通、牧野九郎兵衛様方せた橋本村船年寄迄遣し候様申参り、直二四廻り多七遣入、賃銭貳百文申遣入、三月十七日酉

上刻当所舟大工源助御用之義有之候二付、明十八日正五つ時御役所
江罷出候様、当会所_を通達いたし候様申参候二付、源助呼二遣し候所、
留主二而悴参り候故、右之義申通し置候、

一、三月十九日、山田あみ方_を平鮒壹枚、ハチヤウ壹枚、_ハ式枚到来、

三月廿三日

一、御役所_を御配符壹通

但し本堅田浦始、

右者同日堅田浦船年寄庄兵衛江相渡ス、

同

一、右同断 壹通

但し下笠村始り、

右者同日同村魚船忠兵衛江渡ス、

三月廿三日

一、御役所_を御廻状壹通

但し平津村始り、

右者同村柴船 半兵衛 三郎右衛門 へ相渡ス、

三月廿六日

一、鮒 七枚

せた舟年寄治郎兵衛持参、
例年ウグヒ参り候へ共、当年ハ鮒持参被致候事、

大津

配賦 御役所

大津浦始

勢多橋破損二付近日船渡始候積二付、申渡義有之間、庄屋、船年寄

之内耆人宛印判持参、明後廿八日午刻可罷出候、遅滞致間敷候、此
廻状令請印、早々順達、留り_を可相返候、以上、

大津

三月廿六日 御役所印

大津、鳥居川、寺辺、平津、千町、南郷、五ヶ浦、関津、太支、
黒津、里村、橋本、神領、大江、大萱新濱、大萱新田

右庄屋、船年寄

三月廿六日午刻請印いたし、即刻鳥居川へ廻ス、石山岩蔵二遣ス、

三月廿九日、京御組様^{せた}矢橋へ御越被成候二付、舟用意致置候様宿方
_を申来、

御与力

入江吉兵衛様

山田庄^{之助様}左衛門様

右当関_を御乗船被成候事、

下小船新八

苦ブキ 加子三丁

大和風呂、土ひん入、

三月廿九日午上刻

大津

一、差紙 御役所

龍門始
富川

富川、淀村、中村、東村、龍門

右_を思敷飛脚無之故、廻り太七二同刻二為持遣ス、尤賃錢之義ハ先
取二致し四百文也、請取候事、

廿六日二出候御配賦之通、廿八日御役所へ七兵衛罷出候処、牧野様被仰候者、廿九日朝罷出候様被仰付、早朝罷出候処、暫門前二扣居候様被仰聞、未ノ下刻御呼出シ有之、大津始大萱新田迄不殘罷出候、尤御前二御元メ内堀繁太様、御船方牧野九郎兵衛様、北出氏御立合二而殿様直々被仰渡候趣者、此度勢田橋破損二付近日方船渡し申付候、右渡舟中御大明方^名大人数之大通り御通行之節、八ヶ浦方差出し候渡舟二而不足致候ハ、其浦々方早速舟差出し、船役人付添差支無之様取計可致、尤左様之節ハ前以申渡候へとも、自然差掛り急用之節者、八ヶ浦方可申達候間、無異義船可差出、尚又御大明方自分雇等有之候ハ、無遅滞可差出候、右申渡し之趣一統へ証文申付ルと被為仰付、奥へ御入被成、跡二而一統受印致引取申候事、

四月朔日

急ギ御廻状 吉通 鳥居川 始

右急々相達し候様被仰、添状致賃銭式百文申遣ス、
廻り清吉遣ス、

四月朔日、山王御神事御廻状、左之通、

一、御配符 吉通 大津百艘

但し御文言例年之通二付略之、船持中

覚

一、船数七艘

是者日吉御神事之節御馬船

右之船来廿三日

日吉御神事二付、如例年可差出候、尤服忌差合之者相改可申候、此

配符令請印早々順達、留り方可相返候者也、

戌四月朔日

石庄三郎御印

山田浦

矢橋浦

舟持

同日申下刻

右元浜平次遣ス、

神輿船御廻状ハ、此節瀬田橋大破二付渡船始り候二付、八ヶ浦登り居候故、直二御渡し被成候事、

坂本始御配賦吉通

右御文言、去ル酉年二留有之候通之儀二付略之、

申下刻北山田元浜平次遣ス、
二日若宮喜助遣ス、供新助

矢橋始御配賦、右同断、

矢橋、南山田、山田、下笠、^{駒井庄}大萱、穴村、志那、吉田、中村、

津田へ、下寺、下物、山賀、森河原、杉江、赤ノ井、矢嶋、大曲、

開發、木濱、今濱、水保、戸田、五条、幸津川、小濱、吉川、

堤村、安治、須原、野田、比留田、野村、小田、江頭、田中

へ、かも、牧村、大房、長命寺門前、南津田、船木、八幡舟木、

八幡町

右浦々庄屋、船年寄

東浦之分ハ去酉年留メ無之故写し置候、

右即刻小舟入江廻らせ即持せ遣候、

勢多川渡船諸入用銀差支候付、櫓吉挺二錢四百文つゝ、当月廿日限取集度旨八ヶ浦申出、入用払方遂吟味候処、相違無之相見へ候間、右錢日限通無遅滞浦限持参、大津橋本町古望仁兵衛方へ相渡、受取書

御役所へ可差出候、尤先達而櫓打銭触出後、船数、櫓数増減有之浦々并貸船屋共其訳書付可差出候、尤此配符令請印早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

四月六日 御役所御印

下笠、下物、山賀、森河原、杉江、赤ノ井、矢嶋、大曲、木濱、幸津川、小濱、吉川、野田、須原、八幡、舟木、常楽寺、豊浦、

右浦々庄屋

舟年寄

四月七日七つ時

下笠北出庄左衛門忰庄四郎江渡、

御文言右同断、老通

本片田、同所貸船屋、西ノ切、釣獵師、今堅田貸船屋、わに南濱、北濱、五ヶ浦、南比良、北比良、南小松、北小松、大溝、永田、舟木南濱、横江濱、北濱、藁園、深溝、同所貸船屋、針江、木津、今津、領家、知内、貫川、西濱、海津、菅浦、大浦、月出両組、塩津、片山、東尾上、同所貸船屋、延勝寺、安養寺、早崎、八木濱、南濱、

右浦々

庄屋

舟年寄

四月八日巳上刻、堅田舟年寄庄兵衛へ相渡入、

右櫓打御廻状下笠始老箱、本堅田始老箱、此方相達呉候様今津持参被致候故、写置、

四月八日ニ参り申候、

例年之通沖之嶋より鱒三本到来致候、

但し貝屋半六へ預ケ、代六匁也、

大津

差紙 御役所

江州滋賀郡

南小松村

右御差紙老通、四月十日未ノ刻過南小松へ明日中ニ相届候様被仰付候、十一日早天和泉町佐介を仕立、添書二百文貸せん先取申遣入、

大津

配賦 御役所

山田浦 四月十二日未ノ刻、山た茂兵衛

と申者へ相渡入、

右御配賦老通、四月十一日午ノ刻船便りニ相届ケ候様被仰付候、

四月十八日

大坂御目附代

横田玄太郎様

稲葉大膳様

扇屋関御出迎、七兵衛、三郎兵衛、供清吉

右者瀬田川筋御願見与して御越被遊、当御役所へ御立寄被成、例之通膳所へ御馳走船来り、当所へ御供舟三艘差出し、外ニ用意船一艘、風呂屋関ニ繋置、

上組惣代 仁右衛門

下組同 甚兵衛

来り候事、

四月廿一日、山田浦より諸白式升到来致候、

是八山王御神事御廻状、山田、矢橋之分、山田へ先二廻し、各々様
彼方勝手二も相成候趣二而、兼而山田頼二付其通二毎年取計遣し候
故被差越候、

戊四月廿五日巳中刻持参、同日未刻木濱魚舟仁兵衛へ相渡ス、則翌
日請取書、符箱相戻り申候、

大津

差紙 御役所

野洲郡

木濱村

端午御礼

石原庄三郎様

青銅百疋、木札付

御元々

柴山泰蔵様

〃

内堀繁太様

〃

篠田牧太郎様

町役

曾根源次郎様

〃

三好順之助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右者青銅五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、新建、組屋敷不残、北出雲平殿、手札計二
而相勤候、

七兵衛、三郎兵衛、供新助

五月六日、林新五兵衛様を御茶壺御廻状式箱御渡し被成、

但し、今濱始壺通、野村始壺通、

賃銭三百五十文 賃銭四百五十文

右飛脚利八二添状附、九つ時を参候事、

一、五月九日、從御役所御配符入之御状箱壺、江頭江急々差遣し候様申
参り、即刻■飛脚利八雇、賃銭八百文渡し候様添状いたし、庄屋宛
二して遣ス、申中刻御茶壺御用脚之義、

五月九日

京御所司代

酒井讚岐守様江戸御下り

追分迄御出迎、七兵衛、三郎兵衛、供新助

差紙 御役所 壺通

北山田浦

右御差紙壺通、五月十九日午ノ刻過持参、今日中二相届ケ候様二被
仰付候、同日未上刻新八を仕立遣し、賃銭式百文先取二申遣ス、
差紙 御役所 壺通 野洲郡

木濱村

同日同刻二持参、尤未ノ下刻二、木濱ノ急舟甚六へ相渡ス、

竟

一、百貳拾四銅 壺つ

壺つ

一、三拾六銅 壺つ

壺つ

一、四拾八銅 壺つ

壺つ

一、貳拾四銅 五つ

五つ

一、十二銅 十六

外二銀壺封、荷問屋中間^二たのミ^三、取次遣入、

但し銀壺匆くらい

右之通奉納仕候、已上、

戌五月廿一日

百艘印

貴布祢御社中

例之通五月廿一日神酒有之、無滞相勤申候事、并堅田町組勘三郎義年寄役相なられ候事、盃相濟候、尤三種肴有之、右勘三郎方祝義として諸白式升切手、鯉節甘本差被出候事、

但し酒ノ切手ハ中間へ入、鯉節ハ役人不残配らせ、四廻りへも遣し候事、

右之通年寄成り相きまり候二付、引続御役所へ御届ケ申上候処、此節ハ勢田渡船中舟方御懸り毎度勢田へ御出役被成候間見合せ、廿八日届書持参いたし、御役所二而牧野様へ差出し候処、御受取被成奥へ御入被成候上、御聞濟之趣被仰渡候、

五月廿一日午ノ刻到来

一、御配符壺通 下笠始 廿一日下笠村礮八と申者へ、未ノ刻二相渡ス、

同断

一、同 壺通 本堅田始 廿二日卯ノ上刻二、片田介市船二相渡ス、

乍恐口上書

一、先達而御届奉申上候百艘仲間年寄役之内、与次兵衛死去仕候二付、右跡役此度勘三郎為相勤申度候間、乍恐此段御聞濟被成下候様奉願上候、願之通被仰付被下候ハ、一同難有可奉存候、以上、

文化十一年

戌五月廿八日

百艘年寄

太郎兵衛

同

七兵衛

同

三郎兵衛

大津

御役所

五月十四日、^上下ノ仁右衛門舟矢橋^下之戻り船二、品村駒井新五右衛門殿、同義藏殿、同善右衛門殿、右之衆中乗せ戻り候処、小舟入先二而ホクソユルミ柱こけ、右義藏と申人之天窓へ当り余程疵付、衣類等も血二染り、依之船主仁右衛門、柳屋治兵衛度々御断ニ参り候処、大躰聞入有之候へ共、主人持ノ義故、何故ケ様之疵致し候哉と御尋有之時ハ、ケ様之義二付而と申証拠ニ書付致し候様被申候故、治兵衛承知仕候趣申来り候様申聞候へとも、矢橋^下被頼乗せ戻り候様加子共申聞、尤戻り船二乗せ戻り候義者不相成、無抛乗せ戻り候節ハ、矢橋^下手紙付被遣候筈二候処、無其義候へとも、全隠し乗せ候義共不被存、実二被頼乗せ戻り候儀二候へハ、書付等之義ハ矢橋へも掛合候上ならでハ難致義二候、治兵衛申候ハ加子共計之書付二致し候様申候へとも、後日差支無之書付二候ハ、苦しかるまじく候へとも、書付之義ハ何れ差支ニ可相成義故、断申候様申聞候処、とふやらこふやら書付なしニ相濟申候、乍併右衆中ハ何れも懇意之衆中二而、無難ニ相濟候へ共、外ノ人ならハ六ヶ敷可相成、甚以面倒成事故、翌十五日矢橋浦へ、已来戻り舟二為乗不被遣候様、勿論隠し乗せ等之義も御吟味被下候様、以書状申遣し置候処、十六日矢橋与

三兵衛被參、無拋被頼候故、尤源兵衛親類之衆故、舟之相對二而乗船被致候様申候義二付、甚以御氣之毒二存、加子長次郎、新蔵義も舟稼御差留二相成有之由承、何卒早々為御濟被遣被下候様頼被帰候、其後柳屋治兵衛小舟入会所へ加子共之儀御用捨被下候様頼二来り候へ共、右新蔵義ハ先達而も右躰之義有之、先其節モソツト見合相濟し可遣事、其後追々断り参り、新蔵義ハ其日持之か子故為相濟遣し候、長二郎義ハ舟主并年も相応ニより候故、暫ク其分ニ而差留有之候、柳屋次兵衛方段々断申候、其上惣代方方差つ兩人共江差留メ置候故、此度ハ其分ニ而為相濟候、六月十日小舟入詰清次郎方相濟候趣被申聞候様通達いたし置、

当所下百石町善通寺方墓所石塔之古石ヲ大江村へ舟積之掛り物之義、先達而菱屋伊兵衛殿ヲ以尋合有之、其後者何之沙汰も無之候処、

五月廿一日、右ノ石松本へ持出し、湖東大江村方體乘来り、大勢運ひ居候趣相聞へ、石場会所へも相届ケ菱屋伊兵衛殿先達而右之義二付被參候、尤檀中之事故呼二遣し尋合候処、先達而咄し被致御渡者何共不被申、一向左様之儀存不申趣被申聞候二付、松本浜へ荷物持越し舟積之儀ハ前々御法度之義、尤舟積之訳合委細菱伊殿を以善通寺へ掛合候処、右之石ハ大江村西徳寺と申寺へ被遣候石ニ而、当浦方除り乗前余慶相掛り候趣、西徳寺へ咄し合有之処、石場石工小松屋久助と申者、西徳寺前々心安ク仁二付、右之咄し合有之処、久助申候ハ私方へ御出し被成候へハ、随分下直ニ而舟積出来申私御世話可仕間、此方へ御出し被成候様申二付、両寺ハ何之心得も無之、久助申ニ随ひ被取計候儀と被存候、右二付大江村人足之内勘助、弥左衛門兩人段々不調法之段、私共者何之訳合も不存、委細承驚入、

何分御用捨被下候様、兩人之者引受断ニ而為相濟度申候へ共、善通寺ハ積出し之儀二有之候へとも、出家之儀石場久助持越荷引受候段一向不相濟、御訴可申上之処、久助も来り、大江村之兩人段々断申、何卒内分ニて為相濟呉候様、已来急度心得違仕間敷趣段々断申二付、此度之義舟ハ積入候と申ニ而も無之、松本迄運ひ出し候迄ニ而、右段々断申二付、左ノ一札取之、内分為相濟候事、石場舟年寄方へ清次郎参り、此間御届ケ申置候儀段々断申候二付、此度之儀内分ニ而為相濟遣し申候、已来加様之儀御氣ヲ被付出来有之様、何れもへ御通達被下候様申入候処、委細承知之趣被申候事、

一札

一、当五月廿一日、当所善通寺方湖東大江村西徳寺行之石類計松本浜へ持出し、小松屋久助引受ニ而船積可仕与存候処、各々方御見咎メ被成、松本浜へ持出し船積仕候儀者、前々御停止ニ御座候処私共一向不案内之儀二付、無何心右躰不埒仕、御察当被仰聞、御訴も可被成様被仰聞驚入、依之不調法之段色々御断申上候処、此度之儀者格別之御勘弁を以内分ニ而御為濟被下、千万忝奉存候、然ル上者此已後松本浜へ持出し、舟積之儀者急度仕間敷候、為後日仍而如件

文化十一年

松本村小松屋久助印

戊五月廿三日

下百石町善通寺代

菱屋伊兵衛印

栗太郡大江村西徳寺代

同村 勘助爪印

〃 弥左衛門爪印

大津百艘

御年寄中

此一札松本村一件之引出し二入置、

右之石者石場へ出し候、廿計之石ハ大江村之船ニ当所へ乗前差出し、松本ニ而為積呉候様、菱屋仁兵衛殿ニ相頼、此方へハ乗前受取、石場ニ而舟積之義ハ内分ニ相心得置呉候様同人被頼候、残り之石者当浦舟積ニ相成候事、
惣石数大小四拾

此才数メ三拾式才五分三リ、此駄三十式駄五歩三リ也、

代十九匁五分式リ、

五月廿六日、片田藤右衛門船当所今津、海津行乗前荷積下り、海津手前ニ而難船いたし荷物濡候様ニ承り、当会所へ片田之者共申来り候故、早東左之通之書状遣し置、

以手紙得御意候、向暑難凌御座候処、弥御安康被成御座奉珍賀候、然者去ル廿六日其御浦方藤右衛門舟、当所今津、海津行荷物積受下り、海津辺ニ而難船致し候趣為御知被下、御浦方何角と御心配之段遠察仕候、何卒早々品能相濟候ハ、大慶奉存候、先者右早東御見舞旁々、以書中如斯御座候、以上、

五月晦日

大津百艘年寄

堅田浦

御舟年寄中

一、四月廿日、神泉苑町宿鍵屋左助方当会所江書状参り候、御公事方御用有之、私方御引合申上候様被仰聞候故、御吉人登り鍵左方江参り候様申越候二付、三郎兵衛罷登り鍵屋ニ而承り候処、此度御調方同心衆之内中川定右衛門様被仰聞候二ハ、御役所銀を当仲間江拝借可致旨被仰聞候、尤外ニかたき仲間江も此度追々被仰聞候由二付、此趣鍵屋を以相尋候旨被仰聞候二付、御通達いたし候様申候

二付、一応断可申候、猶又罷歸り仲間方江も申聞、其上御答も可申上旨にて引取相談いたし候処、銀子拝借いたし候義ハ、仲間持かたニ不宜候二付、何分断可申由故、又々上京いたし鍵左江断申上被呉候様申聞候処、其趣可申上候へ共、此後外御役人方又々被仰聞候節、御断被仰候ハねハ、此度計之御断ニ相成候てハ、私之不働ニ相成候間、此段得と御心得置被下候様、猶又中川様江直ニ御出御断可被仰上旨、鍵左方申聞候故、夕かた中川御宅江三郎兵衛罷出候処、御廻りニ御出御留主故、又々翌朝罷出候処、早朝方御他行二付委細鍵左方断可申上旨ニ而引取候処、其後当所町代遠藤氏上京ニ而御役所江被出候処、此節百艘罷登り候へハ、東御役所部家迄罷出、公事下櫛橋平藏様方御用向有之候者、御言伝有之候旨、京都る遠藤氏当仲間江書状被差越候二付、幸ひ六月六日暑中御伺二七兵衛、勘三郎兩人罷登り候二付、同日東町代部家江罷出、京都町代奥田左兵衛殿被居合候二付、櫛橋様江罷登り候趣被仰上被下候様ニ申候処、早速其趣被申上候処、又々櫛橋様方御役所銀当仲間入用有之候へハ、拝借可致旨被仰聞候二付、即答ニ申上候ハ、此義ハ先達而中川定右衛門様方鍵左ヲ以段々被仰聞候へ共、御断申居り候義ニ御座候、元来百艘仲間之義ハ、前々方諸荷物等も大に減少いたし、纔之運賃ヲ取、誠ニ職人同様之義ニて、商人抔トハ金銀之取引も不致事故、拝借いたし候而ハ甚銘々為方ニ相成不申事故、此段被為聞召分御免被成下候様偏奉願上候様、町代奥田ヲ以断申候処、左様之義ニ候へハ聞濟置候様被仰聞、乍然役所ニ^{かり}請度筋合ハ無之哉、此度ハ公事方申聞候義と申事ニ候へ共、いつれ之御役所と申望ハ毛頭無之義ニ御座候、何分拝借之義ハ御断申上度旨申上候処、左様之義ニ候へハ宜敷趣、猶又^櫛橋様御宅江御出被成、直々御断可被仰上旨奥田氏被申部家方引取、御役所御引取之上櫛橋様江罷出掛御目、前段之趣ヲ以

御断申上候処、随分断之趣承知いたし候、其仲間二入用筋有之間敷哉と存、町代ヲ以相尋候事^迄二候、又々此末拝借等いたし度義有之節ハ可申出趣被仰聞候而、相済申候、右二付金子百疋肴料といたし相包持参いたし差出し候へ共、例式之外一切受申間敷旨二而、達而御断被仰候、右二付品ヲかへ候而差出し候而も遠方断二困り入候間、決而か様之心配ハ達而御断二付、無扱持帰り、重而何卒もやうヲかへ、何成共可遣、いつれ八朔ニ又々罷出候事故、其節之取計ニ可致と存、其儘帰り候、其続きに中川定右衛門様江も兩人罷出掛御目、前段之通り拝借御断之義申上候処、是も品よく御聞済有之候二付、金子百疋相包、肴料といたし差出し候処、一応ハ御断二候へ共、是ハ相納り候而、万々此度ハ相済申候、此度鍵屋二而申居り候ハ、中川様江先頃ハ御断之趣申上候処、左様之義二而ハ此後いづれ之口方又々拝借いたし度節申出候とも、此方ハ邪魔いたし拝借不為致様被仰候旨、鍵屋申居り候二付、此度参り候而もむつケ敷哉と存罷出候処、此方断之筋至極御聞入能、此末又々拝借もいたし度候節ハ、何時二而も可申出旨被仰聞候、万事相済候、拝借筋之義ハ仲間為方二相成不申断申候処、此度ハ品能断相立悦申候、

御目附 御組 公事下 同 榎橋平蔵様
 諸調方 中川定右衛門様
 中風二 御公事方 隱居なり 同 本多新左衛門様
 而隱居 不破伊左衛門様 不印之由
 右御兩人代り役、砂川金左衛門様、真野八郎兵衛様

六月七日、京都暑中御窺

東
 佐野肥後守様 金子貳百疋 二重操台 下ケ札
 御用人 御取次 松原久蔵様
 敷山儀助様

長嶋藤兵衛様 横井権十郎様
 今中兵助様 水野啓次様
 小林丹治様

〆七軒江手札計

御公事方 御公事下
 御池 山田釵治郎様 榎橋平蔵様
 " 石嶋五三郎様 " 喜多尾八郎右衛門様
 " 塩津惣五郎様 " 平尾演左衛門様
 " 加納萬五郎様 " 中尾勇右衛門様
 (ママ) 〆五軒江銀壹兩宛 " 森孫六様
 " 吉竹勝左衛門様
 " 田村此右衛門様
 " 森善右衛門様
 " 大嶋荒次郎様
 〆九軒江手札計

西

三橋飛驒守様 金子貳百疋 二重操台 下ケ札
 御用人 御取次
 武藤貫三様 小林与作様
 辻元仁左衛門様 久保嘉十郎様
 吉原直様 浅村一郎様

〆六軒江手札計

御公事方 御公事下
 三 深谷平左衛門様 古 上田八蔵様
 古 飯室助左衛門様 " 廣瀬左野右衛門様
 " 下田庄右衛門様 " 酒井宗助様
 古 砂川金左衛門様 三 山田傳左衛門様

三 真野八郎兵衛様

古 浅賀傳兵衛様

〆五軒江銀壺両宛

三 杉原作十郎様

三 真壁辰右衛門様

〆七軒江手札計

町代

田内与助殿江、銀三匁

若狭屋八兵衛殿江、能川葛壺箱代式百廿文

舟頭町いせ右二而買入、

〆金壺両、銀壺両九つ、銀三匁

右之通七日朝七兵衛、勘三郎兩人相勤ル、供清吉計

外二金子百疋宛、砂川金左衛門様、公事方被仰付候二付、御祝義

真野八郎兵衛様、暑中見舞之節一所二相勤ル、

六月九日、当所暑中御窺

石原庄三郎様 素麵三拾把 二重操居台下ケ札

御元

柴山泰蔵様

同

内堀繁太様

町役

篠田牧太郎様

町役

曾根源次郎様

//

三好順之助様

船方

牧野九郎兵衛様

右八素麵式拾把宛

小頭

川嶋惣右衛門様

同御目付兼帯

手塚傳十郎様

御目付

柿沼小平太様

同

佐久間又兵衛様

右八素麵拾五把宛

右之外御門内御手代衆、組屋敷、新建不残、北出氏共、手札計二而

相勤候事、四十枚計入、

三郎兵衛、勘三郎相勤ル、供清吉

六月十四日、御役所方御配賦式通御渡し被成、則御文言左二相記ス、

例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日十日迄可致持參候、

一、右帳面之内浦方二寄貸舟致混乱候間、借り主并貸舟屋とも入念相改、

船毎貸借符合いたし候様可書出候、

右之趣得其意、此配符致請印無遅滞早々順達、留り所方可相返候、以上、

御印(割印影写) 戌六月十五日 御役所御印

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、本堅田船

方、西之切、釣漁師、今堅田、小野、南濱(和通)、北濱、五ヶ浦

南ひら、北比良、南小松、北小松、打下、大溝、同體方、永田

下小川、今在家、藤へ、横へ、南濱(舟木)、同横へ濱、同北濱、南

古賀、新庄、太田、藁藪、深溝、針へ、森村、馬原、木津、今津

新保、領家、北仰、貫川、桂村、深清水、大沼、中庄、北新保、

知内、西濱、海津、大浦、菅浦、月出両組、岩熊、塩津、片山、石川、東尾上、延勝寺、海老江、安養寺、早崎、下八木、大濱、南濱、川道

六月十五日坂本ノ与兵衛と申者へ相渡ス、右浦々

庄屋

船年寄

同御文言ニ而壹通、松本三ヶ所始

松本三ヶ所、鳥居川、寺辺、平津、千町、南郷、大石郷五ヶ村、関津、太支、黒津、橋本、神領、大江、大萱新田、大萱、新濱、矢橋、南山田、山田、下笠、駒井庄大萱、穴村、志那、吉た、中村、津田江、下寺、下物、山か、森河原、杉へ、赤ノ井、矢嶋、大曲、發発、木濱、今濱、水保、戸田、五条、幸津川、小濱、よし川、堤村、安治、須原、野田、比るた、のむら、小た、江頭、田中へ、加茂、牧村、大房、長命寺門前、南つた、舟木、八幡舟木、八幡丁、多賀、北ノ庄、浅小井、香ノ庄、常樂寺丸、舟方、同艦方、豊浦、伊庭、右浦々

庄屋

舟年寄

六月十五日、使多七ニ持せ遣ス、

六月十四日 御役所ノ御書付壹通

御書付御役所 勢田渡舟場ニ而

堅田浦始

右同日即刻飛脚として廻り新介ニ持せ遣ス、

差紙 御役所 壹通

大萱新濱

右者差紙壹通、六月十七日亥刻持参、今夜中ニ相届ケ候様ニ被仰付候、同夜亥刻過利八を仕立遣候、賃錢四百文、先取遣申候事、

口演

一、貸船増減相改帳面ニ記、来七月朔日ノ十日迄ニ上納可被致候、尤帳面之内浦方ニより貸舟混乱致候間、借り主并貸船屋とも入念相改、船毎ニ貸借符合いたし候様ニ可被書出候、此廻状早々順達、留り所ノ御返し可被成候、已上、

戌六月

百艘印

仁右衛門、仁左衛門、甚吉、六兵衛、清助、源七、五郎八、善兵へ、源六、源助、

此廻状廿日ニ為持遣ス、

一、六月八日、中保町年寄不快ニ付五人組灰屋長右衛門当会所江見江被申入候ニ付、今堀川橋ノ下之処ごもく捨土溜り、非人病人躰之もの参り、用人不宜候故、今度今堀橋詰ノ町木戸迄之処、竹之垣いたし塵芥并非人等下り不申様ニいたし度、尤塵芥捨不申候御製札も相立申度御役所江御願申上候処、百艘方江も答置候様部屋ニ而呼有之候故、此段御差支江も無御座哉、御尋申候様被申参、相談之上当時差支之筋ハ無之候へ共、末々ニ到万一差支之筋有之節ハ、右之垣取払可申一札差入差候様、町内年寄稲扱屋左衛門江引合候処、委細承知之上右之一札取置、無程北保町年寄黒津屋清吉当会所江被参、加賀蔵石垣ノ橋詰迄北かわ之処竹垣いたし、加賀蔵東之浜江下ル道筋ニ、右橋詰ノ之垣ならびニ竹之簀戸いたし、昼之間ハ明ケ置、夜分メ切其趣加賀蔵江も申上置、荷物、人乗り揚り共、右道筋ノ是迄通り往来いたし候義、御蔵ニも御承知ニ有之候旨被申参候ニ付、是も北保

町より一札取置申候、是迄前々右御蔵東かわより乗り揚りいたし
来り候へ共、此度兩町を橋詰迄垣出来候へハ、加賀蔵東之道筋を荷
物、旅人共揚り乗り目二立、新規之様二御蔵ニも被思召、未々間違
等出来候事も難計、近日ニハ辛崎見たらし参り之節、小舟入方も右
場所方旅人乗候砌ニも、万々一口論等出来候砌、元来御蔵地面之内
故彼は御蔵を被仰出候而ハ面倒之事故、仲間方も三郎兵衛ヲ以加賀
御蔵之御役人田中市蔵殿江乍内分罷出、右道筋方旅人荷物等積揚之
義兼而御断申置候处、御承知之趣ニ被仰聞候、猶又北保町年寄清吉
江茂右之趣仲間を掛合置候处、町分方も旅人等乗舟之砌口論等気ヲ
付可申、往来等之義、御蔵江も町分を兼而御断申上置候様ニ被申居候、
右兩町垣之義ニ付、仲間方御役所部家迄罷出、百艘方方も右垣之届
可申上哉と伺ニ出候处、丁代堀猪三郎殿奥江伺被呉候处、百艘方も
表向申出候而ハ何角相糺[■][■]面倒之事故、此度之義ハふくみいた
し可置候間、百艘方方別段申出候ニハ不及申、猶仲間方も町内江引
合置、丁内を書付可為致哉と堀氏を被申聞候ニ付、此度ハ仲間を表
向御役所江御届不申上候、兩町一札式通ハ空地一件之引出し、当用
之袋入置候、右ニ付堀氏江南鑱[■]片肴料として六月廿日挨拶遣入、

六月廿四日未下刻、御役所を御配符式箱相届候様被仰付候、

但し、下笠始メ 壹箱 同日下笠并ノ元嘉兵衛へ遣入、

本堅田始メ 壹箱 廿五日堅田飛脚船藤七ニ遣入、

六月廿三日、暑中見舞として例年之通、三井寺よりそうめん廿把到
来いたし候、

六月廿七日、舟方御手代牧野様を、此節湖水常水よりハ何程之落水

干水ニ候哉与御尋被成候ニ付、しかと致候儀ハ当所ニ^定杭無御座候
故難申上、落子水之儀ハ此節勢田渡船ニ八ヶ浦相詰罷在候間、年寄
共ニ御尋可被成、左之通申上置候、

御尋ニ付口上之覚、

一、当時湖水常水よりハ何程干水ニ候哉与御尋被遊、此節ニ而ハ常水方
凡壹尺余之渴水ニ御座候間、此段御尋ニ付奉申上候、以上、

文化十一年

百艘印

戌六月廿七日

牧野九郎兵衛様

七月朔日

御役所方木濱村へ御書付壹封、今日中ニ相達し候様申参候ニ付、幸
ひ同村年寄九郎兵衛被登居、即刻相渡し候事、

尾花川町治郎兵衛、当所彦根御蔵へ前々を致出入、御扶持等も囉^{ぐさ}居
候由承り候、右御蔵を治郎兵衛艦ニ而網打等ニ是迄度々御出被成候
处、此度艦ノ館御拵被成、治郎兵衛へ方へ御渡し被成置、已来打網等
ニ御越被成候時御用ひ被成候積りニ付、右躰之儀不宜事ニ候へ共、
御蔵ニも折角御拵被成候義為止候も氣之毒成物故、相談之上右御蔵
所之外、外々へ一切貸不申様之一札取之聞濟置候事、
此一札津内諸証文入之引出しへ入置、

七月五日

七夕御礼

石原庄三郎様

青銅百疋、木札付

御元々

柴山泰蔵様

内堀繁太様

篠田牧太郎様

町役

曾根源治郎様

三好順之助様

船方

牧野九郎兵衛様

右鳥目五拾疋宛

右之外御門内御手代衆、組屋敷、新建御手代衆不殘、手札計二而勤ル、船方下役北出雲平殿江も手ふた計、

七兵衛、勘三郎相勤ル、供新八郎

八まん大津屋忠兵衛、此度於彼地すもふ興行致候趣二而、当所相撲取乗船致歸り候義断ニ参り候趣二而、外之頼筋ハ無之候へ共、船頭仲間も少し遣し候趣、且又荷問屋仲間も相頼候趣承り、当会所へハ致遠慮不申事与相見へ候へ共、相談之上金子貳百疋ニ書状相添、廻り新八八幡へ行候次手ニ為持遣候事、

七月十日

七月十九日

御役所御書付彙通

右ハ勢田二而八ヶ浦江今日中二届ケ申候様ニ被仰付候間、則午ノ下刻新八を以為持遣し申候、尤賃銭貳百文先取ニ而申遣し候、

七月廿六日巳ノ下刻

御役所ハ勢田渡舟場詰八ヶ浦へ書付彙通、相届候様被仰付、即刻石場へ持せ遣し、せた宿彦助方ニ而せた艦へ髓ニ相渡し候事、使廻り新八、

南保町糠屋八郎兵衛、太郎兵衛方へ参り候而被申候ハ、私居宅裏湖水端波留場下地石垣並ニ今式間通先へ築出し申度候間、百艘中間承知致呉候様相頼被申候へ共、新規之儀ハ差凶難致断申候処、糠八被申候ハ、右式間通り築出し置候へハ、渴水之節船積陸揚ケ等至極勝手筋ニ相成候由、訳而被相頼候へ共、百艘より拒ミ候儀ニ而ハ無御座都而湖水端新規之儀出来不致様相示候古格ニ御座候訳故、御断申入候、乍併是非其御積り之思召ニ候ハ、御役所へ被願立、表向キ可然申入候処無其儀、然ハ石垣損し計直し置度被申候ニ付、六月廿五日太郎兵衛、七兵衛見ニ参り、新規異頼之儀ハ致され間敷申来、糠八ハ一札取置候事、但し空地一件当用袋ニ入有之候、

六月差入、米屋町五人組川村屋庄七被来、此節渴水ニ付当町北側西ハ塩屋町地境、東ハ紺屋ノ関地境石垣先へ竹垣致度、若舟方御差支ニ相成候節、何時ニ而も取払候趣届ケニ被参候ニ付、承り置候、則六月廿五日糠屋八兵衛波留場へ参り候節見受候処、紺屋ノ関地境米や町之方大工参り、凡間数十五六間ノ所、竹垣大造ニ致居候ニ付、同町鍵屋半兵衛儀ハ右振合能相弁へ罷在候仁、殊ニ太郎兵衛存合候方故、立寄入訳申咄し、町内ハ一札取置候事、但し空地一件当用之袋ニ入有之候、

京都八朔御礼

東御奉行

一、佐野肥後守様

金子三百疋 目録台
下ケ札付

御用人

御取次

敷山儀助様

松原久蔵様

〃

横井権十郎様

長嶋藤兵衛様

〃

〃

水野啓次様

今中兵助様

〃

〃

小林丹治様

〃

〃

右七軒へ銀三匁つゝ

御公事方

御公事下

山田釵次郎様

御池

榎橋平蔵様

御池

〃

喜多尾八郎右衛門様

石嶋五三郎様

〃

〃

平尾演左衛門様

塩津惣五郎様

〃

〃

中尾勇右衛門様

加納萬五郎様

〃

右四軒へ金百疋つゝ

〃

森孫六様

〃

吉竹勝左衛門様

〃

田村此右衛門様

〃

森善右衛門様

〃

〃

〃

〃

〃

〃

大嶋荒治郎様

〃

西御奉行

一、三橋飛驒守様

金子三百疋 目録台
下ケ札付

御用人

御取次

武藤貫三様

小林与作様

〃

久保嘉十郎様

〃

〃

吉原直様

浅野一郎様

〃

〃

〃

石川二郎様

右七軒へ銀壹両つゝ

〃

御公事方

御公事下

深谷平左衛門様

上田八蔵様

〃

〃

飯室助左衛門様

廣瀬佐野右衛門様

〃

〃

下田庄右衛門様

酒井宗助様

〃

〃

砂川金左衛門様

山田傳左衛門様

〃

〃

真野八郎兵衛様

浅賀傳兵衛様

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

真壁辰右衛門様 三

〃

柏原治部右衛門様 古

右八軒へ銀壹兩つゝ

町代

田内与助殿へ、銀貳兩

筆工

奥田九右衛門殿へ、銀壹兩

下町代

藤澤傳六殿

〃 鳥目廿疋つゝ

藤村佐市殿

東西御門番へ三百文つゝ、 東西中番中へ三百文つゝ、

上町代中へ五百文 下町代中へ五百文

小番中へ三百文 追分丸屋四郎兵衛へ百文

山科大津屋孫兵衛へ百文

宿鍵屋佐助へ三百文

〃 下女中へ貳百文

〆金三兩三歩 五百文貳つ

銀貳兩包壹つ 三百文六つ

銀壹兩三十二 貳百文三つ

百文貳つ

右之通勘三郎、三郎兵衛相勤、供新八、荷持平四郎

当所八朔御礼

一、石原庄三郎様

金子貳百疋、目録台、下ケ札付

御元〆

柴山泰蔵様

〃

内堀繁太様

〃

篠田牧太郎様

御町役

〃 曾根源次郎様

〃 三好順之助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ金百疋宛

小頭

川嶋惣右衛門様

小頭目附兼帯

手塚傳重郎様

御目附

柿沼小平太様

〃

佐久間又兵衛様 右四軒へ銀壹兩つゝ

当駅肝煎

吉本弥四郎殿

稻葉半七殿

〆五軒へ鳥目廿疋宛

御門吟助殿 五百文

同 内へ 貳百文

舟方下

北出雲平様

惣年寄

小野宗九郎殿

〃

矢嶋藤五郎殿

町代

堀猪三郎殿

〃

遠藤仁右衛門殿

右五軒へ銀壹兩つゝ

山本俵五郎殿

小遣式人

白崎久太夫様 御蔵番三人

御門内新建、組屋敷不残、平蔵町年寄

貝屋七兵衛殿、当町内年寄

右不残手札二而相勤候事、

右之通太郎兵衛、七兵衛、供清吉

七月晦日

一、篠田牧太郎様御病氣二付、為御見舞之白砂糖一曲、代六匁壹分、差上候、尤赤ノ井一件御掛り役二付、相勤候事、

八月五日

一、北出雲平殿子息、当四月ノ見習被仰付候趣咄し被致候故、為御肴料と南鏡壹片遣候、尤先例者如何取計有之候哉不相分候へ共、時節之振合二応し如斯取計候事、

同日

一、南鏡壹片牧野九郎兵衛様へ為御肴料と持参、

是ハ寛政年中船改帳七冊、先船方岡田大八様へ内分掛御目二置候処、岡田様大坂へ御引越二相成、跡役牧野様へ申上候処、大坂表岡田様へ御掛合被下御下ケ被下候二付、一寸挨拶二参り候、記し迄二遣し候事、

一、從御役所野洲郡野村江御書付壹通、幸便二遣し候様被仰聞候へ共、よき便り無之故、幸ひ江頭方仕立飛脚参り候故、此飛脚江相頼、賃錢百七十式文遣し候様添状いたし、八月八日巳刻過右飛脚江相渡、右飛脚名前江頭作治江渡、

一、八月十四日、御役所御差紙 滋賀郡片田浦庄兵衛

// 北濱村

片田浦ハ即刻藤七忰へ渡、

北濱村ハ差飛脚へ遣ス、

片半ノ受取書有之、

七月四日、中保町坂本新兵衛義、坂本行荷物此節別而淋敷相成候二付、幸ヒ際川辺二私所持之田畑も有之義二付、少々畑作致し度候故、此度小艀壹艘借り受申度、右畑へ通ひ申候義二付、是迄際川ノこへ取艀二上り、在所ノおろし肥積帰り、少々宛船賃取之候義二御座候、右私田畑へ艀二而往返致し候序二上り、在所ノ肥し積行候へハ少々ノ助成も有之、尤上ノ在所ノ衆中へ咄し致し見申処、随分左様致し候様被申呉候義二候へハ、御仲間之所御聞届二被下度段頼来り、御聞届被下候上ハ、際川艀之所おろしこへ積申間敷段、御仲間ノ被仰付被下度、此義度々相頼候義二付、此方ノ申候ハ、外ならぬ其方ノ相頼候義承知不致与申二而ハ無之候へ共、際川艀之義、当浦ノ積帰り候儀二候へハ、随分差留候義ハ心安候へ共、尤おろしこへノ事、是迄咎メも不致候へ共、是迄村方之者仕来り候義、今改メ而差留候而ハ此方二而差而不構候へ共、右是迄少々宛ノ助成も有之事ヲ差留、其方ノ積前二相成候時者、村方二不筋成事ながら心能も不思議、左有時者当仲間ハ格別、其方ヲ恨ムル理二当り可申、始終参り候村方之儀心能被思者、其方ノ為方ニ宜かるましく、只其方之心得二而入魂致し候事、宜敷義二可有之、此節坂本行も淋敷渡世二難成、甚難義致し候事故、当村方ニ幸畑も有之事二候へハ、少々農作致し度、艀二而通ひ候節上ノ在所ノこやし、当分此方ノ艀二も積

行度、坂本行賑敷相成候節ハ積不申、当分之所隙ニテ難渋之趣ヲ申入、先方納得致し候様申込、当分納得致し候へハ、自然と未々其方之積前二相成候道理ニ当り呉候も、右躰ノ儀此方ヲ申筋ニテハ無之、其方ノ以意和順ニ取計ひ候様申聞候処、委細承知之旨ニ而引取候事、右後年心得之ため、記し置候者也、

一、八月十九日、御役所、

急キ御書付忝通、堅田浦船年寄 飛脚鯉清渡ス、

御配賦 忝通 本片田同所行 賃錢十六文先取

御配賦 忝通 下笠村行 同村磯八へ渡ス、

九月廿四日持参致し候二付、即刻当役人中へ配らせ候事、

一、松たけ 甘本

右ハ例年之通石山寺より到来致候事、

一、惣年寄小野宗九郎殿永々病氣、先達而死去蜜葬有之候処、其後枝むらら養子有之、八月廿八日七つ時表向葬礼有之候二付、仲間方例之通白銀壹両、為香典遣ス、勘三郎持参いたス、

当津相撲世話方之内、砂子嶋与八、伊吹山弥市兩人来り、此度舟頭町荒見川佐五七勸進元二而、相撲興行仕候二付、相撲場嶋関ハ最寄宜場所柄ニ御座候間、晴天七日之間御かし被下度、別而火之元念入、故障申分不出来様一円引受、聊中間方へ難渋懸ケ申間敷との趣二而、右地所挨拶与して錢十貫文并見物棧敷一間、通札廿枚差出し可申との趣を以、右兩人より達而相頼候事故、中間相談之上かし遣し申候、尤右拾貫文先取相对也、則通札相添勸進元持参致候、

大相撲七月十六日大入初日、十七日より打出し候、

但し嶋之関之儀ハ相撲場ニかし申間敷、先役留帳ニ記し有之、此誤ハ銘々舟付之者、或ハ押手共相撲ニ心を留メ仕業も不致、肝心之渡世方愈り、殊ニ北行積下り荷物ハ夫々揚ケ渡し候へ共、舟其儘差置身分ハ勝手儘ニ相撲見ニ罷歸り、勝手ケ間敷事計増長いたし不宜候故、嶋之関を貸申間敷与有之候儀ニ御座候、しかしながら何事も時節之振合ニ応し懸引可致との申伝ニ任せ、相談之上見計かし遣し申候、尤相撲方より受取候錢十貫文并札代、中間勘定ニハ省断、嶋ノ関土砂舟入堀へ落込、過半堀中埋り、旧冬堀浚臨時入用多懸り、又々其内ニハ手入レも廻り候間、右等之類を賄候積りニ相当テ候相談ニ而、中間益ニハ致不申候事、

相撲中

一、当役各々申合せ、会所明き不申様繰合し、見物ニ参り候事、

一、銘々舟付之者并押手共、肝心之渡世を欠キ相撲見ニ参り候事ハ相成不申、尤非番ニ而見物ニ参り候ハ、神妙ニ可致、無其儀候ハ、急度可申付、前以老分之物へ申渡し置候事、

一、小舟入小舟之者加子共、是又右同断之事、前以上下小舟之惣代へ申聞置候事、

右相撲中雨天統キ、乍併無滞相勤り候事、

野田源藏方相続人則親類定八子息名跡ニ相成被申、八月廿九日渋川屋六兵衛引付二而当会所へ被参、野田浦之儀ハ三ヶ浦廻船付込、右二付帳屋万端不相変是迄之通含呉候様相頼被申、尤堅田浦へハ登り懸ケ立寄相頼置、八幡浦へハ帰村之上罷越し候様被申之、尚又三ヶ浦会合之節、宜取合せ相頼被申候二付承り置候、

右二付鯉式本、赤貝七つ差出され、晦日算用ニ遣ひ申候、

諸白式升

片田、八幡へ八扇子式本つゝ、持參被致候事故、返礼無之、当所方半切五百枚書状相添返礼二遣ス、

九月二日未ノ下刻

一、御役所より急キ御書付壹通、飛脚大六出入ノ長八仕立遣ス、
右ハ勢田渡船場詰八ヶ浦年寄中へ、早々相届候様被仰付候二付、即刻仕立飛脚を以相届ケ候事、但し賃錢貳百文先取申遣ス、

石原庄三郎手代

先触

曾根源治郎

百艘始

覚

一、山駕籠

壹挺

此人足二人

一、具足櫃

壹荷

此人足壹人

一、人足 五人

内 兩掛 貳荷

合羽籠 壹荷

竹馬 壹荷

步竿 壹組

人足八人

右者石原捨之進明六日曉七つ時大津御役所出立、矢橋迄乗船二而野洲郡北桜村為檢見御用被罷越、日歸二候条、得其意書面之人足御定之賃錢請取之、無差支可被繼立候、此先触早々繼送り、北桜村方可被相返候、以上、

割印 戌九月五日

石原庄三郎手代

百艘、矢橋、草津、守山、
野洲郡北桜村

曾根源治郎印

右宿々村

問屋

庄屋中

年寄

外二御書附壹通、左之上書

書付 石 庄三
石 捨之進

江州野洲郡北桜村

右之通貳通、御箱入二し而、御使彦七殿御持參二付、即刻矢橋浦江相達候事、

九月五日午ノ刻

八月廿八日、矢橋浦与兵衛船加子貳丁二而旅人四十五人乗せ、昼七つ時過二小舟入着船之砌、右乗り合之内年ノ比三十才計之男壹人湖中へ身投候二付、船中騒キ加子之者あハて居申候処、折節八町紀伊国屋宿引小舟入浜へ下り折合、早束水中へ懸ケ入相助ケ、小舟入之者共も懸ケ付、俱々無難引上ケ様子相尋候へ共、入水人逆上いたし、言舌も難分り、依之乗合中二相尋候処、船中二おゐて見怪しミ候事ハ無御座、外二申分も無御座由被申之、無相違候得共懸り合二候間、乍氣之毒乗合中不殘小舟入二差留メ置、即時二其由矢橋浦へ申遣し、当所船方御懸り牧野様宅へ内々ニ而参り、仮初ながら旅人之足留メ致候事故、右之次第申述相含メ候処、何れ否哉明朝迄二可申来与被仰引取申候、扱右入水人堅田屋吉兵衛方へ入レさせ、早々太閤町医師菊池氏相招キ見せ申候処、手足厥冷いたし脈躰悪敷、乍併一命無

別条候との容躰二付、薬用致させ候処、追々胸も開キ候二付、様子承り候処、加州出生之者二而、当時京都二罷在、三条烏丸東へ入ル平弥方二半季居奉公致、今ハ奉公引、当節加州山中湯治二罷越し候積り二而、江州長濱迄参り候処臨時用出来、同所二而人を雇ひ書付入風呂敷包持せ、帰京之折柄如此次第、右平弥方二罷在候新八与申者并射塚梅安与申者方二而委細ハ相知レ候由申之、然ル処戌下刻矢橋源兵衛、次右衛門被登候二付、始末申談し候処、矢橋方二而取計弁事能趣二付、其意二任せ候、且又差留置候乗合中、今以取留メ有之候二付、度々催促を受困り方、矢橋兩人江申述、早々乗り合預ケ置候、先々江勝手次第二被立帰候様、四廻りを以申遣し候、舟方牧野様御宅江午夜分七兵衛、矢橋次右衛門同道二而参り、先刻御内分申上候もの快ク候間、只今矢橋へつれ帰り度趣双方より申上、引取申候、夜中矢橋へ引取被申候、入水人申候二ハ、雇人をつれ居申候様申之候得共、左様之ものハ居不申、察る所舟中之混雜二紛レ雇人其場を忍び、京都射塚氏方へ手寄ヲ求、小舟入二而投身之次第を相知らせ候趣二より、廿九日射塚氏小舟入を尋来り候二付、小舟入平六案内致参り、則及面談候処、矢橋方へ文通二而懸ケ合呉候様相頼候へ共、矢橋浦心配之義を申述、直々矢橋江被参候様申聞遣し申候、矢橋浦二而面談之上引渡され、一件無故済寄之由、承り候、右二付舟方牧野様御宅へ昼も内届二参り、又々夜分も戸をたゝき参り候故、酒三升遣し申候事、

- 一、醫師太間町菊池氏、薬礼矢橋浦を致され候事、
 - 一、小舟入吉兵衛方、何角矢橋浦を致され候事、
 - 一、式百文、八町紀伊国屋宿引へ矢橋浦を挨拶被致候由、
- 是ハ宿引身投を助ケ候挨拶也、夫二ハ輕微成取扱之由、跡二而承り心得候事、

一、小舟之者共へ矢橋を挨拶有之候へ共、舟方同志ハ相互之由断を申、受ケ不申との事二御座候、

一、酒五升、中間方へ矢橋を到来いたし候事、

右之通持参被致候二付、跡を返礼済寄之挨拶旁廻り新助を以體吉本、赤貝貳つ持せ遣ス、代五匁五分也、

九月十三日午ノ刻

一、御役所御書付書通 勢田渡舟場
八ヶ浦船年寄

右之御書付夕方迄二相届候様被仰付候二付、飛脚として廻り清吉遣ス、九月十五日、從御役所御渡し被成候御配符式通、左之通、追而本文運上銀大津橋本町古望仁兵衛方二て懸改候間、得其意納人印形持参可致候、已上、

湖上船運上銀、来月朔日より五日迄持参上納可致候、遅滞致間敷候、此配符令請印早々順達、留り所より可相返候、已上、

大津

(御印影写)
戌九月十五日 御役所 当年者此処
二角印なし

大津川道まで
右浦々庄屋、船年寄

同刻下坂本川崎町市三郎へ渡ス、

一、右同断書通

まつ本方伊庭まで
右浦々庄屋、船年寄

同日松本浦舟年寄へ為持遣ス、使新七

口演

一、船御運上銀、来月朔日を五日迄二無遅滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所を百艘会所江御返し可被成候、以上、

戌九月十五日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、
五郎八、善兵衛、源六

石原庄三郎手代

先触

曾根源次郎
小高丹藏

自百艘黒部村迄

覺

一、御用長持

壹棹

此人足四人

一、具足櫃

壹荷

此人足壹人

一、山駕籠

壹挺

此人足三人

一、垂駕籠

三挺

此人足六人

一、人足九人

内 兩掛六荷 合羽籠壹荷
竹馬壹荷 步竿持壹荷

合人足貳拾三人

右者当作毛為檢見、石原捨之進明廿日曉七時大津御役宅出立、左之
通被相越候条得其意、書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遲滯
差出、渡舟、川越等之場所者從前宿及通達、無差支様可被取計候、
且村々送迎人足之儀者、例年之通之通申合、無間違可差出候、尤
泊村之儀檢見手續二寄治定難致候得共、先為心得相達候、人数之儀
者上下拾五人之積可被相心得、此先触早々順達、留村方可被相返候、

以上、

御印) 九月十九日

石原庄三郎手代
小高丹藏印
江並左中印

三宅新右衛門印

曾根源次郎印

百艘、矢橋、草津、守山、武佐、^{廿一日泊}愛知川、高宮、鳥居本、
米原、長濱、^{廿一日泊}曾根、木尾村米田、古橋、上野、池奥、龍岸寺、
力丸、^{廿二日}北野、^{廿三日泊}谷口、龍安寺、黒部

右宿々

村々

問屋中

庄屋

年寄

追而輕尻馬壹疋用意可給候、以上、

別ニ御廻状壹通、箱入封付

廻状 石 庄三

石 捨之進

江州浅井郡

曾根村始

右者九月十九日午ノ刻下り御役所方御渡し被成候二付、^印速刻矢橋浦
へ相達し候事、小舟入迄之使多七、

重陽御礼

当地御役所御礼之義、関東若君竹千代様御逝去二付、三月十一日迄
御停止故差扣へ、十三日相勤申候事、尤三郎兵衛御内玄関へ参り候て、

畑宗六様へ御案内申差上ケ申候事、但し袴羽織ニ而相勤申候事、

石原庄三郎様 青銅百疋、木札付

御元々

柴山泰蔵様

御元々

内堀繁太様

〃

篠田牧太郎様

町役

曾根源次郎様

〃

三好順之介様

船方

牧野九郎兵衛様

右六軒へ鳥目五十疋つゝ、

右之外者相廻り不申候事、

一、御元々内堀繁太様此節御病氣ニ而、御見舞として太白式斤入壱箱、

但し操足、砂糖代十式匁、箱代式匁式分

右九月十九日七兵衛持参致候事、

一、九月廿一日、例之通貴婦祢御神酒、役人不残相祝ひ候事、

隠居年寄大津町組浄依殿相招キ候事、

忠兵衛、定太郎、市兵衛折節少々不快二付、不参候事、

覚

一、百廿四銅 壺 一、式十四銅 五

一、四拾八銅 壺 一、拾式銅 十六

一、三十六銅 式

〃

右之通奉納仕候、已上、

戌九月廿一日

貴布祢御社中

百艘印

金蔵堀ニ有之候次郎左衛門船三つ縄、八月廿二日夕紛失二付、地内其外京町質や中尋合候処、相知レ不申候二付、船主次郎左衛門御目附手塚傳十郎様宅へ参り、内々含置候、然ル所九月廿二日御目附様より之使次郎左衛門方へ参り、只今牢屋敷へ罷出候様との義二付早束参り候処、右縄盗取候もの此節囚られ候二付、表向キ御役所へ相届候様、御目附様御三人御立会ニ而被仰渡、早束左之通御届申上候事、

乍恐口上書

一、当仲間治郎左衛門持船字金蔵堀ニ有之、右船之三つ縄式筋、先月廿

二日紛失仕、依之所々相尋候得共今以相知不申、全何もの欺盗取候儀与奉存候二付、此段御訴奉申上候、以上、

百艘仲間

戌九月廿二日

年寄太郎兵衛印

大津

御役所

右御届書町代遠藤仁右衛門殿付添、町方御役所番方御当ばん一井隼太様へ差上ケ候、即刻御目附御三人様宅へ太郎兵衛参り、口上を以其由申上歸り候、

船方御懸り牧野九郎兵衛様江も、口上を以右之段御届ケ申上置候事、

針江へ遣し候状之覚

以手紙得御意候、追日秋冷相増御座候処、弥御安康被成御座奉珍賀候、然者先達而ハ御入来被下、緩々得貴顔大慶奉存候、其后も預御書面早速貴答可申上候処、何角与繁用ニ取紛及遅答候、右被仰聞候一件三ヶ浦及相談候処、其節荒方御咄し申上候道理ニて、新規船持立之儀ハ何方ニ而も不容易之儀ニ付、此度之儀も相談難相調趣ニて、貴答申上候様、何れも被申之、思召ニ不相叶候義ハ千万御氣之毒ニ奉存候へとも、何分右之通之義ニ付、差支多、此段御推察可被下候、且又獵船ニ成共願上度段被仰聞候へ共、是以差支筋ハ同様之儀ニ奉存候、先者右不熟之段乍御氣之毒以書中及御答候条、如斯御座候以上、

九月廿一日

百艘年寄

針江幸左衛門様

右八廿五日同人舟へ遣ス、

九月晦日午ノ刻、御書付志通

大津
書付 御役所 勢田渡舟場二而
八ヶ浦舟年寄

此御書付今日中相届可申旨被仰付候ニ付、則飛脚として廻り新八遣ス、

針江方ノ返状左之通

先便へ御報書被成下慥ニ相達、忝拜見仕候、先以時節寒冷相増候へ共、其御表各々様為御揃益御勇健可被遊御座段、珍重御儀奉存候、然ハ

先達而ハ御繁用之御中御面倒之儀御願ひ奉申上候処、其段御聞達御

承知被成下、忝奉存候、然ル所其後追々御申弁へ被成下、且先月中旬三ヶ浦様御参会之節御風聴等被仰下候所、逆茂不相成段各々仰可被聞段、無抛義ニ付、其段相心得可申段御伝仰被成下御尤ニ奉存、委細畏り奉承知候、随而私御願申上度所ハ、万一右獵船名前等之小舟ニ而も不相叶儀ニも御座候へハ、是迎も不及是悲事ニ奉存候へ共、左候へハ兼而申上置候小池重右衛門之儀ハ、古来右小舟古株等御座候ニ而、右所持被致候儀ニ御座候哉、若無其故して小舟所持被致候義ニ御座候へハ、私も右小池同様ニ所持仕度義を御願ひ申上候義ニ御座候、右小池浦古株御いけ御会所表御古帳御吟味御しらへ可被下候儀、先達而御願申上候へとも、此度仰被聞候処、且私願ひ不相叶由其旨可相心得段而已御報書被下置、依而其段承知候へとも、前文申上候小池古株有無之義何共不仰聞故、乍失礼此段今一応御尋迄御願ひ申上度、為其右奉得貴意度候、恐惶不備、

針江村

十月十一日

幸左衛門

百艘

御年寄中様

貴下

十月廿六日申下刻出、

一、御役所より御配符志箱、堅田浦始、同所西之切喜兵衛へ相渡ス、

同

一、同段 下笠始

下笠馬場礮七舟、則礮七へ

十月廿七日午下刻ニ相渡ス、

×

戌十月廿七日午ノ上刻ニ参ル

大津

書付 御役所 勢田渡船場ニテ

八ヶ浦舟年寄

杵通 則即刻廻り太七へ為持遣ス、尤賃銭貳百文先取致し遣ス、

戌十月卅日午ノ刻参ル、

大津

書付 御役所 せた渡船場ニテ

八ヶ浦舟年寄

杵通 即刻廻り新七へ為持遣ス、尤賃銭貳百文先取ニ渡し遣ス事、

西御奉行

十一月二日

一、三橋飛驒守様

江戸御下向

追分迄御出迎、石場御見送り、七兵衛、三郎兵衛相勤、供新助

十月卅日

一、諸白貳升

坂本町組

生鯛貳尾

忠兵衛

かき

右同人方先頃方造船中事多、其中御小兒病氣ニ而、猶更出勤も不参
ニ相成、此節造船無滞出来、御小兒も追々快方ニ付、不参中之挨拶旁、
右之品差出され候、則晦日算用寄中飯ニ遣ひ、一統打潤ひ候事、

八幡浦忠兵衛船加子金兵衛、源次郎、乙吉米積登り、十一月七日夕
金蔵堀ニ有之候処、蔵橋町かごや与惣忰与吉与申もの、右船へ遊ひ

二這入、晩景与吉船方帰り之節、右母親見懸ケ怪しミ、つれ合与惣
へ申告候処、同人船之様子尋ニ参り候処、舟中ニ而双方詞荒ニ相成
帰服不致、依之即刻与惣百艘会所へ申参り候ハ、私忰与吉船中へ引
入博奕催し候躰ニ候間、右船を示し呉候様届ケニ来り候ニ付、泊り
番方早束右船差留相糺し候処、重毛乗り金兵衛申候ハ、米上ケ先へ
受取を集ニ参り候跡ニ而、残り加子かるた事致候迄ニ而、外ニ紛敷
儀ハいたし不申由申之候ニ付、何角穿鑿ニおよび申付居候処へ、御
目付方七日夕泊り番之もの二年寄付添、御役所へ罷出候様御呼出し
ニ付、八日朝清次郎、七兵衛、御目附吟味場へ罷出候処、惣年寄矢
嶋藤五郎殿付添ニ而、御目附手塚様、垣沼様御立会御糺し被成候ハ、
不残名前御書取被成候上、夜前此方共供廻り与惣百艘方へ申参り候
趣、泊り番之もの承り、船方之取締ハ如何致候哉与御尋ニ付、清次
郎答候ハ、即刻加子共呼付ケ、船中次第相調らへ候処、夜も及深更
依之船差留メ置、八日朝年寄共立会相糺し居申候処へ、私共御呼出
しニ付驚人、何分此度之儀ハ御免成し遣し被下度申上候処、全躰船
方取締不行届故右躰之儀出来致候間、此度之儀ハ此方共限りニ差置
候得共、兼而ハ其向キニ而ハ難相済、已来右躰之儀無之様、急度取
締いたし候様被仰付候事、

右ニ付御挨拶与して、左之通遣し候事、

御目附

御目附

一、諸白貳升 手塚傳十郎様

一、諸白貳升 垣沼小平太様

同

一、同 貳升 佐久間又兵衛様 一、並酒貳升 惣年寄藤五郎殿
右之通被仰付候ニ付、同夕地船加子共、押手乗り之もの呼寄せ、尚
又得与取締申渡し置候、勿論何方ニ而も必賭席江寄り付申間敷、得
与示し置候、直乗り長三郎、今七相招キ、自分ハ猶更舟付押手之も

の二至迄、必賭席江立寄申間敷、他浦二懸り船之節杯氣を被付候様、
訳而申聞置候、当浦二懸り居申候他浦之船ともハ、夫々船宿へ廻り
新助を以申遣し置候事、

九月廿三日木濱彦右衛門舟を幸津川へ引寄せ、同所御地頭稻垣若狭
守様納米百六拾五俵積登し、又候廿七日二同九拾七俵与納屋米七拾
五俵積入出船、西浦へ渡り、真野濱二懸り合居候所を、堅田浦方見
付候二付、船引留メ三ヶ浦廻船浦不顧、右躰不埒成取計難相濟、則
堅田浦二舟差留メ及対談候処、同領野田金三郎并幸津川小平二を以
相詫、依之兩人挨拶二入候二付、已来取メ申渡し、心得違無之様一
札を取置候事、則写し左之通、

一札之事

一、当九月廿七日幸津川村御納米九拾七俵并納屋米七拾五俵、都合百七
拾式俵積入、真野濱へ渡り付候処、堅田浦方三ヶ浦廻船之掟不相立
趣二而、御引留被置、不筋之趣、則幸津川村問屋清蔵、同断善次郎
江被仰聞候処、少々間違之儀二付、心得違之御返答被申上候故、段々
御利解被仰聞候段、御尤二奉存候二付、私共兩人罷出取喫仕度御頼
申上候得共、御聞濟難被成被仰聞候得共、押而御頼申上候二付、無
抛御聞入被下候段忝奉存候、猶又木濱村彦右衛門儀茂同様之御断申
上候得共、別段御掛合之上舟年寄并村役人調印之一札御取置可被成
旨被仰聞候故、左候而者彦右衛門自分之難渋二相成儀御座候得者、
甚氣之毒二存候間、本人壱人之調印二而事濟被成下候様御断申上候
二付、格別之御勘弁を以御聞濟被下候段、忝奉存候、然ル上ハ已来
右躰三ヶ浦之廻船之差障二相成候儀、急度為相守可申候、為後日一
札仍而如件、

堅田浦問屋

文化十一年

甲戌十月日

金三郎印
幸津川村

小平次印

船主木濱村

彦右衛門印

三ヶ浦

御年寄中

戌十一月廿六日午刻二参ル、

大津

差紙 御役所 勢田詰

八ヶ浦年寄

老通 則小舟入宗六遣ス、式百文先取

十一月十七日、御諸司代酒井讚岐守様御登二付、石場迄御出迎、太

郎兵衛、七兵衛、供清吉

翌十八日、八丁迄御見送り、三郎兵衛、勘三郎、供多七

但し十七日石部御立、当所御泊り、

戌十二月三日亥刻二参ル、

大津

差紙 御役所 勢田詰

八ヶ浦年寄

飛脚小舟入市兵衛、則賃錢三百文先取ニて遣ス事、請取書亥下刻届
ケ申候、

一、十二月四日八時半時、從御役所御配符式箱相届候様申参ル、せた櫓打耆挺二付四百文掛り、当月十五日限古望仁兵衛方可相納旨之御配符、本堅田始南濱迄三十九ヶ所

下笠始伊庭迄十九ヶ所、申刻山田元浜半六江頼遣ス、賃錢四十八文申遣ス、尤下笠江便り無之故、右之通取計、

十二月六日午上刻二來ル、

大津

差紙 御役所 勢田詰

八ヶ浦年寄

耆通飛脚太七、賃錢貳百文先取、

(※この間、白紙あり)

当所寒中御伺

石原庄三郎様 真鴨一掛 白木台、下ヶ札付

御元々

柴山泰藏様

〃

内堀繁太様

〃

篠田牧太郎様

御町役

曾根源次郎様

〃

三好順之助様

舟方

牧野九郎兵衛様

右六軒江南鏢耆片宛

小頭

川嶋惣右衛門様

同兼帯御目付

手塚傳十郎様

御目付

柿沼小平太様

〃

左久間又兵衛様

右四軒江白銀耆両宛

舟方下役

北出雲平殿、名札計

右之外御門内御手代衆、組屋敷、新建不殘、手札二而十二月五日

太郎兵衛、勘三郎、相勤ル、供新助

十二月五日、京都寒氣見舞

東御奉行

佐野肥後守様

御用人

敷山儀助様

〃

長嶋藤兵衛様

〃

今中兵助様

真鴨耆掛、二重くり台、下ヶ札付
取次

松原久蔵様へ上ル、

御取次

松原久蔵様

〃

横井権十郎様

〃

水野啓次様

〃

小林丹治様

右七軒へ手札計

御公事方

山田釵次郎様

石嶋伍三郎様

塩津宗五郎様

加納萬五郎様

✂右四軒へ南鐐壹片つ、

御公事下

楠橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾演左衛門様

中尾勇右衛門様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

森善右衛門様

大嶋荒次郎様

✂右手札計

西御奉行

三橋飛騨守様

御用人

武藤貫三様

真鴨老掛、二重くり台、下ケ札付

御取次

久保嘉十郎様

〃 辻本仁左衛門様

〃 吉原直様

右者関東へ御下り被成御留主中なれと、御役御免と申二而ハ無之、御病氣故御養生中御下り候義二而、御家中も右之通御残り被成候事二而、何方も相勤候趣二付、右之通取計候事、

御公事方

深谷平左衛門様

飯室助左衛門様

砂川金左衛門様

御公事下

上田八蔵様

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗助様

真野八郎兵衛様

下田庄左衛門様

✂五軒へ南鐐壹片つ、

山田傳左衛門様

浅賀傳兵衛様

杉原作十郎様

真壁辰右衛門様

柏原治部右衛門様

✂右手札計り

田内与助殿へ

若狭屋八兵衛殿へ

✂金壹両貳朱

銀三匁

銀三匁

鱈壹本

右之通五日朝三郎兵衛、清治郎相勤ル、供太七

一、入江吉兵衛様 金百疋

同心

一、山田庄之助様へ 南鐐壹片

右八瀬田橋御掛り二付、寒中御伺旁々御挨拶ニ参寄候事、

右寒氣見舞之節、三郎兵衛、清二郎 参ル、

覚

一、御納豆 五拾杷

右者従御前様例年之通被下置、難有頂戴仕候、以上、

戊 甲十二月十五日

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

大津

百艘印

一、金子百疋

右者従当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶、從御前様被下置、慥二頂戴仕候、以上、

大津
百艘印

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金貳百疋

右者当戌年为御挨拶被下置、慥二頂戴仕候、以上、

文化十一年

百艘印

戌十二月

膳所御役人中様

右者十二月廿五日、膳所船奉行永田郷右衛門様御使桜田重作殿御持参二付、右受取書相渡、

十二月廿七日

一、米壹俵

右者例年之通石山寺を参り候事、

覚

一、金子百疋

右者朽木様を例年之通被下置、慥二受取申候、以上、

百艘年寄

文化十二年亥年

帳場判

正月

御用達

升屋市左衛門殿

右八戌之暮被下置候へ共延引二相成、当正月十四日二参り候故、正月之日附二受取書遣入、

(裏表紙)

八拾九番

百艘

「大津百艘船万留帳」全体目録

番号	年号	番附	原本	抜書帳	収録
1	(延宝九年～ 天和三年)	番附外	○	—	1
2	(元禄二年～ 享保十六年)	八番	○	×	
3	安永三年(断簡)	不明	△	×	
4	天明四年(断簡)	五十九番	△	×	
5	寛政八年	七十一番	○	×	
6	寛政九年	七十二番	○	×	2
7	寛政十年	七十三番	○	×	
8	寛政十一年	七十四番	○	×	
9	寛政十二年	七十五番	○	×	
10	寛政十三年	七十六番	○	×	3
11	享和二年	七十七番	○	×	
12	享和三年	七十八番	○	×	
13	享和四年	七十九番	○	×	
14	文化二年	八十番	○	×	4
15	文化三年	八十一番	○	×	
16	文化四年	八十二番	○	×	
17	文化五年	八十三番	○	×	
18	文化六年	八十四番	○	×	5
19	文化七年	八十五番	○	×	
20	文化八年	八十六番	○	×	
21	文化九年	八十七番	○	×	6
22	文化十年	八十八番	○	○	
23	文化十一年	八十九番	○	○	
24	文化十二年	九十番	○	○	
25	文化十三年	九十一番	○	○	
26	文化十四年	九十二番	○	○	
27	文化十五年	九十三番	○	○	
28	文政二年	九十四番	○	○	
29	文政三年	九十五番	○	○	
30	文政四年	九十六番	○	○	
31	文政五年	九十七番	○	○	
32	文政六年	九十八番	○	○	
33	文政七年	九十九番	○	○	
34	文政八年	百番	○	○	
35	文政九年	百一番	○	○	

番号	年号	番附	原本	抜書帳	収録
36	文政十年	百二番	○	○	
37	文政十一年	百三番	○	○	
38	文政十二年	百四番	○	○	
39	文政十三年	百五番	○	○	
40	天保二年	百六番	○	○	
41	天保三年	百七番	○	○	
42	天保四年	百八番	○	○	
43	天保五年	百九番	○	○	
44	天保六年	百十番	○	○	
45	天保七年	百十一番	○	○	
46	天保八年	百十二番	○	○	
47	天保九年	百十三番	○	○	
48	天保十年	百十四番	○	○	
49	天保十一年	百十五番	○	○	
50	天保十二年	百十六番	○	○	
51	天保十三年	百十七番	○	○	
52	天保十四年	百十八番	○	○	
53	天保十五年	百十九番	○	○	
54	弘化二年	百二十番	○	○	
55	弘化三年	百二十一番	○	○	
56	弘化四年	百二十二番	○	○	
57	弘化五年	百二十三番	○	○	
58	嘉永二年	百二十四番	○	○	
59	嘉永三年	百二十五番	○	○	
60	嘉永四年	百二十六番	○	○	
61	嘉永五年	百二十七番	○	○	
62	嘉永六年	百二十八番	○	○	
63	嘉永七年	百二十九番	×	○	
64	安政二年	百三十番	×	○	
65	安政三年	百三十一番	×	○	
66	安政四年	百三十二番	×	○	
67	安政五年	百三十三番	×	○	
68	安政六年	百三十四番	×	○	
69	安政七年 万延元年	百三十五番	×	○	

※「原本」の○は原本が残っているもの

「抜書帳」の○は「留帳目録抜書帳」に記載のあるもの

〔大津古文書輪読会会員〕（順不同・休会者を含む）

秋山恭伸 麻田有代 片岡良昭

鍬田清美 高正昭 谷玲子

橋本豊 林俊介 樋口晶美

福野修三 藤村正人 河野敏子

大村知永子 小浜麻里子 才田是

井上知枝

大津市歴史博物館調査報告書12

大津百艘船万留帳 6

編集・発行

大津市歴史博物館

〒五二〇—〇〇三七

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七—五二二—二二〇〇

発行日

令和八年（二〇二六）三月三十一日

印刷

有限会社 竹田膳写堂